ニコライ・レーニン著
西雅雄譯

（レーニン重要著作集）

カール・マルクス

東京
白揚社出版

本書ハマルクス主義ヲ説明シタルモノナルガ其ノ目的ハプロレタリヤノ革命運動ヲ宣傳煽動スルニアリト認メラル

禁止 十二年

Lenin, Vladimir Ilich

レーニン著
西雅雄譯

カール・マルクス

レーニン重要著作集

東京白揚社刊

譯者序

本書はマルクスおよびマルクス主義に獻げられたレーニンの論文十七篇をロシア語全集第三版によつて飜譯編纂したものである。配列の順序についていへば、極めて一般的内容を有する『カール・マルクス』以下四篇は、年代に拘泥しないで卷頭に收められ、第五篇以下は年代順になつてゐる。マルクスおよびエンゲルスからの引用はすべて原本および邦譯と照合されてゐる。

これらの論文の大部分はすでに色々の形で邦譯紹介されてゐる。これらの邦譯のうち、永田廣志氏譯『マルクス主義の基礎理論』(昭和五年、共生閣版)、瓜生信夫・直井武夫兩氏共譯『マルクス、エンゲルス、マルクス主義』(昭和十一年、ナウカ社版)、伊藤弘氏譯『カール・マルクス他五篇』(昭和十一年第二刷、岩波文庫版)の三種は、本書の飜譯に際して參照させて戴き、敎へられるところが多かつたことを感謝せねばならぬ。これらの邦譯のテキストはそれぞれ異つてゐるが、本書においては專ら全集版によつたこと、この種の論文を殘らず一纏めにして提供したこと――これが本書の特色といへばいへよう。

全十七篇のうち本書によつて初めて紹介されるものは、第一篇の附録二の書簡、第二篇のカウツキーのベルンシュタイン批判の評論、第一二篇『パウル・ジンガー』、第一五篇『ヨゼフ・ディーツゲンの二十五年忌によせて』の四つである。

一九三六年九月六日

譯　者

目次

―（終）―

レーニン著
西雅雄譯

カール・マルクス

——外十六篇

カール・マルクス

一九一四年七―十一月に書かれ、最初はグラナート百科辭典（第七版）、第二十八巻に掲載されたもの。（註一）

カール・マルクスは一八一八年新曆五月五日トリール市（ライン・プロシャ）に生れた。彼の父は辯護士で、ユダヤ人であつたが、一八二四年に新敎へ改宗した。家庭は裕福で、文化的であつたが、革命的ではなかつた。トリールの中學校（ギムナジウム）を卒へた後、マルクスは、初めはボン、次いでベルリンの大學へ入り、法律學を、だが何よりも多く歷史と哲學とを硏究した。一八四一年學業を卒へて、彼はエピクロス哲學に關する學位論文を提出した。その見解においてはマルクスは當時まだヘーゲル派＝觀念論者であつた。ベルリンにおいては彼は、ヘーゲル哲學から無神論的および革命的結論を引き出さうと努めてゐた『左翼ヘーゲル派』（ブルーノ・バウエルその他）の仲間に屬してゐた。

大學を卒へた後、マルクスは教授になるつもりでボンへ移つた。しかし一八三二年にルードウィッヒ・フォイエルバッハの講座を奪ひ、一八三六年にはまたもや彼が大學へ入ることを拒み、そして一八四一年には若き教授ブルーノ・バウエルがボンで講義する權利を奪つた政府の反動的政策は、マルクスをして學究生活を斷念せしめた。ドイツにおける左翼ヘーゲル主義の諸見解の發展は、この時代に非常に急速に前進した。殊にルードウィッヒ・フォイエルバッハは一八三六年以來神學を批判し、唯物論に轉向し始める、そしてこの唯物論は彼にあつては一八四一年に完全に優位を占める(『キリスト敎の本質』)。一八四三年には彼の『將來の哲學の根本問題』が現はれた。『人はこれらの書物の解放的影響を自ら經驗しなければならなかつた』——とエンゲルスは後にフォイエルバッハのこれらの著作について書いた。『我々』(即ちマルクスをも含めて左翼ヘーゲル派)『は忽ちフォイエルバッハ主義者となつた』。この頃、左翼ヘーゲル派と接觸點を持つてゐたライン地方の急進的ブルジョアは、ケルンにおいて反對派の新聞『ライン新聞』(一八四二年一月一日から出始めた)を創刊した。マルクスとブルーノ・バウエルとは主要寄稿家として招聘されたが、一八四二年十月マルクスは主筆となり、ボンからケルンへ移つた。新聞の革命的=民主々

義的傾向はマルクスの編輯の下に益〻決定的なものとなつたので、政府は先づ新聞を二重三重の檢閲に附し、やがて一八四三年一月一日それを全く閉鎖することに決した。マルクスはこの時主筆の地位を退かねばならなかつたが、彼の引退もやはり新聞を救ふことができないで、それは一八四三年三月閉鎖された。『ライン新聞』におけるマルクスの最も大なる論文のうち、エンゲルスは、下にあげたもの（文獻參照）の外に、なほモーゼル峽谷における葡萄栽培農民の狀態に關する論文を指摘してゐる。新聞の仕事はマルクスに、彼が經濟學に不十分にしか通じてゐないことを示したので、彼は熱心にその研究に着手した。

一八四三年マルクスは、すでに學生時代から婚約の間柄であつた幼な友達のイェニー・フォン・ウェストファーレンとクロイツナッハで結婚した。彼の妻はプロシャの反動的な貴族の出であつた。彼女の兄は最も反動的時代の一つ、一八五〇―一八五八年におけるプロシャの內務大臣であつた。

一八四三年の秋、マルクスは、アーノルド・ルーゲ（一八〇二―一八八〇年、左翼ヘーゲル派、一八二五―三〇年は獄中にあり、一八四八年以後は亡命者、一八六六―七〇年以後はビスマルク派）と共に外國で急進主義的な雜誌を發行するために、パリへ赴いた。この雜誌『獨佛年誌』は

第一冊が出ただけであつた。それはドイツにおける秘密頒布の困難のため、およびルーゲとの意見の相違のために、中絶した。マルクスはこの雜誌におけるその諸論文においてすでに革命家として現はれ、『現存するすべてのものゝ假借なき批判』および特に『武器の批判』を宣言し、大衆とプロレタリアートとに呼びかけてゐる。

一八四四年九月、フリードリヒ・エンゲルスがパリへ來て數日間滯在し、この時以來マルクスの最も親密な友人となつた。彼等二人は當時のパリの革命的グループの沸騰せる生活に最も熱心に參加し(こゝでは、マルクスがその著作『哲學の貧困』、一八四七年、において決定的に清算したプルードンの學說が特殊な意義を持つてゐた)、そして小ブルジョア的社會主義の種々の學說と嚴しく鬪爭しつゝ、革命的プロレタリア的社會主義または共產主義(マルクス主義)の理論と戰術とを作り上げた。下の文獻について、この時代、卽ち一八四四―一八四八年のマルクスの諸著作を參照せよ。一八四五年マルクスはプロシャ政府の强い要求によつて、危險な革命家として、パリから追放された。彼はブリュッセルへ移つた。一八四七年の春マルクスおよびエンゲルスは、秘密の宣傳結社『共產主義者同盟』に加はり、この同盟の第二回大會(一八四七年十一月ロンド

ンにおけるもの）に參加して優れた役割を演じ、大會の委任によつて、一八四八年二月に出版された有名な〝Das Kommunistische Manifest〟を起草した。この著作のうちには新しい世界觀、卽ち社會生活の領域をも包括するところの徹底的な唯物論、發展に關する最も全面的にして深刻なる學說としての辨證法、階級鬪爭と新しい……社會の創造者たるプロレタリアートの世界史的な……役割との理論が、天才的な明晰さと明白さとを以て描かれてゐる。

一八四八年の二月革命が勃發した時、マルクスはベルギーから追放された。彼は再びパリへ赴き、そこから、三月革命の後、ドイツ、特にケルンへ赴いた。そこでは一八四八年六月一日から一八四九年五月十九日まで『新ライン新聞』が發行された。マルクスが主筆であつた。新しい理論は一八四八―四九年の革命的事件の進行によつて輝かしく確認された、その後世界のすべての國々のすべてのプロレタリア的および民主々義的運動がそれを確認したと同樣に。勝利を占めた反革命は初めはマルクスを裁判に附し（一八四九年二月九日無罪となつた）、後にはドイツから追放した（一八四九年五月十六日）。マルクスは先づパリへ赴き、一八四九年六月十三日の示威運動の後そこからも追放されてロンドンへ行き、そこに死に至るまで居住した。

亡命生活の諸條件は、マルクスとエンゲルスとの往復書簡（一九一三年に出版された）によつて特にはつきり示されてゐるが、極めて困難なものであつた。窮迫はマルクスと彼の家族とを直接に息詰まらせた。エンゲルスの不斷の獻身的な財政的支持がなかつたなら、マルクスは『資本論』を完成しえなかつたのみならず、貧困の壓迫の下に不可避的に仆れてゐたことであらう。その上、小ブルジョア的な、一般に非プロレタリア的な社會主義の支配的な學說や流派は、マルクスをして不斷に假借なき鬪爭に、時には極めて狂暴且つ野蠻な人身攻擊の反駁に赴くことを餘儀なくさせた（『フォークト氏』）。亡命者の仲間から離れて、マルクスは多くの歴史的著作において（文獻參照）その唯物論的理論を仕上げ、主として力を經濟學の研究に獻げた。マルクスはこの科學をその著作『經濟學批判』（一八五九年）と『資本論』（第一卷、一八六七年）とにおいて革命化した（下のマルクスの學說參照）。

五十年代末および六十年代の民主々義運動の躍動の時代は再びマルクスを實踐的活動に呼びよせた。一八六四年（九月二十八日）ロンドンにおいて有名な第一インターナショナル、『國際勞働者協會』が創立された。マルクスはこの協會の魂であり、その最初の『創立宣言』や數多の決

議、聲明、宣言の起草者であつた。種々の國の勞働者運動を統一し、種々の形態の非プロレタリア的、先マルクス主義的社會主義（マッチニ、プルードン、バクーニン、イギリスの自由主義的トレード・ユニオニズム、ドイツにおけるラッサール派の右翼的動揺等々）を共同的活動の水路へ導くことに努め、これらすべてのセクトや學派の理論と鬪爭しつゝ、マルクスは種々の國々における勞働者階級のプロレタリア鬪爭の統一的戰術を鍛へ上げた。マルクスがあのやうに、深刻に、的確に、輝かしく且つ効果的に、革命的に評價した（『一八七一年フランスにおける内亂』）ところのパリ・コンミューン（一八七一年）の倒壞の後、そしてバクーニン主義者によるインターナショナルの分裂の後、ヨーロッパにおけるインターナショナルの存在は不可能となつた。マルクスはハーグにおけるインターナショナルの大會（一八七二年）の後、インターナショナルの總務評議會のニューヨークへの移轉を實行した。第一インターナショナルはその歴史的役割を終へ、世界のすべての國々における勞働者運動の測り難く大なる成長の時代、即ち廣さにおけるその成長、個々の民族國家の土臺の上における大衆的な社會主義勞働者黨の創設の時代に席を讓つた。

インターナショナルにおける激しい活動と更に一層激しい理論的な仕事とは、マルクスの健康

を決定的に破壞した。彼はその經濟學の加工と『資本論』の完成とを續けて、數多の新しい材料を蒐集し、多くの國語（例へば、ロシア語）を研究したが、病氣は彼に『資本論』を完成することを許さなかつた。

一八八一年十二月二日彼の妻が死んだ。一八八三年三月十四日マルクスはその安樂椅子のなかで靜かに永眠した。彼はその妻および殆ど家族の一員であつた忠實な女中ヘレネ・デムートと共に、ロンドンのハイゲート墓地に葬られてゐる。

マルクスの學說

マルクス主義はマルクスの見解と學說との體系である。マルクスは、人類の三つの最も先進的な國に屬する十九世紀の三つの主要な思想的潮流、即ちドイツの古典哲學、イギリスの古典經濟學およびフランスの革命的諸學說一般と關聯したフランスの社會主義の、繼承者であり天才的な完成者であつた。世界のすべての文明國の勞働者運動の理論および綱領としての近代唯物論と近代の科學的社會主義とを總體的に與へるところの、彼の見解の、マルクスの敵手によつてさへも

認められてゐる卓越した徹底さと完全さとは、我々をしてマルクス主義の主要內容卽ちマルクスの經濟學說の敍述に先立つて、彼の世界觀一般の簡單な槪要を述べることを必要ならしめる。

哲學的唯物論

マルクスの見解が形成された一八四四—五年以來、彼は唯物論者であり、特にL・フォイエルバッハの追隨者であつた、後にはフォイエルバッハの弱い方面を專ら彼の唯物論の徹底性と全面性とが不十分な點に見たけれども。フォイエルバッハの世界史的な、『劃時代的な』意義を、マルクスはまさにヘーゲルの觀念論からの決定的分離と唯物論の宣揚とのうちに見た。そしてこの唯物論はすでに『十八世紀には、特にフランスにおいては、現存する政治制度に對する鬪爭であつたのみならず、それと共に宗敎および神學に對する、そしてまた……あらゆる形而上學(「正氣の哲學」とは異つた「酩酊した思辨」といふ意味での)に對する鬪爭であつた』(『遺稿集』における『神聖家族』)。『ヘーゲルにとつては——とマルクスは書いた——彼が理念の名の下に獨立的主體に轉化してゐる思惟過程は、現實的なものゝデミウルグ(造物主、創造者)である……私に

あつては反對に、觀念的なものは、人間の頭腦のなかで變形され飜譯された物質的なものに外ならない』(『資本論』第一卷、第二版への序文)。マルクスのこの唯物論哲學と完全に一致し且つそれを敍述しつゝ、フリードリヒ・エンゲルスは『反デューリング論』――マルクスはこの著作を原稿で知つてゐた――においてから書いた、……『世界の統一はその實有にあるのではない……世界の眞の統一はその物質性にある、そしてこのことは……哲學および自然科學の長い且つ遲々たる發展によつて證明されてゐる。……運動は物質の存在樣式である。何時且つ何處においても運動なき物質は存在しなかつたし、また存在しえない。……運動なき物質は、物質なき運動と同樣に考へえられない。……もし人が……思惟および意識とは何であり、そしてそれらは何處から生ずるかと問ふならば、人はそれらが人間の頭腦の產物であること、また人間自身が彼の環境のうちに、そして環境と共に發展したところの自然の產物であることを見出すであらう。然らばその場合、窮極において實にまた自然の產物たる人間の頭腦の所產は、爾餘の自然の聯關と矛盾しないで、これに照應することが自ら明かになる』。『へーゲルは觀念論者であつた、卽ち彼にとつては彼の頭腦の思想は現實の物と事象との多かれ少かれ抽象的な模寫(Abbilder, 映像、時にはエ

ンゲルスは「刻印」といつてゐる）とは考へられないで、反對に、ヘーゲルにとつては、物とその發展とが世界以前に何處かにすでに存在する「理念」の實現された模寫とのみ考へられたのである』。フリードリヒ・エンゲルスがそのなかでフォイエルバッハの哲學に對する自己とマルクスとの見解を叙述してゐるところの、そしてエンゲルスがヘーゲル、フォイエルバッハおよび唯物史觀の問題に關する一八四四―五年の彼とマルクスとの古い原稿を豫め再讀した後、これを印刷に附したところの、その著作『ルードウィッヒ・フォイエルバッハ』において、エンゲルスはかう書いてゐる、『すべての哲學、殊に近代の哲學の根本問題は、思惟と實有……精神と自然との關係の問題である。……精神と自然と何れが本源的かといふ、この問題に對する考へ方につれて、哲學者は二大陣營に分裂した。自然に對する精神の本源を主張し、從つて窮極において何等かの種類の宇宙創造を認容した人々は……觀念論の陣營を構成した。それに反して、自然を本源的なものと見た人々は、唯物論の種々の流派に屬してゐる』。（哲學的）觀念論および唯物論の觀念のこれと異つたあらゆる用ひ方は混亂に導くにすぎない。マルクスは、常に何等かの仕方で宗敎と結びついてゐる觀念論のみならず、また特に今日普及されたヒュームとカントとの見地、不可知論、批判

主義、種々の形の實證論をも決定的に否認して、この種の哲學は觀念論への『反動的』讓歩であり、精々『唯物論を內々で受け容れながら世間の眼の前ではこれを否認する羞しがりのやり方』と看做した。この問題については、エンゲルスとマルクスとの前記の著作の外に、一八六六年十二月十二日附エンゲルス宛のマルクスの手紙を見よ。そこではマルクスは、有名な自然科學者T・ハックスレーの普通以上に『唯物論的な』進出と、『我々が現實に觀察し思惟する限りでは、我々は決して唯物論の外へ出ることができない』といふ彼の告白とを指摘しつゝも、彼には不可知論、ヒューム主義の方面への『逃口』があることを非難してゐる。特に自由と必然との關係に對するマルクスの見解を指摘しなければならぬ。『必然はそれが意識されない限りは盲目的である。自由とは必然への洞察である』（エンゲルス『反デューリング論』）。これは自然の客觀的合則性と必然の自由への辨證法的轉化（認識されてはゐないが、認識されうる『物自體』の『我々にとつての物』への轉化、『物の本質』の『現象』への轉化と並んで）の承認である。フォイエルバッハの唯物論をも含めて（ビュッヘル＝フォークト＝モレショットの『俗流』唯物論はなほ更のこと）、次の點が、古い唯物論の根本的缺點である、とマルクスおよびエンゲルスは考へた。（一）この

唯物論が『主として機械的』であつて、化學および生物學の最近の發展を（そして今日では、更に電氣學的物質論を、と附言すべきであらう）考察してゐないこと。（二）古い唯物論が非歷史的であり、非辨證法的（反辨證法的といふ意味において形而上學的）であり、發展の見地を徹底的に全面的に貫徹させなかつたこと。（三）それらが『人間の本質』を抽象的に理解して、（具體的＝歷史的に規定された）『すべての社會關係』の『總體』として理解せず、從つて、世界の『變革』が問題であるのに、それを『解釋』したにすぎなかつた、即ち『……實踐的活動』の意義を理解しなかつたこと。

辨證法

發展に關する最も全面的な、內容豐富な、そして深刻な學說としてのヘーゲル辨證法を、マルクスおよびエンゲルスはドイツ古典哲學の最大の成果と看做した。發展、進化の原則の他のあらゆる定式化を、彼等は一面的で、內容貧弱で、自然および社會における發展（往々飛躍、破局、……を以てする）の現實の進行を不具にし畸形にするものと看做した。『マルクスと私とは、意

識的な辨證法を』（ヘーゲル主義をも含めて、觀念論の混亂から）『救ひ出して、自然および歷史の唯物論的な見方に移し入れたところの、殆ど唯一者であつたであらう』。『自然は辨證法の證明である、そして……近代自然科學はこの證明のために極めて豐富な』（これはラヂウム、電子、元素の變化等々の發見前に書かれたのである！）『日毎に堆積される材料を提供し、かくして自然における物の經過は窮極において辨證法的であつて、形而上學的ではないといふことを證明してゐる』。

『世界は出來上つた物の複合體と解すべきではなくて、――とエンゲルスは書いてゐる、――過程の複合體と解すべきである、この過程において、外見上固定してゐる諸々の事柄も、我々の頭腦におけるその思想的映像、卽ち概念と同樣に、生成と消滅との不斷の變化を閱するのである……といふ偉大な根本思想――この偉大な根本思想は、特にヘーゲル以來、普通世人の意識に移つてゐるのであつて、かういふ一般的な點では殆ど何等の異論を見出さないまでになつてゐる。しかしそれを文句において認めることゝ、研究における各々の領域においてそれを個々に實現することゝは、別である』。『その（辨證法的哲學の）前には窮極的なもの、絕對的なもの、神聖な

ものは何物も存在しない。それはすべてのものについてまたすべてのものにおいて消滅性を指示する。そしてそれの前には生成と消滅、低きより高きに至る無限の上昇の不斷の過程以外の何物も存在せず、そして思惟する頭腦におけるその單なる反映が、この哲學なのである』。かくして辨證法は、マルクスによれば、『外界並びに人間の思惟の運動の一般法則の學』である。

ヘーゲル哲學のこの革命的な方面を、マルクスは受け容れ且つ發展させた。辨證法的唯物論は『他の諸科學の上に立つ何等の哲學をもはや必要としない』。從前の哲學から殘るところは『思惟とその法則とに關する學問――形式論理學と辨證法である』。だが辨證法は、マルクスの理解においては、そしてまたヘーゲルに從へば、今日認識論、グノーセオロギーと呼ばれてゐるところのものを自らのうちに包括してゐる。そしてこの認識論もまた同樣に、自己の對象を歷史的に考察して、認識の起源と發展、無智から認識への移行を研究し一般化さなければならぬ。

今日においては、發展、進化の觀念は殆どすつかり社會意識に這入つてゐるが、それは他の道を通じてゞあつて、ヘーゲル哲學を通じてゞはない。けれども、ヘーゲルに立脚しつゝ、マルクスおよびエンゲルスが與へた定式化における この觀念は、流行してゐる進化の觀念よりも遙かに

全面的であり、遙かに内容豐富である。すでに經過した諸段階をいはゞ繰返すところの、だがそれらを前とは異つて、ヨリ高い基礎の上に繰返すところの發展（『否定の否定』）、直線によるのではなくて、いはゞ螺旋による發展。――飛躍的な、破局的な、革命的な發展。――『漸次性の中斷』。――量の質への轉化。――與へられた物體に對して、または與へられた現象の限界内において、または與へられた社會の内部において作用するところの、種々の力と傾向との矛盾、衝突によつて與へられる發展への内的衝動。――各々の現象のすべての側面の相互依存性と最も密接な、不可分的な聯闘（この場合歷史は絶えず新しい側面を明るみへ出す）、統一的な、合法則的な世界的運動過程を與へる聯闘、――かくの如きが、發展に關するヨリ多くの内容を有する（普通のものよりも）學說としての辨證法の若干の特徴である（一八六八年一月八日附エンゲルス宛のマルクスの手紙參照、そこでは、これを唯物辨證法と混同するのは馬鹿げてゐるところのシュタインの『無器用な三分法』が嘲笑されてゐる）。

古い唯物論が不徹底であり、不完全であり、一面的であるといふ意識は、マルクスを『社會に關する科學を唯物論的基礎と調和させ、この基礎の上に再建すること』が必要であるといふ確信に導いた。もし唯物論が一般に意識を存在から說明して、その逆でないとすれば、人類の社會生活への適用において、唯物論は社會的意識を社會的存在から說明することを要求する。『工學は——とマルクスはいふ（『資本論』、第一卷）——自然に對する人間の能動的關係、彼の生活、從つてまた彼の社會的生活諸條件およびそれから生ずる精神的諸表象の直接的生產過程を明かにする』。人間の社會とその歷史とに敷衍された唯物論の根本命題の完全な定式化を、マルクスは『經濟學批判』の序文において次の言葉で與へた。

『人間はその生活の社會的生產において、一定の、必然的な、彼の意志に依存しない諸關係を、卽ち彼の物質的生產諸力の一定の發展段階に照應する生產關係を結ぶ。これらの生產關係の總體は社會の經濟的構造、卽ち法律的および政治的上層建築がその上に立ち、一定の社會的意識形態がそれに照應するところの、眞實の土臺を形成する。物質的生活の生產樣式は社會的、政治的および精神的生活過程一般を制約する。人間の意識が彼の存在を規定するのではなくて、反對

に彼の社會的存在が彼の意識を規定する。その發展の或る段階において、社會の物質的生産諸力は、その內部で今まで動いてゐた現存する生産諸關係と、または、たゞその法律的表現にすぎないのだが、所有關係と矛盾するに至る。これらの關係は生産諸力の發展形態からその桎梏に轉化する。こゝにおいて eine Epoche sozialaer Revolution が始まる。經濟的基礎の變化と共に、walzt sich der ganze ungeheure Ueberbau langsamer oder rascher um. かゝる變革の考察においては、人は常に經濟的生産諸條件における物質的な、自然科學的に忠實に確認しうる變革と、人間がよつて以てこの衝突を意識し且つそれと戰ふところの、法律的、政治的、宗敎的、藝術的または哲學的の、約言すればイデオロギー的の諸形態とを區別しなければならぬ。

『人は一個人が何であるかを、彼が自ら考へてゐることによつて判斷することができないと同樣に、かゝる變革時代をその意識から判斷することはできぬ。寧ろ人はこの意識を物質的生活の矛盾から、社會的生産諸力と生産諸關係との間における現存の衝突から說明しなければならぬ。……極く大づかみには、アジア的、古代的、封建的および近代ブルジョア的生産樣式を經濟的社會構成の累進的諸時代として印づけることができる』。(一八六六年七月七日附エンゲルス宛の手

紙におけるマルクスの短い定式化、『生産手段による勞働組織の規定といふ我々の理論』參照)。

唯物史觀の發見、またはもつと正確にいへば、社會現象の領域への唯物論の徹底的な延長、擴張は、從來の歷史理論の二つの主要な缺點を除いた。第一に、從來の歷史理論は、精々たゞ人間の歷史的活動の觀念的動機を考察するのみであつて、これらの動機が何によつて喚び起されるかを研究せず、社會的諸關係の體制の發展における客觀的合則性を捉へず、これらの諸關係の根源を物質的生産の發展段階のうちに觀取しなかつた。第二に、從來の理論はまさしく住民大衆の行動を包括しなかつた。然るに史的唯物論は自然史的正確さを以て大衆の生活の社會的諸條件とこれらの條件の變化とを研究する可能性を初めて與へた。マルクス以前の『社會學』と歷史敍述とは、精々、斷片的に寄せ集められた素材的事實の堆積と、歷史的過程の個々の方面の敍述とを與へたにすぎない。マルクス主義は、經濟的社會構成の發生、發展、沒落の全包括的な、全面的な研究への道を指示して、すべての矛盾的傾向の總體を考察し、それらを種々の社會階級の正確に規定される生活および生産の諸條件に還元し、個々の『主導的な』觀念の選擇又はそれらの解釋における主觀主義と恣意とを排除し、例外なくすべての觀念またはすべての諸傾向の根源を物質

的生産力の狀態のうちに暴露した。人間は自ら自己の歷史を創造する。しかし人間、そして特に人間大衆の動機は何によつて決定されるか、矛盾的な觀念や傾向の衝突は何によつて喚び起されるか、人間社會のすべての大衆のこれらすべての衝突の總體は如何なるものであるか、人間のすべての歷史的活動の土臺を作り出す物質的生活の生產の客觀的諸條件は如何なるものであるか、これらの條件の發展法則は如何なるものであるか、——すべてこれらのことにマルクスは注意を向け、そしてそのすべての巨大な多面性と矛盾性とのうちにおける統一的な、合則的な過程としての、歷史の科學的研究への道を指示したのである。

階級鬪爭

與へられた社會の或る成員の志向が他の成員の志向と背馳すること、社會生活が矛盾に滿ちてゐること、歷史が我々に諸民族や諸社會の間、そしてまたそれらの內部における鬪爭を示し、その上になほ革命と反動、平和と戰爭、停滯と急速な進步または沒落の時期の交替を示すこと、これらの事實は周知のことである。マルクス主義は、この外見上の迷宮と混亂とのうちに合則性を

發見せしめる導きの絲、即ち階級鬪爭の理論を與へた。たゞ與へられた社會または社會群のすべての成員の志向の總體の研究のみが、これらの志向の結果の科學的規定に導くことができる。そして矛盾的な志向の源泉たるものは、各〻の社會が分裂してゐる諸階級の生活の狀態および條件における差異である。『すべての從來の社會の歷史は、――とマルクスは〟Das Kommunistische Manifest〝においていふ（原始共同體の歷史を除いて、とエンゲルスはこれに附加へてゐる、――階級鬪爭の歷史である。自由民と奴隸、貴族と平民、領主と農奴、同業組合の親方と職人、一言にすれば壓迫者と被壓迫者とが、互ひに不斷に對立し、或ひは隱然、或ひは公然の不斷の鬪爭を、いつも mit einer revolutionären Umgestaltung der ganzen Gesellschaft 終るか、又は鬪爭する諸階級の共倒れを以て終つた鬪爭を行つた……封建社會の沒落から生れた近代ブルジョア社會は階級對立を止揚しなかつた。それはたゞ新しい階級、壓迫の新しい諸條件、鬪爭の新しい形態を古いものと置きかへたにすぎない。けれども我々の時代、ブルジョアジーの時代は、それが階級鬪爭を簡單化したことによつて特徵づけられる。全社會は愈〻益〻二つの大きな敵對的陣營に、互ひに直接對立する二つの大きな階級、ブルジョアジーとプロレタリアートとに分裂

する』。フランス大革命の時代以來、ヨーロッパの歴史は、一聯の國々において、諸事件のこの眞實の裏面、卽ち階級鬪爭を特にはつきりと明示した。そしてすでにフランスにおける王政復古の時代は、出來事を一般化する際に、階級鬪爭を全フランス史の理解の鍵と認めざるをえなかつた一聯の歷史家(ティエーリ、ギゾー、ミニエ、ティエール)を輩出した。だが最近の時代、卽ちブルジョアジーの完全な勝利、代議制、廣汎な選擧權(普通選擧ではないとしても)、大衆の手に入る、安い日刊新聞等々の時代、有力な、そして益々廣汎になる勞働者の團結と企業家の團結等等の時代は、諸事件の原動力としての階級鬪爭を(非常に屢々一面的な、『平和的な』、『合法的な』形態においてであるとはいへ)更にはつきりと示した。マルクスの〝Das Kommunistische Manifest〟の次の個所は、マルクスが社會科學に對して、近代社會における各々の階級の發展條件の分析と關聯して、各々の階級の狀態の客觀的分析の如何なる要求を提示したかを示してゐる。『今日ブルジョアジーに對立してゐるすべての階級のうちで、たゞプロレタリアートのみが eine wirklich revolutionäre Klasse である。爾餘の諸階級は大工業の發展と共に沒落し且つ滅亡する。然るにプロレタリアートは大工業の最も固有な產物である。中間的諸身分、卽ち小工業

家、小商人、手工業者、農民、すべて彼等は、中間的諸身分としての彼等の存在を沒落に對して確保するために、ブルジョアジーと戰つてゐる。從つて彼等は革命的ではなくて、保守的である。しかのみならず、彼等は反動的である、彼等は歷史の車輪を逆轉せしめようとする。彼等が革命的であるとすれば、それは彼等が彼等の前に迫つてゐるプロレタリアートへの移行といふ點においてゞあり、彼等が彼等の現在の利益ではなくて、彼等の未來の利益を擁護する限りにおいてゞあり、彼等が彼等自身の立場を棄てゝ、プロレタリアートの立場に立つ限りにおいてゞある』。

一聯の歷史的著作において(文獻參照)、マルクスは唯物論的歷史敍述、即ち各〻の個々の階級および往々階級の種々の群または層の狀態の分析の輝ける深刻な模範を與へ、何故また如何にして『すべての階級鬪爭が政治鬪爭である』かを明瞭に示した。我々によつて引用された斷片は、マルクスがすべての合成的な歷史的發展を考慮するために、社會關係や、或る階級から他の階級への、過去から未來への移行の段階の如何に複雜な綱を分析してゐるかを、例解してゐる。

マルクスの理論の最も深刻な、全面的な、そして詳細な確證と適用とは、彼の經濟學說である。

マルクスの經濟學說

『この著作の窮極の目的は——とマルクスは『資本論』の序文においていふ——近代社會の』即ち資本主義的、ブルジョア的社會の『經濟的運動法則を暴露することとである』。與へられた、歷史的に規定された社會の生產諸關係をそれらの發生、發展および沒落において硏究することと——かくの如きがマルクスの經濟學說の內容である。資本主義社會においては商品生產が支配してゐる、だからマルクスの分析は商品の分析を以て始まる。

價　値

商品は、第一に、人間の何等かの需要を充たすものであり、第二に、他の物と交換されうる物である。物の有用性はそれを使用價値たらしめる。交換價値（または單に價値）は、何よりも先づ或る種類の使用價値の或る數量が他の種類の使用價値の或る數量と交換される場合における割合、比である。日々の經驗は我々に、何百萬、何十億のかゝる交換がありとあらゆる使用價値、

極めて異つてゐて互ひに比較され難い使用價値を絶えず互ひに等置してゐることを示してゐる。社會關係の一定の體制のうちにおいて絶えず互ひに等置されるこれらの異つた物の間における共通のものは一體何であるか？　それらの間における共通のものは、それらが勞働の生産物であるといふことである。生産物を交換することによつて、人間は極めて異つた種類の勞働を等置する。商品生産は、個々の生産者が種々雜多の生産物を作り出し(社會的分業)、そしてこれらすべての生産物が交換において互ひに等置されるところの、社會關係の體制である。從つて、すべての商品のうちにある共通のものは、一定の生産部門の具體的勞働ではなく、一つの種類の勞働ではなくて、抽象的な人間勞働、人間勞働一般である。すべての商品の價値の總額のうちに表示された、與へられた社會の全勞働力は、同一の人間勞働力である。何十億といふ交換の事實がこれを證明してゐる。從つて、各〻の個々の商品はたゞ社會的に必要な勞働時間の成る部分を代表するにすぎない。價値の大いさは、社會的に必要な勞働の數量、または與へられた商品、與へられた使用價値の生産にとつて社會的に必要な勞働時間によつて規定される。『人間は彼等の異種の生産物を交換において價値として互ひに等置することによつて、彼等の異つた勞働を人間勞働と

して互ひに等置する。彼等はそれを意識してゐないが、しかし彼等はそれを行ふ』。價値とは二人の人間の間の關係である――と或る古い經濟學者がいつたが、彼はたゞから附け加へるべきであつた、物的外被によつて蔽はれた關係である、と。或る一定の歴史的社會構成の社會的生産關係、而も大量的な、何十億回となく繰返される交換現象のうちに現はれる關係の體制の見地からのみ、價値とは何ぞや、といふことを理解することができる。『價値としては、一切の商品はただ凝固した勞働時間の一定量にすぎない』。商品のうちに體現された勞働の二重的性質を詳しく分析し盡した後、マルクスは價値形態と貨幣との分析に移つてゐる。マルクスの主要課題は、この場合には、價値の貨幣形態の起源の研究、即ち個々の偶然的な交換行爲（『單純な、個々のまたは偶然的な價値形態』、或る商品の與へられた量が他の商品の與へられた量と交換される場合）から始まつて、一聯の異つた商品が同じく一定の商品と交換される場合の一般的價値形態、およびこの一定の商品、一般的等價物が金である場合の貨幣的價値形態に至るまでの、交換の展開の歴史的過程の研究である。交換および商品生産の發展の最高の産物としての貨幣は、私的勞働の社會的性質を、市場によつて結合された個々の生産者の間の社會的聯關を抹殺し、隱蔽する。マ

ルクスは貨幣の種々の機能を非常に詳しい分析に附してゐるが、この際こゝでも（一般に『資本論』の初めの諸章における と同様に）特に重要なことは、抽象的な、そして時には純演繹的に見える叙述形式が、實際に於ては、交換および商品生産の發展の歴史に關する巨大な事實的材料を再現してゐる、といふことを指摘することである。『貨幣は商品交換の一定の高度を前提する。特殊な貨幣形態、即ち單なる商品等價物、または流通手段、または支拂手段、退藏貨幣および世界貨幣は、それぞれあれやこれやの機能の種々の範圍および相對的優位に從つて、社會的生產過程の極めて種々の段階を表示する』（『資本論』、第一卷）。

剩餘價値

商品生產の發展の或る段階において、貨幣は資本に轉化する。商品流通の定式は、W（商品）――G（貨幣）――W（商品）、即ち他の商品を購買するために或る商品を販賣することであつた。これに反して、資本の一般的定式は、G――W――G、即ち販賣（利潤を伴ふ）のための購買である。マルクスは、廻轉される貨幣の最初の價値のこの增加を、剩餘價値と呼ぶ。資本主義

的廻轉における貨幣のこの『增加』の事實は周知のことである。まさにこの『增加』こそ、貨幣を、特殊な、歷史的に規定された、社會的生產關係としての資本に轉化するのである。商品流通はたゞ等價物の交換を知るにすぎないから、剩餘價値は商品流通からは發生しえない、また買手と賣手との相互の損失と利得とは平均されるであらうし、そして肝要なことはまさに大量的、平均的、社會的現象であつて、個別的現象ではないから、剩餘價値は價格の引上げからは發生しえない。剩餘價値を得るためには、『貨幣の所有者は……市場において、その使用價値自體が價値の源泉たるべき特殊な性質を持つた一つの商品』、即ちその消費過程が同時に價値の創造過程であるやうな商品を發見しなければならぬ。そしてかゝる商品は存在する。それは人間の勞働力である。勞働力の消費は勞働であり、そして勞働は價値を創造する。貨幣の所有者は勞働力を、あらゆる他の商品の價値と同樣に、その生產にとつて必要な、社會的必要勞働時間によつて（即ち勞働者とその家族の生計費によつて）規定されるところの、その價値通りに買ふ。勞働力を買つた後には、貨幣の所有者は勞働力を消費する權利、即ちそれをしてまる一日、例へば十二時間勞働せしめる權利を持つてゐる。然るに勞働者は六時間（『必要』勞働時間）に彼の生計を償ふ生

産物を作り出し、次の六時間（『剩餘』勞働時間）には資本家によつて支拂はれない『剩餘』生産物または剩餘價値を作り出す。從つて、生産過程の見地からみれば、資本において二つの部分、卽ち生産手段（機械、勞働器具、原料等々）に支出される不變資本――その價値は（一度にまたは一部分づゝ）變化なしに完成された生産物へ移る――と、勞働力に支出される可變資本とを區別することが必要である。後の資本の價値は不變のまゝではゐないで、勞働過程において增加し、剩餘價値を作り出す。それ故、資本による勞働力の搾取の程度を表現するには、剩餘價値を資本全體とではなくて、たゞ可變資本とのみ比較しなければならぬ。マルクスがこの比率をさしていつた、剩餘價値率は、例へば我々の例では、$\frac{6}{6}$ 卽ち一〇〇％になる。

資本の發生の歷史的前提は、第一に、商品生産一般の發展の比較的高い水準の下において個々の人間の掌中に一定の金額が蓄積されることであり、そして第二に、二重の意味において『自由な』、卽ち勞働の販賣に對するあらゆる壓迫または制限から自由であり、そして土地および一般に生産手段から自由な勞働者、經營を持たない勞働者、勞働力の販賣による以外に生活の途のない『プロレタリア』の存在である。

剩餘價値の增大は二つの基本的な方法によつて、卽ち勞働日の延長（『絕對的剩餘價値』）と必要勞働日の短縮（『相對的剩餘價値』）とによつて可能である。第一の方法を分析しつゝ、マルクスは勞働日の短縮のための勞働者階級の鬪爭と勞働日の延長のため（十四―十七世紀）およびその短縮のため（十九世紀の工場立法）の國家權力の干涉との素晴らしい繪卷を展開してゐる。『資本論』が現はれて以來、世界の文明諸國における勞働者運動の歷史は、この繪卷を例證する何萬といふ新しい事實を與へた。

相對的剩餘價値の生產を分析しつゝ、マルクスは、資本主義による勞働生產性の向上の三つの基本的な歷史的段階を硏究してゐる。（一）單純な協業、（二）分業とマニュファクチュア、（三）機械と大工業。こゝでマルクスによつて資本主義の發展の基本的な、典型的な特徵がいかに深刻に暴露されてゐるかは、就中、ロシアのいはゆる『クスタール』工業の調査が右の三つの段階の初めの二つのものの例解に關する極めて豐富な材料を與へることから明かである。そして一八六七年にマルクスによつて記述された大機械工業の革命的作用は、それ以來半世紀の間に、幾多の『新しい』國々（ロシア、日本その他）において明かにされた。

更に、マルクスにおいて最高度に重要且つ新しいのは、資本の蓄積、卽ち剩餘價値の一部分の資本への轉化、資本家の個人的な必要または氣まぐれのためではなくて、新しい生產のためのその使用、の分析である。マルクスは、資本に轉化されるすべての剩餘價値が不變資本に投ぜられると考へたすべての從來の古典派經濟學（アダム・スミス以來の）誤謬を指示した。實際においては剩餘價値は生產手段プラス可變資本に分れるのである。資本主義の發展とその社會主義への轉化との過程において巨大な意義を有するものは、不變資本の部分（資本の總額における）が可變資本の部分に比較してヨリ急速に增加することである。

資本の蓄積は、機械による勞働者の驅逐を速め、一極には富を、他極には貧困を作り出しつつ、いはゆる『勞働豫備軍』、『相對的過剩』勞働者または『資本主義的過剩人口』を產出する。この過剩人口は極めて種々雜多の形態を取り且つ極めて急速に生產を擴張する可能性を資本に與へる。この可能性は信用や生產手段における資本の蓄積と關聯して、就中、生產過剩恐慌を理解するための鍵を與へる。この恐慌は資本主義諸國において、定期的に、最初は平均十年每に、その後はヨリ長い且つ不定的な間隔をおいて、やつて來た。資本主義の土臺の上における資本の蓄

積と、いはゆる原始的蓄積、卽ち生產手段からの勞働者の强制的分離、土地からの農民の驅逐、共同地の掠奪、植民地、國債、保護關稅の制度等々とは、區別されなければならぬ。『原始的蓄積』は一極には『自由な』プロレタリアを、他極には貨幣の所有者、資本家を作り出す。

『資本主義的蓄積の歷史的傾向』をマルクスは次の有名な言葉で特徵づけてゐる。『直接的生產者の收奪は最も無慈悲な野蠻さを以て、また最も恥づべき、最も醜惡な、最も卑劣にして惡意ある情熱の衝動の下に行はれる。自ら働いて得た』（農民と手工業者の）『いはゞ個々の、獨立の勞働個體とその勞働條件との融合に立脚するところの私有財產は、他人の、だが形式的には自由な勞働の搾取に立脚する資本主義的私有財產によつて驅逐される。……今や收奪すべきものは、自己の經濟を營む勞働者ではなくて、多くの勞働者を搾取する資本家である。この收奪は資本主義的生產自體の內在的法則の作用によつて、資本の集中によつて行はれる。一人の資本家が多くの資本家を打殺す。この集中又は少數の資本家による多數の資本家の收奪と並んで、益々大規模な勞働過程の協業的形態、科學の意識的な技術的應用、土地の計畫的な利用、勞働手段の共同的にのみ使用されうる勞働手段への轉化、すべての生產手段を結合された社會的勞働の生產手段と

して使用することによるその節約、世界市場網へのすべての民族の巻きこみ、それと共に資本主義制度の國際的性質が、發展する。この變革過程のすべての利益を横領し獨占する資本貴族が不斷に減少すると共に、貧困、壓迫、隷屬、墮落、搾取の量が、だがそれと同時に、絶えず膨脹するところの、資本主義的生産過程自體によつて訓練され、結合され且つ組織化されるところの、勞働者階級の反抗が、增大する。資本獨占は、それと共にまたその下において榮えた生産様式の桎梏となる。生産手段の集中と勞働の社會化とは、それがその資本主義的外被と兩立することができない點に到達する。外被は wird gesprengt. Die Stunde des kapitalistischen Privateigentum schlägt. Die Expropriateurs werden expropriiert.』(『資本論』、第一卷)。

更に最高度に重要であり且つ新しいのは、マルクスによつて『資本論』第二卷において與へられた、全體としての社會的資本の再生産の分析である。こゝでもマルクスは個別的現象ではなくて、大量的現象を、社會經濟の細かな部分ではなくて、總體としてのこの全經濟を取つてゐる。上に指示した古典派の誤謬を訂正しつゝ、マルクスは全社會的生産を二大部門に、即ち(一)生産手段の生産と(二)消費手段の生産とに區分し、そして彼によつて取られた數字的實例に基いて、

從來の規模における生産の場合並びに蓄積の場合における全體としての全社會的資本の流通を詳細に考察してゐる。『資本論』第三卷においては、平均利潤率の形成に關する問題が價値法則を基礎にして解決されてゐる。マルクスにおける經濟學の偉大な前進は、分析が大量的な經濟的現象、社會經濟の總體の見地からなされて、屢々俗流經濟學または現代の『限界効用説』がそれに拘束されてゐる個々の出來事または競爭の外表面の見地からなされてゐないことである。マルクスは先づ剩餘價値の起源を分析し、次いですでにその利潤、利子および地代への分解へ移つてゐる。利潤は企業に投下された全資本に對する剩餘價値の比率である。『高度の有機的構成』の（卽ち不變資本が可變資本に對して平均的社會的資本より以上の規模において優勢な）資本は、平均以下の利潤率を與へる。『低度の有機的構成』の資本は、平均以上の利潤率を與へる。諸資本の間の競爭、或る部門から他の部門へのそれらの自由な移行は、兩者の場合において利潤率を平均利潤率に歸せしめる。與へられた社會の全商品の價値の總額は商品の價格の總額と一致するが、個々の企業および個々の生産部門においては、諸商品は、競爭の影響を受けて、その價値で販賣されないで、消耗された資本プラス平均利潤に等しいところの、生産價格で販賣される。

かくして價格の價値からの背離および利潤の平均化といふ周知の且つ爭ふ餘地なき事實は、價値法則に基いてマルクスによつて完全に説明されてゐる、蓋しすべての商品の價値の總額は價格の總額と一致するからである。しかし價値(社會的の)の價格(個別的の)への歸着は、單純な、直接的な仕方によつて行はれないで、非常に複雜な仕方によつて行はれる。卽ちたゞ市場によつてのみ結合された分散的生産者の社會においては、合則性が平均的、社會的、大量的合則性のうちに、あれやこれやの方面への個別的偏向の相殺の下に現はれるより外には現はれえない、といふことは全く自然のことである。

勞働生産性の向上は、可變資本と比較しての不變資本のヨリ急速な增大を意味する。だが剩餘價値はたゞ可變資本のみの機能であるから、利潤率(全資本に對する剩餘價値の比率であつて、單にその可變的部分のみに對する比率ではない)が低下の傾向を有することは、理解されうることである。マルクスはこの傾向、およびそれを隱蔽しまたはそれに抵抗する一聯の事情を詳細に分析してゐる。高利貸資本、商業資本および貨幣資本に獻げられた第三卷の極めて興味ある諸編の紹介には停まらないで、我々は最も重要な編、地代論へ移らう。農業生産物の生産價格は、資

本主義諸國における個々の所有主によつてすべて占有されてゐるところの土地の面積の制限の故に、平均的な土地ではなくて、最劣等の土地における、市場への生產物の提供の平均的條件下ではなくて、最惡の條件下における生產費によつて決定される。この價格と最優良地における（または最良の條件下における）生產價格との差異は、等差地代または差額地代を與へる。この地代を詳細に分析し、それは個々の土地の豐度が相違する場合に、土地への資本投下の規模が相違する場合に生ずることを指示することによつて、マルクスは、差額地代はたゞ最良の土地から最劣等の土地への逐次的移行の際においてのみ得られる、といふリカルドォの誤謬を完全に暴露した（また『剩餘價値學說史』參照、そこではロードベルトゥスの批判が特別の注意に値する）。反對に、これとは逆の移行もあり、或る部類の土地の他の部類への轉化（農業技術の進步、都市の成長その他のために）もある、だから有名な『土地收益遞減の法則』は、深い誤謬であり、資本主義の缺陷、制限性および矛盾の自然への轉稼である。次に、產業および國民經濟一般のすべての部門における利潤の平均化は、競爭の完全な自由、或る部門から他の部門への資本の自由な流動を前提する。然るに土地の私有は、この流動の障碍物たる獨占を作り出す。この獨占の故に、ヨ

り低度の資本構成および從つて個別的にはョリ高い利潤率によつて區別されるところの農業生産物は、利潤率の平均化の完全に自由な過程のうちに入らない。獨占者としての土地所有者は、價格を平均以上に維持する可能性を與へられてをり、そしてこの獨占價格が絶對地代を生むのである。差額地代は資本主義の存在の下においては廢棄されえないが、絶對地代は、例へば、土地の國有化、卽ちその國家の所有への移行の下においては廢棄されうる。かゝる移行は私有者の獨占の爆破を意味し、農業における競爭の自由のョリ徹底的な、ョリ完全な實現を意味するであらう。だから急進的ブルジョアは、——とマルクスは指摘してゐる、——一度ならず土地の國有化といふこの進步的なブルジョア的要求を以て歷史に現はれたのであるが、しかしこの要求はブルジョアジーの大多數を脅かす、何故ならそれは他の、今日特に重要な且つ『敏感な』獨占、卽ち生産手段一般の獨占に餘りに『近く』觸れるからである、と。(マルクス自身は資本に對する平均利潤と絶對地代とのその理論を、一八六二年八月二日附エンゲルス宛の手紙において極めて通俗、簡潔且つ明瞭に述べてゐる。『往復書簡集』(ディーツ版)、第三卷、七七—八一頁(邦譯、全集、第十九卷、三六—四〇頁)參照。また一八六二年八月九日附の手紙、同上、八六—八七頁(邦

譯、同上、四四—四五頁」比照)。——地代史にとつてまた重要なのは、勞働地代(この場合には農民は地主の土地における自己の勞働によつて剩餘生產物を作り出す)の生產物地代または現物地代(農民は自己の土地において剩餘生產物を生產し、『經濟外的强制』の故にそれを地主に引渡す)への、次に貨幣地代(商品生產の發展の故に、貨幣に轉化された同じ現物地代、舊ロシアの『オブローク』)への、そして最後に、賃銀勞働の助けによつて耕作を行ふ農業における企業家が農民の代りに現はれるところの資本主義的地代への轉化を示すマルクスの分析を指摘することである。『資本主義的地代の創生』に關するこの分析と關聯して、農業における資本主義の進化に關するマルクスの一聯の銳い(そしてロシアの如き後進國にとつて特に重要な)思想を指摘しなければならぬ。『現物地代の貨幣地代への轉化は……無產のそして貨幣のために雇はれる日傭勞働者の階級の形成によつて必然的に導かれるのみならず、それに先行されさへもする。この新しい階級がまだ散在的に出現するにすぎないその發生期においては、それ故、ヨリ良い地位にあつて地代支拂義務のある農民の間に、恰もすでに封建時代に富裕な隸農が自らまた隸農を雇つたやうに、自己の計算で農村賃銀勞働者を搾取する習慣が、必然的に發展した。かくて彼等の間には

一定の財産を集積して、自ら未來の資本家に轉化する可能性が、徐々に發展する。かくて舊來の、自ら勞働する土地所有者自身の間に、その發展は農村の外での資本主義的生産の一般的發展によつて制約されてゐるところの、資本主義的借地農の養成所が發生する』(『資本論』、第三卷、第二册〔エンゲルス版〕、三三二頁)(邦譯、改造社版、三三七頁)。……『一部の農民の收奪と驅逐とは産業資本のために勞働者から彼等の生活手段と彼等の勞働材料とを「解放」するのみならず、それは國内市場を作り出す』(『資本論』第一卷、第二册〔第二版〕、七七八頁)(邦譯、改造社版、七四二頁)。農村人口の貧困化と零落とは、それでまた、資本のために勞働者豫備軍の創造の役割を演ずる。あらゆる資本主義國において『農村人口の一部は、それ故、絶えず都市またはマニュファクチュアの(卽ち非農業的の)プロレタリアートへまさに移行しようとしてゐる。かくて相對的過剩人口のこの源泉は絶えず流出してゐる。……それ故農村勞働者は賃銀の最低限まで引き下げられ、そして片足を常に赤貧の泥沼のなかに突つこんでゐる』(『資本論』、第一卷、第二册、〔第二版〕、六六八頁)(邦譯、改造社版、六三一頁)。農民によつて耕作される土地に對するその私有は、小生産の基礎とその繁榮、それが古典的形態を帶びることの條件である。しかしこの小生産

はたゞ生産および社會の狹隘な原始的な枠とのみ兩立することができる。資本主義の下においては『農民の搾取は工業プロレタリアートの搾取とたゞ形態によつて區別されるにすぎない。搾取者は同一者、資本である。個々の資本家は個々の農民を抵當と高利貸付とによつて搾取し、資本家階級は農民階級を國稅によつて搾取する』(『フランスにおける階級鬪爭』)。『農民の零細地は、資本家には耕地から利潤、利子および地代を引き出すこと、そして耕作者自身には如何にして彼が彼の勞賃を打ち出すかを眺めさせることを許すところの、口實たるにすぎない』。通常農民は資本主義社會、卽ち資本家階級に賃銀の一部をさへ引渡して、『アイルランドの小作人の段階にまで』零落する――『而もすべて私有者であるといふ口實の下に』(『フランスにおける階級鬪爭』)。『零細所有が支配的な國における穀物價格は資本主義的生產樣式の國々におけるよりも低い、といふ原因の一つ』は何にあるか?(『資本論』、第三卷、第二冊〔エンゲルス版〕、三四〇頁)(邦譯、改造社版、三四四頁)。それは、農民が社會へ(卽ち資本家階級へ)無償で剩餘生產物の一部を引渡すことにある。『この低い價格(穀物その他の農業生產物の)は、從つて、生產者の貧困の結果であつて、決して彼等の勞働の生產性の結果ではない』(『資本論、第三卷、第二冊

〔エンゲルス版〕、三四〇頁）（邦譯、改造社版、三四四頁）。小生産の正常的形態たる小土地所有は、資本主義の下においては、貶黜され、絶滅され、滅亡する。『零細所有は、その性質上、勞働の社會的生産力の發展、勞働の社會的諸形態、資本の社會的集中、大規模の牧畜、科學の累進的應用を排除する。高利貸付と租稅制度とは零細所有を到るところにおいて窮乏せしめずにはおかない。土地の購入における資本の投下はこの資本を耕作から引き上げる。生産手段の無限の細分と生産者自身の分散』。（非常に進歩的なブルジョア的役割を演ずるところの小農民のコオペレーションヽ、即ち協同組合は、たゞこの傾向を弱めるだけで、それを絶滅しはしない。このコオペレーションが富裕な農民に多くのものを與へて、貧農大衆には極めて僅かのものを與へ、または殆ど何物をも與へず、次いで協同組合自體が賃銀勞働の搾取者となるといふことをまた忘れてはならぬ）。『人力の莫大な濫費。生産條件の累進的惡化と生産手段の騰貴とは零細所有の必然的法則である』。資本主義は農業においても工業においても、たゞ『生産者の殉教史』の犧牲によつてのみ生産過程を變革する。『ヨリ廣大な地域への農村勞働者の分散は同時に抵抗力を挫くが、他方集中は都市勞働者の抵抗力を高める。都市の工業におけると同樣に、近代的農業においても、高

められた生産力と勞働のヨリ大なる流動化とは、勞働力自體の荒廢と衰弱とによつて購はれる、そして資本主義的農業におけるあらゆる進歩は、勞働者を掠奪するための技術における進歩であるのみならず、同時に土地を掠奪するための技術における進歩でもある。……だから資本主義的生產は、同時にすべての富の源泉たる土地と勞働者とを破滅させることによつてのみ、社會的生產過程の技術と結合とを發展させるのである』(『資本論』、第一卷、第十三章の末尾)。

社會主義

上述したところから明かなやうに、資本主義社會の社會主義社會への轉化の不可避性をマルクスは、全く且つ專ら近代社會の經濟的運動法則から引き出してゐる。數千の形態を取つて益〻急速に前進しつゝあるところの、そしてマルクスの死後過ぎ去つた半世紀の間に、大生產、資本家のカルテル、シンヂケートおよびトラストの成長のうちに、そしてまた金融資本の規模と力との巨大な增進のうちに、特に明白に現はれてゐるところの、勞働の社會化——これが社會主義の不可避的到來の物質的基礎である。この轉化の知識的および道德的原動力、物理的遂行者は、資本主

義自體によつて教育されるプロレタリアートである。ブルジョアジーとのその鬪爭は、種々の、そして益々豐富な内容を有する諸形態のうちに現はれつゝ、不可避的に、プロレタリアートによる××××（『プロレタリアート……』）に向けられるところの、政治鬪爭となる。生産の社會化は生産手段の社會の所有への移行へ、『收奪者の……』へ導かずにはゐない。勞働生産性の巨大な向上、勞働日の短縮、集團的な改良された勞働による小さな、原始的な、分散的な生産の遺物、廢墟の代置——これがかゝる移行の直接的結果である。資本主義は農業と工業との聯關を最終的に絶つが、それと同時に、それはその最高の發展によつて、科學の意識的應用と集團的勞働の結合、人類の新しい分布（農村の荒廢、世界からの孤立、粗野をも、大都市における巨大な大衆の反自然的な集積をも絶滅するところの）を基礎とする工業と農業とのこの聯關、結合の新しい諸要素を準備する。新しい家族形態、婦人の地位と未成年者の教育とにおける新しい諸條件は、近代資本主義の最高の形態によつて準備される。即ち婦人および兒童の勞働、資本主義による家父長的家族の分解は、近代社會においては最も恐るべき、悲慘な、厭ふべき諸形態を不可避的に帶びるが、それにも拘らず、『大工業は、それが家庭の圈外にある社會的に組織された生産

過程において婦人や青少年男女に指示する決定的な役割を以て、家族および兩性關係のヨリ高度の形態を作り出す。キリスト敎的ゲルマン的家族形態を絕對的と看做すことは、古代ローマ的、または古代ギリシャ的、または東洋的形態――序ながら、これらの諸形態は互ひに歷史的發展系列を成してゐる――を絕對的と看做すことゝ同樣に、勿論馬鹿げてゐる。同樣にまた、兩性および種々の年齡の個々人より成る結合された勞働人格の編成は、生產過程が勞働者のために存在するのではなくて、勞働者が生產過程のために存在するところの、その自然發生的に粗野な、資本主義的な形態においては、破滅と隸屬との害毒の源泉であるが、適當な事情の下においては、反對に人間的發展の源泉に轉化せずにはゐない、といふことも明瞭である』(『資本論』、第一卷、第十三章の末尾)。工場制度は『單に社會的生產の向上の一方法としてではなくて、全面的に發展した人間を生產するための唯一の方法として、一定の年齡以上のすべての兒童のために生產的勞働と知育および體育とを結合すべき未來の敎育の萠芽』(同上)を我に示してゐる。たゞ過去の單なる說明といふ意味においてゞはなくて、また未來の大膽な豫見およびその實現に向けられた果敢な實踐的活動といふ意味における、同じ歷史的基礎の上に、マルクスの社會主義は、民族

性や國家の問題をも提起してゐる。民族は社會的發展のブルジョア的時代の不可避的な産物であり不可避的な形態である。そして勞働者階級は、『民族として自らを構成すること』なしには、『民族的』であることなしには(『決してブルジョアジーのいふ意味においてゞはないけれども』)、强力になり、成年に達し、自らを形成することはできなかつた。しかし資本主義の發展は民族的障壁を益〻打破し、民族的特殊性を絶滅し、民族的敵對の代りに die Klassengegensätze を置く。だから發展した資本主義諸國においては、„die Arbeiter kein Vaterland haben“ こと、および少くとも文明諸國における勞働者の『團結した行動』は『その解放の第一條件の一つ』であること(„Das Kommunistische Manifest“)は、完全な眞理である。……、卽ち組織された强制力は、社會が融和し難い諸階級に分裂し、外觀上社會の上に立ち且つ或る程度までそれから孤立した『權力』なしには存在しえないやうな社會の或る發展段階において、不可避的に發生した。階級對立のうちに發生しつゝ、……は『最も有力な、經濟的に支配する階級の』……となる。『そしてこの階級は、また彼の……によつて政治的に支配する階級となり、またかくして被壓迫階級の抑壓および搾取のための新しい手段を獲得する。かくて古代の國家は何よりも先づ奴隷の抑壓

のための奴隷所有者の國家であり、また封建國家は農奴および隷農の抑壓のための貴族の機關であり、そして近代の代議制……は資本による賃銀勞働の××の××である（エンゲルス、『家族、私有財産および國家の起源』、そこで彼は自己とマルクスとの見解を述べてゐる）。ブルジョア國家の最も自由且つ進歩的な形態、民主々義共和國でさへ、少しもこの事實を除去しないで、たゞその形態を變へるにすぎない（政府と取引所との聯關、官吏および新聞の――直接および間接の――買收性等々）。社會主義は階級の……へ導くことによつて、……××へ導く。『國家が――とエンゲルスは『反デューリング論』において書いてゐる――眞實に社會全體の代表者として出現する最初の行爲、即ち社會の名においての生産手段の占取は、同時に國家としてのその最後の獨立的行爲である。社會的諸關係への……權力の干渉は一つ一つの領域において次々と不用となり、やがておのづから×××就く。人間に對する支配の代りに事物の管理と生産過程の指導とが出現する。……は「廢止」されるのではない、それは××するのである』。『生産者の自由且つ平等な聯合の基礎の上に生産を新たに組織する社會は、全……機關を、その時それが屬すべきところへ移すであらう、即ち紡車および青銅の斧と並べて、古物博物館へ』（エンゲルス、『家族、私

有財産および國家の起源』)。

最後に、……時代にも殘存するであらう小農民層に對するマルクスの社會主義の態度の問題については、マルクスの思想を表現してゐるエンゲルスの聲明を指摘しなければならぬ。『もし我我が國家權力を掌握したとしても、我々は、我々が……についてさうすることを餘儀なくされるやうに、小農民を暴力的に收奪する(賠償があらうとなからうと同じことである)といふことは考へることができない(であらう)。小農民に對する我々の任務は、先づ、暴力によらないで、實例とその目的への社會的援助の提供とによつて、彼の私的經營および私的所有を協同組合的のものに導き入れることにある。そしてその場合我々は確かに、今日すでに小農民に明瞭であるに相違ない利益を、彼等に期待せしめるに足る手段を持つてゐるのである』(エンゲルス、『西歐における農民問題』、アレクセエフ版、一七頁、ロシア譯には誤謬がある。原文は『ノイエ・ツァイト』所載)(一層正確には『フランスおよびドイツにおける農民問題』、『ノイエ・ツァイト』、第十三年第十號、一八九四年、三〇一―三〇二頁、邦譯、全集、第十三卷、五〇二頁)。

すでに一八四四—五年に、古い唯物論の基本的な缺陷の一つは、それが……實踐的活動の諸條件を理解しえず、その意義を評價しえなかつたことにあることを明かにした後、マルクスはその生涯を通じて、理論的活動と並んで、プロレタリアートの階級鬪爭の××の問題に撓みなき注意を拂つた。この點において巨大な材料を與へるものは、マルクスの全著作と特に一九一三年に發行された四卷物の彼とエンゲルスとの往復書簡集である。この材料は決してまだ蒐集されてゐないし、纏められてゐないし、研究されてゐないし、仕上げられてゐない。だから我々はこゝではたゞ極めて一般的且つ簡單な註記に止め、そして唯物論のこの方面なくしては、マルクスは、それを中途半端であり、一面的であり、死せるものであると正當にも看做した、といふことを力說しておかう。マルクスはプロレタリアートの戰術の基本的任務をその唯物辨證法的世界觀のすべての前提と嚴密に一致させて規定した。たゞ例外なしに與へられた社會のすべての階級の相互關係の總體の客觀的な考慮、從つてこの社會の客觀的な發展段階の考慮、およびその社會と他の社

會との間の相互關係の考慮のみが、先進的階級の正しい××の支柱として役立つことができる。この場合すべての階級およびすべての國々は、靜學的な姿においてゞはなくて、動學的な姿において、即ち不動の狀態においてゞはなくて、運動（その法則は各〻の階級の存在の經濟的條件から流出するところの）において考察される。運動はそれでまた單に過去の見地からではなくて、未來の見地からも、而もたゞ徐々の變化のみを見る『進化主義者』の俗惡な理解においてゞはなくて、辨證法的に考察される。かやうな偉大な發展においては二十年間は一日に相當する、――とマルクスはエンゲルスへあてゝ書いた、――『尤もやがて二十年間を一纏めにする日がやつて來るかも知れないが』（『往復書簡集』、第三卷、一二七頁）（邦譯、全集、第十九卷、八八頁）。各〻の發展段階において、各〻の時機において、プロレタリアートの戰術は、人類史のこの客觀的な不可避的な辨證法を考慮して、一方ではこれを政治的停滯または龜の歩みの發展、いはゆる『平和的』發展の時代の先進的階級の意識、力および鬪爭能力の發展のために利用し、そして他方ではこの利用のすべての仕事を與へられた階級の運動の『窮極目的』と、そして『二十年間を一纏めにする』偉大な日における偉大な任務の實踐的解決の能力をこの階級のうちに作り出すこととの

方向へ導かなければならぬ。マルクスの二つの考察がこの問題において特に重要である。一つは『哲學の貧困』の中のプロレタリアートの經濟鬪爭と經濟組織とに關するものであり、他の一つのは „Das Kommunistische Manifest“ の中のプロレタリアートの政治的任務に關するものである。前者はかうである、『大産業は互ひに知らない一群の人々をたゞ一つの場所に寄せ集める。競爭は彼等の利害を分離させる。しかし賃銀の維持、彼等が雇主に對して持つこの共通の利害が彼等を反抗といふ同一の思想のうちに結合する——これが團結である。……最初孤立してゐた團結は、集團に形成される。そして絶えず結合する資本に對抗して、組合の維持は彼等にとつて賃銀のそれよりも一層必要となる。……この鬪爭——眞實の市民……——のうちに、來るべき戰ひのために必要なすべての要素が結合し且つ發展する。一度この點に到達すれば、組合は一つの政治的性質を帶びる』。こゝに我々の前には、『來るべき戰ひのために』プロレタリアートの力を準備する長い時代全體のための、數十年間にわたる經濟鬪爭と勞働組合運動との綱領と戰術がある。これとマルクスおよびエンゲルスのイギリスの勞働者運動の實例に對する多數の指示とを對照しなければならぬ。卽ち如何にして産業上の『繁榮』が『プロレタリアートを買收し』(『往復

書簡集』、第一卷、一三六頁）（邦譯、全集、第十七卷、一五一頁）、彼等を闘爭から引離すか、如何にこの繁榮が一般に勞働者を『墮落させるか』（第二卷、二一八頁）（邦譯、第十八卷、一四四頁）、如何にイギリスのプロレタリアートが『ブルジョア化して、すべての國民中最もブルジョア的な國民（イギリス人）が、結局ブルジョア貴族およびブルジョア・プロレタリアートをブルジョアと並んで持つやうにならうと欲してゐるやうに見える』（第二卷、二九〇頁）（邦譯、第十八卷、二一六頁）か、如何に彼等において『革命的エネルギー』が消失してゐるか（第三卷、一二四頁）（邦譯、第十九卷、八五頁）、『イギリスの勞働者が彼等の明白なブルジョア的感染から自らを解放する』には如何に多かれ少かれ長期間待たなければならないか（第三卷、一三七頁）（邦譯、第十八卷、八八頁）、イギリスの勞働者運動には『チャーティストの熱情』が如何に缺けてゐるか（一八六六年、第三卷、三〇五頁）（邦譯、第十八卷、二八七頁）、如何にイギリスの勞働者の指導者が『急進ブルジョアと勞働者との間の』中間物の型に作られつゝあるか（ホリーオークについて、第四卷、二〇九頁）（邦譯、第二十卷、二五〇頁）、イギリスの獨占の故に、そしてこの獨占が打破されない間は、如何に『イギリスの勞働者をどうすることもできない』か（第四卷、四三三頁）（邦譯、第二十卷、

五〇二頁）等々。經濟鬪爭の戰術は勞働者運動の一般的進行（および結果）との聯關において、こゝで、著しく廣汎な、全面的な辨證法的な、眞に……見地から考察されてゐる。

„Das Kommunistische Manifest“ は政治鬪爭の戰術について、マルクス主義の基本的命題を提起した、『彼等は勞働者階級の直接當面する目的の達成のために鬪爭するが、彼等は現在の運動において同時に運動の將來をも代表する』。これに照應してマルクスは一八四八年ポーランドにおいては『農業革命』黨、卽ち『一八四六年のクラコウの暴動を惹起したその黨』を支持した。ドイツにおいては一八四八―四九年にマルクスは極端な革命的民主々義を支持し、そしてその後も決して當時彼が戰術について述べたことを撤回しなかつた。彼はドイツのブルジョアジーを、『初めから人民を裏切り』（たゞ農民層との同盟のみがブルジョアジーにその任務の完全な實現を與へうるであらう）、『舊社會の王冠を戴いた代表者と妥協する』傾向を有する要素として考察した。こゝに、ブルジョア民主々義革命の時代におけるドイツのブルジョアジーの階級的地位のマルクスによつて與へられた總括的分析、就中、社會を運動において考察し、而も後方へ向けられた運動の方面からのみは考察しないところの、唯物論の見本がある……『自分自身への信賴

もなく、人民への信頼もなく、上に對しては不平をならし、下に對しては戰慄し……世界の嵐に恐怖し、どの方向に對しても無氣力で、あらゆる方向に對して剽竊を事とし……創意もなく……——逞しい人民の最初の青春の潮流を彼自身の老衰した利害のために導くことを自分の運命だと考へたところの、呪はれた老ぼれ……』（『新ライン新聞』、一八四八年、『遺稿集』、第三卷、二一二頁）（邦譯、全集、第四卷、一三八頁）。約二十年の後、マルクスはエンゲルス宛の手紙において（『往復書簡集』、第三卷、二二四頁）（邦譯、全集、第十九卷、一九一頁）、ブルジョアがすでに自由のための鬪爭の單なる展望よりも隷屬を伴ふ平和を選んだことが、一八四八年の革命の不成功の原因である、と聲明した。一八四八—四九年の革命時代が後つた時、マルクスはすべての革命遊戯に反對して立ち（シャッペル——ウィリッヒおよび彼等との鬪爭）、いはゞ『平和的に』新しい革命を準備するところの新しい時代において活動することを知るべきであると要求した。いかなる精神においてマルクスがこの活動の遂行を要求したかは、一八五六年の最も暗澹たる反動時代におけるドイツの狀態に關する次の如き評價から明かである。『ドイツにおける萬事は農民戰爭の第二版ともいふべきものによつて……を支援しうるか否かにかゝつてゐるであらう』（『往復書簡

集』、第二巻、一〇八頁）（邦譯、全集、第十八巻、三二頁）。ドイツにおける民主々義（ブルジョア）革命が終了されなかつた間、マルクスは社會主義的プロレタリアートの戰術におけるすべての注意を農民層の民主々義的エネルギーの發展に向けた。彼はラッサールを『客觀的にはプロシャに對する＊全勞働者運動の裏切』（第三巻、二一〇頁）（邦譯、全集、第十九巻、一七六頁）を行ふものと考へた、就中正にラッサールが地主とプロシャの民族主義とを見逃したが故に。『農業國において』――とエンゲルスは一八六五年、新聞紙上における彼等の當面の共同聲明書のことについてマルクスと意見を交換しつゝ書いた、――『工業プロレタリアートの名において專らブルジョアのみを攻撃して、一方大封建貴族による農村プロレタリアートの家父長的な笞刑的搾取に一言も觸れないことは、卑劣なことである』（第三巻、二一七頁）（邦譯、全集、第十九巻、一八三頁）。一八六四―一八七〇年の時期に、即ちドイツにおけるブルジョア民主々義革命の完成の時代、この革命を上から完成するあれやこれやの方法のためのプロシャとオーストリアとの搾取者階級の闘爭の時代が終りに近づいた時期に、マルクスは、ビスマルクといちやついてゐたラッサールを斷罪したのみならず、また『オーストリア心酔』に陥り小邦分立主義に陥つたリープクネヒトの誤りを正

した。マルクスは、ビスマルクともオーストリア心酔とも容赦なく鬪爭するところの……戰術を、『勝利者』――プロシャのユンケルと調子を合はせるのではなくて、實にプロシャの軍事的勝利によつて作り出された新しい地盤の上に立つて、彼等との……鬪爭を即時に再開するところの戰術を要求した(『往復書簡集』、第三卷、一三四、一三六、一四七、一七九、二〇四、二一〇、二一五、四一八、四三七、四四〇―一頁)(邦譯、全集、第十九卷、一九、九八、一〇九、一四四、一七〇、一七六、一八一―一八二、四一八、四四〇、四四四頁)。一八七〇年九月九日附のインターナショナルの有名な檄文において、マルクスは時期をえない暴動に對してフランスのプロレタリアートを戒めたが、それにも拘らず……時(一八七一年)には、da begrüsste Marx mit Begeisterung die „himmelstürmende" revolutionäre Initiative der Massen(クーゲルマン宛のマルクスの手紙)。他の多くの情勢における同樣に、かゝる情勢における革命的進出の敗北は、マルクスの辨證法的唯物論の見地からみれば、プロレタリア鬪爭の一般的進行および結果において、占取された位置の放棄、戰鬪なき讓歩ほどの害惡ではなかつた。かゝる讓歩はプロレタリアートを墮落させ、その鬪爭能力を切斷するであらう。政治的停滯とブルジョア合法性の支配との時代にお

ける合法的鬪爭手段の利用を完全に評價しつゝ、マルクスは、一八七七―八年、社會主義鎭壓法が發布された後、モストの『革命的言辭』を鋭く斷罪したが、しかし鎭壓法に答へて、不拔さと、堅牢さと、……性と、…………鬪爭に移行する準備とを直ちに表さなかつた公認社會民主黨を一時支配したところの日和見主義をも、それ以上ではないにしてもそれに劣らず鋭く攻擊したのである(『マルクス・エンゲルス往復書簡集』、第四卷、三九七、四〇四、四一八、四二二、四二四頁(邦譯、全集、第二十卷、四六一、四六九、四八四、四八九、四九一頁)。またゾルゲ宛書簡集比照)。

* ロシア語では『客觀的にはプロシャのために全勞働者運動の裏切』となつてゐる。原文は……„objektiv war es ein Verat der ganzen Arbeiterbewegung an die Preussen.“ ――譯者。

マルクス主義文獻目錄

文獻

マルクスの完全な著作および書簡集はまだ今日まで出版されてゐない。マルクスの著作の大部分は、他のいづれの國語よりも多くロシア語に譯されてゐる。これらの著作の次の目錄は年代順に編纂されてゐる。一八四一年に屬するものはエピクロス哲學に關するマルクスの學位論文である（死後の出版物『遺稿集』に入つてゐる、それについては下に記す）。この學位論文においてはマルクスはまだ全く觀念論的＝ヘーゲル主義的見地に立つてゐる。一八四二年に屬するものは『ライン新聞』（ケルン）におけるマルクスの諸論文、特に第六回ライン地方議會における出版の自由に關する討論の批判、次に森林盜伐法について、更に、政治の神學からの解放の擁護その他である（一部は『遺稿集』に入つてゐる）。こゝでは觀念論から唯物論へ、また革命的民主々義

から共産主義へのマルクスの移行が認められる。一八四四年にはパリにおいてマルクスおよびアーノルド・ルーゲの編輯の下に『獨佛年誌』が發行されるが、そこでは上述の移行は、決定的に行はれてゐる。マルクスの論文『ヘーゲル法律哲學批判序論』（『遺稿集』の外に單行小冊子がある）と『ユダヤ人問題』（また『ズナーニエ』版の小冊子、『廉價版文庫』、第二一〇號）とは、特に注目に値するものである。一八四五年マルクスおよびエンゲルスは共同して（フランクフルト・アム・マインにおいて）小冊子『神聖家族、ブルーノ・バウエル一派に對して』を出版してゐる（『遺稿集』の外に、ロシア語で二つの單行小冊子、即ち『ノーヴィ・ゴーロス』版、ペテルブルグ一九〇六年と『ヴェーストニク・ズナーニエ』版、ペテルブルグ一九〇七年とがある）。一八四五年の春に屬するものはフォイエルバッハに關するマルクスのテーゼである（フリードリヒ・エンゲルスの小冊子『ルードウィッヒ・フォイエルバッハ』の附錄として掲載されてゐる、ロシア譯がある）。一八四五—四七年にマルクスは幾多の論文（大部分は蒐集されず、再版されず、ロシア語に譯されてゐないところの）を „Vorwärts“（『フォールヴェルツ』）——パリ、„Brüsseler Deutsche Zeitung“（1847）（『ブリュッセル・ドイツ新聞』、一八四七年）、„Das Westphälische Dam-

pfboot“, Bielefeld, 1845–48（『ウェスファアリア・ダムプフブート』、ビーレフェルト、一八四五―四八年）、„Der Gesellschaftsspiegel“（1846, Elberfeld）（『社會の鏡』、一八四六年、エルバーフェルト）、『ドイツ・ブリュッセル新聞』――ブリュッセル、„La Réforme“（『ラ・レフォルム』）――パリ、等々の諸新聞に書いた。一八四七年に屬するものは、ブリュッセルとパリとにおいて出版された、プルードンに對するマルクスの基本的著作『哲學の貧困、プルードン氏の「貧困の哲學」への答』である（ロシア語では『ノーヴィ・ミール』の三つの版、一つはG・リヴォヴィッチ譯、一つはアレクセエワ譯、他の一つは『プロスヴェシチェニエ』版、すべて一九〇五―六年出版）。一八四八年にはブリュッセルで『自由貿易に關する演説』（ロシア譯がある）が、そしてその後ロンドンで、フリードリヒ・エンゲルスとの共同で、殆どすべてのヨーロッパ語にまた部分的には世界の他の國々の言葉にも譯された、有名な „Das Kommunistische Manifest“ が出版されてゐる（ロシア譯は一九〇五―六年に約八つの版がある。『モロト』版、『コーロコル』版、アレクセエワ版その他。大部分は没收された。種々の表題を帶びてゐた、『コムニスティーチェスキー・マニフェスト』、『共産主義について』、『社會階級と共産主義』、『資本主義と共産主義』、『歴史哲學』。マルクスのこの著作、

そしてまたその他の諸著作の完全且つ最も正確な飜譯は、大部分『「勞働解放」團』の外國における出版物において見よ)。一八四八年六月一日から一八四九年五月十九日までケルンにおいて『新ライン新聞』が發行され、マルクスは事實上その主筆であつた。今に至るまで……プロレタリアートの最良の、これに優るもののなき機關紙たる、この新聞におけるマルクスの多數の論文は、完全には蒐集されず且つ再版されてゐない。最も主要なものは『遺稿集』に入つてゐる。この新聞からのマルクスの論文『賃銀勞働と資本』は單行小冊子として屢〻出版された(ロシア語では、コズマン、『モロト』、ミャグコフおよびリヴォヴィッチの四つの版がある、一九〇五―六年)。同じ新聞から、『權力を握れる自由主義者』(『ズナーニエ』版、『廉價版文庫』、第二七二號、ペテルブルグ一九〇六年)。一八四九年マルクスはケルンにおいて『二つの政治的訴訟事件』を出版した(出版法違反および政府に對する武裝反亂教唆罪について陪審官によつて無罪を宣告されたマルクスの二つの辯護演說。一九〇五―六年に五つの版のロシア譯、アレクセエワ、『モロト』、ミャグコフ、『ズナーニエ』、『ノーヴィ・ミール』)。一八五〇年マルクスはハンブルグにおいて雜誌『新ライン新聞』を六號まで發行した。その最も主要な諸論文は『遺稿集』に入つてゐる。特に

注目に値するのは、一八九五年エンゲルスによつて小冊子として出版されたマルクスの論文『一八四八年から一八五〇年に至るフランスにおける階級鬪爭』である（ロシア譯は、M・マルィ版、『文庫』第五九―六〇號、また論集『歷史著作集』、バザロフおよびステパノフ譯、スキルムント版、ペテルブルグ一九〇六年、また『二十世紀の生活に關する思想と見解』、ペテルブルグ一九一二年）。一八五二年にはニューヨークでマルクスの小冊子『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』が出版された（ロシア譯は前記の論集に收められてゐる）。同年ロンドンにおいて『ケルン共產黨事件の暴露』（ロシア譯、『ケルン共產黨事件』、『通俗科學文庫』、第四三號、ペテルブルグ一九〇六年、十月二十八日）。一八五一年八月から一八六二年まで*マルクスはニューヨークの新聞『トリビューン』（,, The New-York Tribune ''）の不斷の寄稿家であつて、この新聞紙上では彼の論文の多くが、社說として、無署名で揭載された。特に注目に値するものは、マルクスおよびエンゲルスの死後ドイツ譯で再版された論文『ドイツにおける革命および反革命』である（ロシア譯は、バザロフおよびステパノフ譯が二つの論集に收められ、その後單行小冊子として、一九〇五―六年に五つの版がある、アレクセエワ、『オブシチェストヴェンナヤ・ポリザ』、

『ノーヴィ・ミール』、『普及文庫』および『モロト』)。『トリビューン』におけるマルクスの論文のうち若干のものはロンドンで單行小冊子として出版された、例へばパーマーストンに關するものは、一八五六年に『十八世紀外交史の暴露』(イギリスの自由黨大臣等のロシアに對する不斷の貪慾な從屬關係について)その他が出版された。マルクスの死後彼の娘エレアノル・エヴーリングは東方問題に關する『トリビューン』の一聯の論文を „The Eastern Question" (London, 1897) といふ表題で出版した(『東方問題』、一部分はロシア語に譯されてゐる。『戰爭と革命』、第一分冊、マルクスおよびエンゲルス『未刊論文集(一八五二、五三、五四年)』、ハリコフ一九一九年、(『ナーシャ・ムィスリ』文庫)]。一八五四年末から、また一八五五年中、マルクスは新聞„Neue Oder-Zeitung" (『新オーデル新聞』)に、一八六一―六二年にはウィーンの新聞„Presse" (『プレッセ』)に寄稿した。これらの論文は、マルクスの多くの手紙と同じやうに、蒐集されてゐず、たゞ部分的に „Neue Zeit" (『ノイエ・ツァイト』)に現はれたにすぎない。同じことは、新聞„Das Volk" (『民衆』)(ロンドン一八五九年)における一八五九年のイタリア戰爭の外交史に關するマルクスの論文にもあてはまる。一八五九年にはベルリンにおいてマルクスの著作『經濟學

批判』が出版された（ロシア譯、モスクワ一八九六年、マヌイロフ監修、およびペテルブルグ一九〇七年、ルミャンツェフ譯）。一八六〇年にはロンドンにおいてマルクスの小冊子 „Herr Vogt“（『フォークト氏』）が出版された。

* エンゲルスは „Handwörterbuch der Staatswissenschaften“, Bd. 6, S. 603（『國家學辭典』、第六卷、六〇三頁）におけるマルクスに關する論文のなかで、またベルンシュタインは『大英百科辭典』第十一版、一九一一年刊におけるマルクスに關する論文のなかで、誤つて一八五三―六〇年と述べてゐる。一九一三年に出版されたマルクス・エンゲルス往復書簡集參照。

一八六五年にはロンドンにおいてマルクスによつて起草された『國際勞働者協會創立宣言』が出版された（ロシア譯がある）。マルクスはインターナショナル總務評議會の多くの宣言、檄文および決議の執筆者であつた。すべてのこれらの材料は決してまだ研究されてゐないし、蒐集されてさへもゐない。この仕事に最初に手を染めたのは、G・イェックの著書『インターナショナル』であつて（ロシア譯、ペテルブルグ一九〇六年、『ズナーニエ』）、そこには、就中、マルクスの若干の手紙と彼によつて作成された決議案とが印刷されてゐる。一八七一年ロンドンにおいて單行小

冊子として『フランスにおける內亂』といふ表題の下に出版されたパリ・コンミューンに關する總務評議會の宣言は、マルクスによつて書かれたインターナショナルの文獻の一つである(ロシア譯は、レーニン監修『モロト』版およびその他の版)。一八六二——一八七四年に屬するものはマルクスとインターナショナルの會員クーゲルマンとの往復書簡集である(ロシア譯には二つの版がある、一つはA・ゴイフバルグ譯、他の一つはレーニン監修)。一八六七年にはハンブルグにおいてマルクスの主著『資本論、經濟學の批判』第一卷が出版された。第二卷と第三卷とは、マルクスの死後エンゲルスによつて一八八五年と一八九四年とに出版されてゐる。ロシア譯、第一卷には五つの版がある(二つはダニエルソン譯、一八七二年と一八九八年、二つはスツルーヴェの監修の下にJ・A・フールヴィッチとL・M・ザックとの共譯、第一版一八九九年、第二版一九〇五年、一つはバザロフとステパノフ監修)。第二卷と第三卷には各〻二つの版がある(ダニエルソン譯はあまり滿足できないもの)、バザロフとステパノフ監修にかゝる飜譯(この方が良い)。一八七六年マルクスはエンゲルスの著書『反デューリング論』(Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft)の編纂に參加して、全著作に目を通し、そして經濟學史に獻げられた一章を

全部書いた。
それから、マルクスの死後、次の如き彼の著作が出版された。即ち『ゴータ綱領批判』(ペテルブルグ一九〇六年、ドイツ語では『ノイエ・ツァイト』、一八九〇—九一年、第十八號所載)。『賃銀、價格および利潤』(一八六五年六月二十六日に朗讀された報告、『ノイエ・ツァイト』、第十六卷、一八九七—九八年、ロシア譯は『モロト』版一九〇六年およびリヴォヴィッチ版一九〇五年)。『マルクス=エンゲルス=ラッサール遺稿集』、三卷、スツットガルト一九〇二年(ロシア譯は、アクセリロッドその他の監修の下に二卷、ペテルブルグ一九〇八年。一卷はなほフールヴィッチの監修の下に出版された、モスクワ一九〇七年。マルクス宛のラッサールの書簡は單行本として出版され、『遺稿集』に入つてゐる)。『ゾルゲ宛のマルクス、エンゲルスその他の書簡』(ロシア語では二つの版がある、一つはアクセリロッドの監修、一つはレーニンの序文を持つてゐる、ダウゲ版)。『剩餘價値學說史』四部三卷、スツットガルト一九〇五—一九一〇年、カウツキーによつて出版された『資本論』第四卷の原稿(第一卷のみのロシア譯には三つの版がある。即ちペテルブルグ一九〇六年、プレハーノフ監修。キエフ一九〇六年、ジェレズノフ監修。キエフ一九

〇七年、トゥチャプスキー監修)。一九一三年にはスツットガルトにおいて『マルクス＝エンゲルス往復書簡集』の大冊四卷が出版された、それは一八四四年九月から一八八三年一月十日に至る一千三百八十六通の手紙を含み、そしてマルクスの生涯および見解の研究のために最高度に價値ある材料を大衆に與へるものである。一九一七年にはマルクスおよびエンゲルスの一八五二―一八六二年の論文集(ドイツ語)二卷が出版された。最後に、このマルクス著作目錄について申譯しなければならないことは、大部分は „Neue Zeit", „Vorwärts" その他の社會民主黨の定期刊行物にドイツ語で掲げられた小論文や個々の手紙の或るものが、こゝにはまだ入つてゐないこと、ロシア語へのマルクスのすべての飜譯、特に一九〇五―六年の小冊子の目錄も完全でないこともまた疑ひないことである。

マルクスおよびマルクス主義に關する文獻は非常に尨大である。我々は、著者達を三つの主要な部分、即ち本質的な點においてマルクスの見地に立つマルクス主義者、本質においてマルクス主義に敵意を有するブルジョア著述家、およびマルクス主義のあれやこれやの基礎を認めるやう

ではあるが、實際にはそれをブルジョア的見解によつて取り代へるところの修正主義者に區別することによつて、たゞ最も重要なもののみを摘記しよう。マルクスに對するナロードニキの態度は、修正主義の獨自のロシア的變種と見なければならぬ。W・ゾンバルトはその „Ein Beitrag zur Bibliographie des Marxismus“ (Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, XX, 2 Heft, 1905, S. S. 413–430) (『マルクス主義文獻目錄に關する1論文』、社會科學および社會政策アルヒーフ、第二十卷、第二册、一九〇五年、四一三—四三〇頁) において、三百の名稱を擧げてゐるが、決して完全な目錄ではない。その補充としては „Neue Zeit“ 一八八三—一九〇七年およびその後の索引參照。それから Josef Stammhammer: „Bibliographie des Sozialismus und Kommunismus“, Bd. I–III, Jena (1893–1909)(ヨゼフ・シュタムハンマー、『社會主義および共產主義文獻目錄』、第一—三卷、エナ、一八九三—一九〇九年) 參照。更に詳細なマルクス主義文獻目錄としてはなほ次のものを示することができる、 „Bibliographie der Sozialwissenschaften“, Berlin, Jahrgang 1, 1905 u. ff. (『社會科學文獻目錄』、ベルリン、第一年、一九〇五年以下)。(またN・A・ルバーキン、『圖書界』、第二卷、第二版參照)。我々はこゝに最も重要なもののみを擧げよう。マルク

ス傳の問題については、何よりも先づ次のものを指摘しなければならぬ、即ち、一八七八年ブラッケによつてブラウンシュヴァイクにおいて出版された „Volkskalender“(『フォルクス・カレンダー』)および „Handwörterbuch der Staatswissenschaften“ Bd. 6, S. 600–603 (『國家學辭典』、第六卷、六〇〇―六〇三頁) におけるフリードリヒ・エンゲルスの論文。W. Liebknecht : „Karl Marx zum Gedächtniss“, Nürnb. 1896 (W・リープクネヒト、『カール・マルクスの思ひ出』、ニュールンベルク一八九六年)。Lafargue : „K. Marx. Persönliche Erinnerungen“ (ラファルグ、『カール・マルクス、個人的な思ひ出』)。W・リープクネト、『カール・マルクス』、第二版、ペテルブルブ一九〇六年。P・ラファルグ『K・マルクスに關する私の思ひ出』、オデッサ一九〇五年(原文は „Neue Zeit“ IX, 1 において見よ)。『マルクス紀念』、ペテルブルグ一九〇八年、四一〇頁、J・ネヴゾロフ、N・ロジコフ、W・バザロフ、J・ステクロフ、A・フィン＝エノタエフスキー、P・ルミャンツェフ、K・レンナー、G・ローラン＝ホルスト、W・イリーン、R・ルクセンブルグ、G・ジノヴィエフ、J・カメネフ、P・オルロフスキーおよびM・タガンスキーの論文集。フランツ・メーリング、『カール・マルクス』。アメリカの社會主義者スパルゴによつて編纂された英語の尨大なマルクス

傳（Spargo: „K. Marx, his life and work", London, 1911）（スパルゴ、『カール・マルクス、彼の生涯と事業』、ロンドン一九一一年）は不滿足なものである。マルクスの活動の一般的概觀は、K. Kautsky: „Die historische Leistung von K. Marx. Zum 25 Todestag des Meisters", Berlin, 1908（K・カウツキー、『K・マルクスの歴史的功績、師の二十五年忌によせて』、ベルリン一九〇八年）參照。ロシア譯、『K・マルクスと彼の歴史的意義』、ペテルブルグ一九〇八年。また通俗的小册子、Klara Zetkin: „K. M. und sein Lebenswerk" (1913)（クララ・ツェトキン、『カール・マルクスと彼の生涯の事業』、一九一三年）比照。マルクスの思ひ出は、『ヴェーストニク・エヴロープィ』、一八八〇年第四號（および『思ひ出』、第三卷、『注目すべき十年』、ペテルブルグ一八八二年）におけるアンネンコフのもの、『ルッスコエ・ボガーツトヴォ』、一九〇六年第十二號におけるカール・シュルツのもの、『ヴェーストニク・エヴロープィ』、一九〇九年第六號以下におけるW・コワレフスキーのもの。

マルクス主義の哲學と史的唯物論との問題については、G・W・プレハーノフに最良の敍述『二十年間』、ペテルブルグ一九〇九年、第三版、『守勢から攻勢へ』、ペテルブルグ一九一〇年、『マ

ルクス主義の根本問題』、ペテルブルグ一九〇八年、『我が批判者の批判』、ペテルブルグ一九〇六年、『史的一元論の發展の問題』、ペテルブルグ一九〇八年その他の諸著作がある。アントニオ・ラブリオラ、『唯物史觀の問題』、ペテルブルグ一八九八年、同上、『史的唯物論と哲學』、ペテルブルグ一九〇六年。フランツ・メーリング、『史的唯物論について』、ペテルブルグ一九〇六年（『プロスヴェシチェニエ』と『モロト』との二つの版）、同上、『レッシング傳説』、ペテルブルグ一九〇八年（『ズナーニエ』）。また（非マルクス主義者）シャール・アンドレル、『共産黨宣言、歴史、解題、註釋』、ペテルブルグ一九〇六年比照。また『史的唯物論』、ペテルブルグ一九〇八年、エンゲルス、カウツキー、ラファルグその他多くの人々の論文集參照。L・アクセリロッド、『哲學綱要、史的唯物論の哲學的批判者への回答』、ペテルブルグ一九〇六年。ディーツゲンのマルクス主義からの不成功な退却の特別の擁護は、E.Untermann: „Die logischen Mängel des engeren Marxismus“, München, 1910（E・ウンターマン、『狹隘なマルクス主義の論理的缺陷』、ミュンヘン一九一〇年）（七五三頁——尨大ではあるが眞面目な勞作ではない）。Hugo Riekes: „Die philosophische Würzel des Marxismus“ („Zeitschrift für die gesammte Staatswissenschaft“, 62 Jahr-

gang, 1906, 3 Heft, S. 407–432)（フーゴー・リーケス、『マルクス主義の哲學的根據』、『全國家學雜誌』、第六十二年、一九〇六年、第三冊、四〇七―四三二頁所載）は、唯物論の見地からマルクス主義的見解の哲學的全體性を示してゐる反對者の興味ある著作である。Benno Erdmann: „Die philosophischen Voraussetzungen der materialistischen Geschichtsauffassung“ („Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft“ [Schmollers Jahrbuch], 1907, 3 Heft, S. 1–56)（ベンノ・エルドマン、『唯物史觀の哲學的諸前提』、『立法、行政および經濟學年報』〔シュモラー年報〕、一九〇七年、第三冊、一―五六頁所載）（マルクス主義に對する哲學的反駁の集成）は、マルクスの哲學的唯物論の若干の基本的命題の極めて有益な定式化であり、またカント主義および不可知論一般の流行的見地からの反駁の集成である。R. Stammler: „Wirtschaft und Recht nach der materialistischen Geschichtsauffassung“ (R・シュタムラー、『唯物史觀より見たる經濟と法律』、第二版、ライプチッヒ一九〇六年）（カント派）。ウォルトマン、『史的唯物論』、ロシア譯、一九〇一年（同じくカント派）。フォルレンダー、『カントとマルクス』、ペテルブルグ一九〇九年（同上）。また、A・ボグダノフ、W・バザロフその他（『マルクス主義哲學概論』、ペテルブルグ一九〇八年、

A・ボグダノフ、『偉大なる拜物教の沒落』、モスクワ一九〇九年その他の諸著作）とW・イリーン（『唯物論と經驗批判論』、ペテルブルグ一九〇九年）との間の論爭比照。史的唯物論と倫理學の問題については、K・カウツキー『倫理學と唯物史觀』、ペテルブルグ一九〇六年およびカウツキーの多くの他の著作がある。それから、Boudin : „Das theoretische System von K. Marx“, Stuttg. 1909（L・B・ブディン、『最近の批判に照したカール・マルクスの理論的體系』、ザスリッチ監修、英語からのロシア語譯、ペテルブルグ一九〇九年）。Hermann Gorter : „Die historische Materialismus“, 1909（ヘルマン・ゴルテル、『史的唯物論』、一九〇九年）。マルクス主義の反對者の諸著作のうちからは次のものを示さう、ツガン・バラノフスキー、『マルクス主義の理論的基礎』、ペテルブルグ一九〇七年。S・プロコポヴィッチ、『マルクス批判』、ペテルブルグ一九〇一年。Hammacher: „Das philosophisch-oekonomische System des Marxismus“（ハンマッヘル、『マルクス主義の哲學的＝經濟學的體系』）、（ライプチッヒ一九一〇年、七三〇頁——引用句集）。W・ゾンバルト、『十九世紀における社會主義と社會運動』、ペテルブルグ。Max Adler（カント派）、„Kausalität und Teologie“（Wien, 1909: „Marx-Studien“）（マクス・アドラー、『因果論と目的論』、

ウィーン一九〇九年、『マルクス研究』叢書）および ,, Marx als Denker “（『思想家としてのマルクス』）。ヘーゲル派の觀念論者 Giov. Gentile（ジオヴァンニ・ジェンティレ）の著書 ,, La philosophia di Marx “（Pisa, 1899）（『マルクスの哲學』、ピサ一八九九年）は、注意に値する——著者は、通常カント派、實證論者等々が氣づかずにゐるマルクスの唯物辨證法の或る重要な方面を指摘してゐる。また Levy ,, Feuerbach “（レヴィ『フォイエルバッハ』）は、マルクスの最も重要な哲學的先行者の一人について述べてゐる。チェルヌィシェフの『マルクス主義者の備忘錄』、ペテルブルグ、（『デーロ』）、一九〇八年は、マルクスの多くの著作からの引用句の有益な集成である。マルクスの經濟學說の問題については、K・カウツキー、『マルクスの經濟學說』（多くのロシア版がある）、同上『農業問題』、『エルフルト綱領』および多數の小册子。なほベルンシュタイン、『マルクスの經濟學說』參照。『資本論』第三卷（ロシア譯一九〇五年）、ガブリエル・ドヴィール、『資本論』（『資本論』第一卷の解說、ロシア譯一九〇七年）。マルクス主義者の間における農業問題に關するいはゆる修正主義の代表者は、E・ダヴィッド、『社會主義と農業』（ロシア譯、ペテルブルグ一九〇二年）である。修正主義の批判はW・イリーンの『農業問題』、第一部、ペテルブルグ一九〇八

年比照。またW・イリーン、『ロシアにおける資本主義の發展』、第二版、ペテルブルグ一九〇八年、および同上、『經濟學評論および論文集』、ペテルブルグ一八九九年參照。W・イリーン、『農業における資本主義の發展法則に關する新資料』、第一分冊、一九一七年。マルクスの見解のフランスにおける農業關係に關する最新の資料への、若干の後退を伴ふところの適用は、Compère-Morel : „La Question agraire et le socialisme en France", Paris, 1912（コンペール・モーレル『フランスにおける農業問題と社會主義』、パリ一九一二年）（四五五頁）である。經濟生活の最近の現象へ適用されたマルクスの經濟學的見解のその後の發展は、ヒルファーディングの『金融資本論』、ペテルブルグ一九一一年（價値論に對する著者の見解における本質的な誤謬の訂正は „Neue Zeit" におけるカウツキーの論文 „Gold, Papier und Ware"――『金、紙幣および商品』――30, I, 1912, S. 837, 886 參照）。W・イリーン、『資本主義の最近の段階としての帝國主義』、一九一七年。P・マスロフ、『農業問題』（二卷）および『國民經濟發展の理論』（ペテルブルグ一九一〇年）は、本質的な點においてマルクス主義から退却してゐる。これらの退却の批判は、„Neue Zeit", XXIX, 1, 1911 におけるカウツキーの論文『マルサス主義と社會主義』參照。

ブルジョア教授達の間に廣く普及されてゐる『限界効用』說の見地からのマルクスの經濟學說の批判は、Böhm-Bawerk: „Zum Abschluss des Marxschen System“ (Brl. 1896 in „Staatswiss. Arbeiten“, Festgabe für K. Knies)(ボエーム・バウエルク、『マルクス體系の終焉』、ベルリン一八九六年、カール・クニース記念出版『國家學著作集』所收)。ロシア譯がある、即ちペテルブルグ一八九七年、『マルクスの理論とその批判』。および同上 „Kapital und Kapitalzins“ (『資本と資本利子』)、第二版、インスブルック一九〇〇年――二卷(『資本と利潤』、ペテルブルグ一九〇九年)。更に參照、Riekes: „Wert und Tauschwert“ (1899) (リーケス、『價値と交換價値』、一八九九年)、v. Bortkiewicz: „Wertrechnung u. Preisrechnung im Marxschen System“ (Archiv f. Sozialw., 1906–7) (フォン・ボルトキエヴィッツ、『マルクス體系における價値計算と價格計算』、『社會科學アルヒーフ』、一九〇六―七年所載)、Leo v. Buch: „Ueber die Elemente d. polit. Oekonomie. Die Intensität d. Arbeit, Wert u. Preis“ (レオ・フォン・ブーフ、『經濟學の諸要素について、勞働の强度、價値および價格』)(同じくロシア語版がある)。ボェーム・バウヱルクの批判のマルクス主義の見地からの解剖は、Hilferding: „Böhm-Bawerks Marx-Kritik“ („Marx-Studien“, Bd. I, Wien,

1909)（ヒルファーディング、『ボエーム・バウェルクのマルクス批判』、『マルクス研究』叢書、第一巻、ウィーン一九〇九年）および „Neue Zeit" における小論文である。

マルクス主義の解釋と發展とにおける二つの主要な傾向——『修正派』と急進派（『正統派』）との問題については、エドゥアルト・ベルンシュタイン、『社會主義の諸前提と社會民主黨の任務』（ドイツ語の原著スツットガルト一八九九年、ロシア譯『史的唯物論』、ペテルブルグ一九〇一年、『社會問題』、モスクワ一九〇一年）參照、また同上、『社會主義の歴史および理論の概要』、ペテルブルグ一九〇二年比照。彼に對する回答は、K・カウツキー、『ベルンシュタインと社會民主黨綱領』（ドイツ語の原著スツットガルト一八九九年、ロシア譯には四つの版がある、一九〇五—六年）。フランスのマルクス主義文獻のうちでは、Jules Guesde : „Quatre ans de lutte des classes"（ジュール・ゲード、『階級闘爭の四ケ年』）、„En garde"（『步哨に立ちて』）、Questions d'-aujourd'hui (Paris, 1911)（『今日の問題』、パリ一九一一年）、P. Lafargue : „Le déterminisme économique de K. Marx" (Paris, 1909)（P・ラファルグ、『K・マルクスの經濟的決定論』、パリ一九〇九年）。〔オランダのものは〕、Ant. Pannekoek : „Zwei Tendenzen in der Arbeiter-Beweg-

ung"（アントン・パンネケック、『勞働者運動における二つの傾向』）。

マルクスの資本蓄積論の問題については新著 Rosa Luxemburg : „Die Akkumulation des Kapital"（Brl. 1913）（ローザ・ルクセンブルグ、『資本蓄積論』、ベルリン一九一三年）、および彼女のマルクスの理論の誤つた解釋の解剖は、Otto Bauer : „Die Akkumulation des Kapitals"（オットー・バウエル、『資本蓄積論』）（„Neue Zeit" 第三十一卷、第一冊、一九一三年、八三一頁および八六二頁）。Eckstein（エックシュタイン）の „Vorwärts"（『フォールヴェルツ』）における論文および Pannekoek（パンネケック）の „Bremer Bürger-Zeitung"（『ブレーメル・ビュルガー・ツァイツング』）、一九一三年における論文。

マルクスに關する古いロシアの文獻からは、ベゾブラゾフの『國家學論叢』ペテルブルグ一八八八年所收、B・チチェリン、『ドイツの社會主義者』、および『政治學說史』、第五部、モスクワ一九〇二年、一五六頁。『全集』第二卷、ペテルブルグ一九〇〇年所收ジーベルの回答、『チチェリン氏の眼鏡を通じてのドイツの經濟學者』。G・スロニムスキー、『K・マルクスの經濟學說』、ペテルブルグ一八九八年。N・ジーベル、『社會經濟的研究におけるデーヴィッド・リカルド

オとカール・マルクス』、ペテルブルグ一八八五年、および『全集』、二卷、ペテルブルグ一九〇〇年。『ヴェーストニク・エヴロープイ』一八七二年第五號におけるI・カウフマンの『資本論』に對する評論――マルクスが『資本論』第二版への跋においてI・カウフマンの批評を引用し、それを自己の唯物辨證法的方法の正しい叙述と認めてゐることによつて注目に値する。

マルクス主義に關するロシアのナロードニキ――N・K・ミハイロフスキーの『ルッスコエ・ボガーツトヴォ』、一八九四年第十號、一八九五年第一、二號における論文、全集に再錄されてゐる。――『我國の經濟的發展の特徴づけのための資料』（ペテルブルグ一八九五年、檢閲官によつて破毀さる）においてK・ツーリン（W・イリーン）によつてマルクス主義的見地から解剖されたP・スツルーヴェの『批判的覺書』（ペテルブルグ一八九四年）に關するものは、W・イリーンの『十二年間』、ペテルブルグ一九〇八年に再錄されてゐる。更に、ナロードニキ文獻からは、ヴェ・ヴェ、『我々の進路』、ペテルブルグ一八九二年。同上、『七十年代から九十年代へ』、ペテルブルグ一九〇七年。ニコライ――オン、『我國の改革後の社會經濟の概觀』、ペテルブルグ一八九三年。W・チェルノフ、『マルクス主義と農業問題』、ペテルブルグ一九〇六年。同上、『哲學

的および社會學的評論』、ペテルブルグ一九〇七年。

ナロードニキの外になほ次のものを指摘しよう、N・カレエフ、『史的唯物論に關する古い評論と新しい評論』、ペテルブルグ一八九六年、第二版は一九一三年に『經濟的唯物論批判』といふ表題で出版されてゐる。マサリック、『マルクス主義の哲學的および社會學的基礎』、モスクワ一九〇〇年。クローチェ、『史的唯物論とマルクス主義經濟學』、ペテルブルグ一九〇二年。

マルクスの見解の正しい評價のためには、彼の最も親しい同志にして協同者たるフリードリヒ・エンゲルスの諸著作を知ることがいふまでもなく必要である。エンゲルスのすべての著作を考慮することなしには、マルクス主義を理解することおよびそれを完全に説明することはできない。

無政府主義の見地からのマルクス批判は、W・チェルケソフ、『マルクス主義の教義』、ペテルブルグ一九〇五年、二部、W・テッケル、『書物に代へて』、モスクワ一九〇七年、參照。サンヂカリストのものは、ソレル、『現代經濟學の社會的概説』、モスクワ一九〇八年。

(全集、第三版、第十八卷、一―四三頁)。

附錄

一、グラナート出版所編輯部長宛

十一月十七日（一九一四年ベルン）

尊敬する同僚！

本日私は書留便でマルクスおよびマルクス主義に關する辭典のための論文を貴下宛に送つた。七萬五千字內外の枠內に叙述を押しこめるといふ困難な仕事を解決することに私がどの程度成功したかは、私にはわからない。文獻を努めて壓縮しなければならなかつたこと（一萬五千字は最後的のものであつた）、そして私は種々の方面の重要なもの（勿論、マルクスのために支配的な）を選び出さなければならなかつたことを記しておかう。マルクスからの多くの引用を放棄することを決心するのは困難であつた。私見によれば、辭典にとつて引用は非常に重要である（特に、何よりも哲學や農業問題のやうなマルクス主義の最大の論爭的な

諸問題については)。辞典の讀者はマルクスのすべての最も重要な證言を手許に持つべきである、さうでないと辭典の目的は達せられないであらう、――私にはさう思はれる。同樣に、檢閲方面が貴下を滿足させるかどうか私は知らない、――もし滿足させないとすれば、多分、檢閲の精神で二、三の個所を改作して、折り合ふことができるであらう。私としては、編輯部の最後的要求なしには、マルクス主義の多くの引用と命題とを檢閲のために『訂正』する氣にはなれなかつた。

葉書でゞも、原稿の到着を知らせていたゞきたい。私に支拂はれる原稿料はなるべく早くM・T・エリザロワ方へ御送付下さるやう切にお願ひする。私の宛名は Herrn Wladimir Uljanow. Distelweg. 11. Bern.

敬具

W・イリーン

二伸。私の文庫は、戰爭のために、ガリチヤに置き去りになつてをり、そして私は若干の引用をマルクスの著作のロシア譯で見出すことができなかつた。もし貴下がそれを必要と考へられるなら、多分、モスクワで誰かに依賴することができよう。序ながら、もし貴下が論文の校正刷を私に送ることが可能であると考へ、そして校正刷において部分的な訂正が可能であるかどうかをお知らせ下さるならば、私は非常に喜ぶで

あらう。もし校正刷の送付が不可能なら、別刷を送つていたゞきたい。

（一九二三年「プロレタルスカヤ・レヴオリユーチヤ」第六 七號（第十八―十九號）に初めて掲載されたもの。―全集、第三版、第二十九卷、三二六―三二七頁）。

二、グラナート出版所編輯部長宛

一九一五年一月四日〔ベルン〕。

尊敬する同僚！

昨日貴翰拜受、“consens”――承諾の電報を打つた。編輯部が社會主義に關する部分全部と戰術に關する部分全部とを削除したこと（それなくしてはマルクスはマルクスでない）は、いかにも遺憾であるが、而も私は承諾せざるをえなかつた、何故なら貴下から提議された理由（「絕對に不可能」）に對してはどうにも仕方がないからである。

もし貴下が別刷を送つて下さるか、または何時それが可能であるかを葉書で知らせて下さるなら、大變ありがたい。序ながら、辨證法に關する部分へまだ若干の訂正が加へられうるか？　何時まさに組版にかゝるか、訂正差出の最後の期限は何時であるかをどうぞお知らせ下さい。私は最近半ケ月丁度この問題を研究し

たので、時間があるなら少しばかり追加することができるだらう。

それから、もし後の諸卷のまだ割り當てられてゐない論文があるなら、私は辭典編輯部の御用を勤めませう。私は只今、ベルンで利用しうるドイツ語およびフランス語の文庫について極めて良い條件の下にある、――そして文筆的勞働一般については極めて惡い條件の下にある。それ故經濟學、政治、勞働者運動、哲學その他の諸問題に關する論文は大いに喜んで自ら引受けませう。愚妻は、N・クルプスカヤといふ名前で、『ロシアの學校』(註二)および『自由教育』(註三)に執筆したし、特に勞働學校の問題と教育學の古い古典の研究とに從事してゐる。彼女はこれらの問題に關する論文を喜んで自ら引受けるでせう。

早々

W・ウリヤノフ

Wl. Uljanow. Distelweg. 11. Bern.

(一九三〇年「レニンスキー・スボールニク」第十三卷に初めて掲載されたもの。―全集、第三版、第二十九卷、三二八―三二九頁)。

三、小册子『カール・マルクス』への序言

今度別刷として出版されるカール・マルクスに關する論文は、（私の記憶する限りでは）一九一二年（註四）に私によつてグラナート百科辭典のために書かれたものである。論文の終りには、マルクスに關する文獻、主として外國の文獻のかなり詳しい指示が附せられてゐた。これはこの版では省略されてゐる。それから辭典の編輯部は、自分の方から、檢閱を考慮して、その革命的戰術の叙述に献げられたマルクスに關する論文の末尾を削除した。遺憾ながら、私はこゝにこの末尾を再現する可能性を奪はれてゐる、何故なら原稿は何處かクラカウか或ひはスウィスにおける私の書類の中に殘されてゐるからである。私はたゞ、論文のこの末尾において、就中、マルクスが次の如く書いた、一八五六年三月十六日附エンゲルス宛のマルクスの手紙を引用したことを思ひ出すにすぎない。『ドイツにおける萬事は農民戰爭の第二版ともいふべきものによつて……を支援しうるか否かにかゝつてゐるであらう。さうなれば事は素敵なものになる』（註五）。これこそ、今や社會主義の完全な裏切にまで、ブルジョアジー側への移行にまで轉落したところの、我がメンシェヴィキが、一九〇五年以來理解しなかつた點である。

モスクワ 一八一八年五月十四日　　　　N・レーニン

（全集、第三版、第二十二卷、五二七頁。）

フリードリヒ・エンゲルス

一八九五年秋執筆され、論集『勞働者(ラボートニク)』(註六)一八九九六年第一―二號に無署名で掲載されたもの。(註七)

何たる理性の燈が消えたことであらう
何たる心臟が鼓動を休めたことであらう！

一八九五年新曆八月五日(七月二十四日)ロンドンでフリードリヒ・エンゲルスが死んだ。彼の友人カール・マルクス(一八八三年に死んだところの)以後、エンゲルスは、全文明世界における近代プロレタリアートの最も優れた學者であり敎師であつた。運命がカール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスとを不意に遭はしめて以來、二人の友人の生涯の仕事は彼等の共同事業となつた。だから、フリードリヒ・エンゲルスがプロレタリアートのためになしたことを理解するためには、近代勞働者運動の發展におけるマルクスの學說と活動とを明瞭に我がものにしなけ

ればならぬ。マルクスおよびエンゲルスは、勞働者階級とその要求とが、ブルジョアジーと共に不可避的にプロレタリアートを作り出し且つ組織するところの、近代經濟制度の必然的所産であることを、初めて指示した。彼等は、個々の名門の人々の好意ある試みではなくて、組織されたプロレタリアートの階級鬪爭が、人類をば今日彼を締めつけてゐる不幸から解放する、といふことを指示した。マルクスおよびエンゲルスはその科學的勞作において、社會主義は夢想者の思ひつきではなくて、近代社會における生産力の發展の最後の目標であり、必然的な結果であることを、初めて說明した。今日までのすべての書かれた歴史は、階級鬪爭の歴史であり、或る社會階級の他の社會階級に對する支配と勝利との交替であつた。そしてこれは、階級鬪爭と階級支配との基礎――私有財産と無秩序的社會的生産とが消滅しない限り、繼續するであらう。プロレタリアートの利害はこれらの基礎の……を要求する、從つてそれらに對して組織された勞働者の意識的な階級鬪爭が向けられなければならぬ。だがすべての階級鬪爭は政治鬪爭である。

　マルクスおよびエンゲルスのこれらの見解は今日自己の解放のために鬪爭しつゝあるすべてのプロレタリアートによつて我がものにされてゐるが、二人の友人が四十年代にその時代の社會主

義文獻および社會運動に參加した時代には、かゝる見解は全く新奇なものであつた。當時多くの才能ある者と無能な者、正直な人々と不正直な人々があつて、彼等は政治的自由のための鬪爭、……、……および法王の專制に對する鬪爭に心を奪はれて、ブルジョアジーとプロレタリアートとの利害の對立を見なかつた。實にこれらの人々は、勞働者が獨立の社會的勢力として登場した、といふ思想を認容しなかつたのである。他方では、多くの夢想家、時には天才的な人々があつて、彼等は、たゞ政府および支配階級に近代社會制度の不正を說得しさへすればいゝ、さうすれば容易に地上に平和と一般的幸福とを齎すことができる、と考へてゐた。彼等は鬪爭なき社會主義を夢みてゐた。最後に、殆どすべての當時の社會主義者と一般に勞働者階級の友人とは、プロレタリアートのうちにたゞ腫物を見たにすぎず、彼等は、產業の成長につれてこの腫物も成長するのを、恐怖を以て眺めたのである。だから彼等はすべて產業の發展を阻止する方法、『歷史の車輪』を阻止する方法を考へた。プロレタリアートの發展に對する一般的恐怖とは反對に、マルクスおよびエンゲルスはそのすべての望みをプロレタリアートの不斷の成長にかけた。プロレタリアが大きくなればなるほど、革命的階級としての彼等の力が大きくなればなるほど、社會主義

は愈々近く益々可能となる。一言にすれば、勞働者階級に對するマルクスおよびエンゲルスの貢獻は次の如く表現することができる、即ち、彼等は勞働者階級に自己を知ることゝ自己を意識することゝを敎へ、夢想の代りに科學を打ち立てた、と。

されぱこそ、エンゲルスの名と生涯とは勞働者たるものが誰でも知らなければならないのであり、されぱこそ、すべての我々の出版物と同樣に、ロシアの勞働者のうちに階級的自己意識をよびさますことを目的とする、我々の論集において、近代プロレタリアートの二人の偉大な敎師の一人であるフリードリヒ・エンゲルスの生涯と活動との大要を、我々は紹介しなければならないのである。

エンゲルスは一八二〇年、プロシャ王國ライン州バルメンに生れた。彼の父は工場主であつた。一八三八年エンゲルスは家庭の事情によつて、中學校(ギムナツウム)を卒へないで、或るブレーメンの商館の店員となることを餘儀なくされた。商業の仕事はエンゲルスが自己の科學的および政治的敎育のために努力することを妨げなかつた。すでに中學時代に彼は專制政治と官吏の恣意とを忌み嫌つた。哲學の研究は彼を更に前進させた。當時ドイツ哲學においてはヘーゲル哲學が支配してを

り、そしてエンゲルスはその追隨者となつた。ヘーゲル自身は專制的プロシャ國家の崇拜者であつて、ベルリン大學教授として彼はそれに奉仕してゐたにも拘らず、――ヘーゲルの學說は革命的であつた。人間の理性とその法とに對するヘーゲルの信仰と、世界には變化および發展の不斷の過程が行はれてゐるといふヘーゲル哲學の根本命題とは、現實と和解することを欲しなかつたベルリンの哲學者の弟子達を、現實との鬪爭、現存する不正および支配しつゝある害惡との鬪爭こそ、永久的發展の世界法則に根ざすものである、といふ思想へ導いた。もしすべてのものが發展するとすれば、もし或る制度が他の制度によつて代へられるとすれば、どうしてプロシャ王またはロシア皇帝の專制政治や、巨大な多數者を犧牲にする極めて少數者の致富や、人民に對するブルジョアジーの支配が永久に持續するであらうか？　ヘーゲル哲學は精神と理念との發展について語つた、それは觀念論的であつた。それは精神の發展から自然、人間および人間的、社會的諸關係の發展を導き出した。マルクスおよびエンゲルスは、發展の永久的過程に關するヘーゲルの思想を保持しつゝ、*その偏見的な觀念論的見解を放棄した。生活に目を轉ずることによつて、彼等は、精神の發展が自然の發展を說明するのではなくて、反對に――精神を自然、物質から說明す

べきことを知つた。……ヘーゲルおよび他のヘーゲル派とは反對に、マルクスおよびエンゲルスは唯物論者であつた。世界と人類とを唯物論的に觀察した彼等は、すべての自然現象の基礎に物質的原因が横はつてゐると同樣に、人間社會の發展もまた物質的生產力の發展によつて制約されることを知つた。人間の欲望を充足するために必要な諸對象の生產に際して人間が互ひに結ぶところの諸關係は、生產力の發展に依存してゐる。實にこの點に、社會生活のすべての現象、人間の志向、觀念および法律の說明が横はつてゐる。生產力の發展は私有財產を基礎とする社會的諸關係を作り出すが、今や我々は、如何にして同じ生產力の發展が多數者から所有を剝奪してそれを極めて少數者の掌中に集中するかを見るのである。それは、近代社會制度の基礎たる所有を廢棄する、それは、社會主義者が打ち立てたと同じ目標へ向つて自ら進みつゝある。社會主義者はたゞ、如何なる社會的勢力が、近代社會における自己の地位によつて、社會主義の實現に關心を有するかを理解し、そしてこの勢力にその利害と歷史的任務との自覺を傳へさへすればいゝのである。かゝる勢力はプロレタリアートである。彼等をばエンゲルスはイギリスにおいて、イギリスの產業の中心マンチェスターにおいて識つた。この地へ彼は一八四二年に移り、彼の父がそ

の株主の一人であつた商館に勤めたのである。こゝでエンゲルスはたゞ工場の事務所に坐つてゐたのではない――彼は勞働者が住つてゐる貧民窟を訪ね、自ら眼のあたり彼等の貧困と不幸とを見た。しかし彼は個人的觀察だけでは滿足しなかつた、彼はイギリスの勞働者階級の狀態について彼以前に書かれたすべてのものを通讀し、彼は彼の手に入つたすべての官廳文獻を注意深く研究した。この研究と觀察との成果は、一八四五年に出版された著書『イギリスにおける勞働者階級の狀態』であつた。『イギリスにおける勞働者階級の狀態』の著者としてのエンゲルスの主要な功績が何處にあるかは、我々がすでに上に述べたところである。エンゲルス以前にも非常に多くの人々がプロレタリアートの苦惱を說明し且つ彼等を援助する必要を指摘した。エンゲルスはかいい初めて、プロレタリアートが單に苦惱しつゝある大衆ではないこと、プロレタリアートがおかれてゐる恥づべき經濟狀態こそまさに、不可抗的に彼等を前方へ押し進め、そして自己の窮極的解放のために鬪爭せしめることを述べたのである。だが鬪爭しつゝあるプロレタリアートは自ら自らを助けるであらう。勞働者階級の政治鬪爭は不可避的に勞働者を、社會主義の外に彼には出口がない、といふ自覺に導くであらう。他方では、社會主義は、たゞそれが勞働者階級の政治鬪爭

の目標となる時においてのみ、力となるのであらう。これがイギリスにおける勞働者階級の狀態に關するエンゲルスの著書の根本思想であり、そしてこの思想は、今やすべての思考し且つ鬪爭するプロレタリアートによつて我がものにされてゐるが、當時は全く新しいものであつた。これらの思想は、イギリスのプロレタリアートの不幸の最も正確な戰慄すべき姿に充ちた、魅惑的に描かれた著書のうちに敍述されてゐる。この著書は資本主義とブルジョアジーとの恐るべき告發であつた。それによつて齎された印象は非常に大きかつた。エンゲルスの著書は、近代プロレタリアートの狀態の立派な描寫として、到るところで引用されてゐる。そして實際、一八四五年以前にも、その後にも、勞働者階級の不幸をかくも明瞭且つ眞實に描き出したものは、一冊も現はれなかつた。

＊マルクスおよびエンゲルスは、彼等がその智的發展においてドイツの大哲學者達そして特にヘーゲルに負ふところの多いことを一度ならず明言した。『ドイツ哲學なくしては、――とエンゲルスはいふ、――科學的社會主義は存在しなかつたであらう』。

エンゲルスはイギリスにおいて初めて社會主義者となつた。マンチェスターにおいて彼は當時の

イギリスの勞働者運動と關係を結び、イギリスの社會主義的出版物に執筆し始めた。一八四四年彼はドイツへの歸途、パリにおいて、すでに以前から文通してゐたマルクスと識つた。マルクスはパリにおいてフランスの社會主義者およびフランスの生活の影響を受けて同じく社會主義者になつたのである。こゝで兩友は共同して『神聖家族、一名批判的批判の批判』を書いた。『イギリスにおける勞働者階級の狀態』の前年に出版され、そして大部分はマルクスによつて書かれたこの著書のうちには、その主要な思想を我々が上に說明したところの、革命的＝唯物論的社會主義の基礎がおかれてゐる。『神聖家族』――これは哲學者バウエル兄弟とその追隨者達を茶化してつけた綽名である。これらの諸君は、一切の現實を超越し、黨と政治とを超越し、そして一切の實踐的活動を否定して、たゞ『批判的に』外界とそこに起る事件とを觀照するところの、批判を說教した。バウエル君は、プロレタリアートを非批判的大衆であると高慢にも斷定した。この妄誕且つ有害な傾向に對してマルクスおよびエンゲルスは決然として起つた。眞實の人間的人格の名において――即ち支配階級と國家とに踏みつけられてゐる勞働者の名において、彼等は、觀照ではなくて、ヨリ善き社會組織のための鬪爭を要求する。かゝる鬪爭を行ふ能力を有し且つそれ

に關心を有する勢力を、彼等は、勿論、プロレタリアートのうちに見るのである。すでに『神聖家族』以前に、エンゲルスはマルクスとルーゲとの『獨佛年誌』に『經濟學批判大綱』を掲載したが、その中で彼は、私有財産の支配の必然的結果としての近代經濟制度の基本的諸現象を社會主義の見地から考察した。エンゲルスとの交際は、マルクスが經濟學、即ち彼の勞作が全くの變革を齎した科學を研究しようと決心するのを、いふまでもなく助けたのである。

一八四五年から一八四七年に至る期間をエンゲルスはブリュッセルとパリとで過し、科學的研究とブリュッセルおよびパリにおけるドイツの勞働者の間における實踐的活動とを結合した。そこにおいてエンゲルスおよびマルクスはドイツ人の秘密結社『共産主義者同盟』と關係を結び、同盟は彼等に彼等によつて仕上げられた社會主義の根本原理を叙述することを委囑した。かくして一八四八年に印刷されたマルクスおよびエンゲルスの有名な „Das Kommunistische Manifest" が生れた。この小册子は數卷に相當する。即ち今日まで文明世界のすべての組織された、鬪爭しつゝあるプロレタリアートは、その精神で生き且つ動いてゐるのである。

最初フランスに勃發し、次いで他の西ヨーロッパ諸國にも波及した一八四八年の革命は、マル

クスおよびエンゲルスを祖國へ導いた。こゝで、ライン・プロシャで、彼等は、ケルンで發行された民主々義的な『新ライン新聞』の先頭に立つた。兩友はライン・プロシャにおけるすべての革命的＝民主々義的傾向の魂であつた。彼等は極力民衆の利益と反動的勢力からの解放とを主張した。反動的勢力は、周知の如く、勝利を得た。『新ライン新聞』は禁止され、亡命生活中プロシャ臣民の權利を失つたマルクスは追放され、そしてエンゲルスは、民衆の武裝暴動に參加し、三つの戰鬪において自由のために戰ひ、叛亂者の敗北の後、スウィスを經てロンドンへ亡命した。

マルクスもまたロンドンへ移住した。エンゲルスは四十年代に勤めてゐたマンチェスターの商館の店員に間もなく再びなり、後にはその株主となつた。一八七〇年まで彼はマンチェスターに住ひ、マルクスはロンドンに住つたが、このことは彼等の極めて活潑な精神的交際を妨げはしなかつた、卽ち彼等は殆ど毎日文通した。この文通において兩友は自己の見解と知識とを交換し且つ共同して科學的社會主義を完成し續けた。一八七〇年エンゲルスはロンドンへ移り、そしてマルクスが死んだ一八八三年まで、强度の勞働によつて充たされた彼等の共同の精神生活が繼續された。その成果は――マルクスの側では――今世紀の最大の經濟學的著作たる『資本論』であ

り、エンゲルスの側では――幾多の大小の著作であつた。マルクスは資本主義經濟の複雜な諸現象の解剖に專心した。エンゲルスは極めて平易に書かれた、往々論爭的な諸著作において、極めて一般的な科學的諸問題と過去および現在の種々の現象とを、マルクスの唯物史觀と經濟學說の精神で解明した。エンゲルスのこれらの諸著作から次のものをあげよう、即ちデューリングに對する論爭的著作（こゝでは哲學、自然科學および社會科學の領域における最大の諸問題が解剖されてゐる）、*『家族、私有財產および國家の起源』（ロシア語への飜譯、ペテルブルグ發行、第三版、一八九五年）、『ルードウィッヒ・フォイエルバッハ』（G・プレハーノフの註の附いたロシア譯、ジュネーヴ一八九二年）、ロシア政府の對外政策に關する諸論文（ジュネーヴ發行の『ゾチアール・デモクラット』、第一號および第二號においてロシア語に飜譯されてゐる）、住宅問題に關する注目すべき論文、最後にロシアの經濟的發展に關する二つの小さな、而も非常に價値ある論文（『フリードリヒ・エンゲルスのロシア論』、W・I・ザスリッチのロシア語への飜譯、ジュネーヴ一八九四年）。マルクスは資本に關する自己の巨大な勞作を最終的に完成しえないで死んだ。しかし彼はあらかた既に仕上げてゐた、そこでエンゲルスは友人の死後、『資本論』第二卷および第三

卷の完成と出版といふ困難な仕事に着手した。彼は一八八五年に第二卷を、一八九四年に第三卷を出版した（彼は第四卷を完成しえなかつた）。これらの二卷のための仕事は非常に多くの骨折を要求した。オーストリーの社會民主々義者アドラーは、『資本論』第二卷および第三卷の出版によつてエンゲルスは彼の天才的な友人のために偉大な記念碑を建設した、そしてこの記念碑の上に思はずも不朽の文字を以て自分自身の名を刻みこんだ、と正しく指摘した。實際、『資本論』のこの二卷は、マルクスおよびエンゲルスの二人の勞作である。古い傳說は人の心を動かす種々の友情の實例を物語つてゐる。ヨーロッパのプロレタリアートはいふことができる、彼等の科學は、その關係が人間の友情に關するすべての最も人の心を動かす古い物語を凌駕するところの、二人の學者および鬪士によつて作られたのだ、と。エンゲルスは常に、——そして一般に、全く正しく、——マルクスに一步を讓つてゐた。『マルクスの傍で私は第二ヴァイオリンを彈いたのである』と彼は或る古い友人に書いた。生けるマルクスに對する彼の愛と死せるマルクスの記憶に對する尊敬とは無限であつた。この峻嚴な鬪士および思想家は、深く愛する心を持つてゐた。

* これは素晴らしく內容豐富な且つ敎訓的な著書である。遺憾ながら、その中からロシア語に譯されてゐ

るのは、社會主義の發展の歴史的大要を含む一小部分にすぎない（『科學的社會主義の發展』、第二版、ジュネーヴ一八九二年）。（『反デューリング論』の完全なロシア譯は一九〇四年に出版された。編輯者）。

一八四八―四九年の運動の後、亡命せるマルクスおよびエンゲルスはたゞ科學の研究にのみ從事したのではない。マルクスは一八六四年に『國際勞働者協會』を作り、まる十年間この協會を指導した。エンゲルスもまたその事業に活潑に參加した。マルクスの思想によつて、萬國のプロレタリアを結合した『國際協會』の活動は、勞働者運動の發展において巨大な意義を持つてゐた。しかし七十年代における『國際協會』の閉鎖の後も、マルクスおよびエンゲルスの勞働者を結合する役割は中絶されなかつた。反對に、勞働者運動の精神的指導者としての彼等の意義は、不斷に增大した、蓋し運動自身もまた絶えず成長したからである。マルクスの死後はエンゲルスがひとりヨーロッパの社會主義者の助言者であり指導者であつた。政府の迫害にも拘らず、その勢力が急速に且つ絶えず增大したドイツの社會主義者も、その第一歩を考慮し且つ考量しなければならなかつた後進國――例へばスペイン、ルーマニア、ロシアの代表者も、一樣にエンゲルスに向つて助言と指示とを求めた。すべて彼等は老いたるエンゲルスの知識と經驗との豊富な寶藏

から汲み取つたのである。
マルクスおよびエンゲルスは、二人ともにロシア語を知つてをり且つロシアの書物を讀んでゐたので、ロシアに非常に興味を持ち、ロシアの革命運動を同情を以て注目し、ロシアの革命家達と交際を續けた。彼等は二人とも社會民主々義者から社會主義者になつたので、政治的專横を憎む民主々義的感情が彼等においては極めて强かつた。この直接的な政治的感情は、政治的專横と經濟的抑壓との聯關に對する深い理論的理解と共に、そしてまた豊富な生活上の經驗も、マルクスおよびエンゲルスを特に政治的關係において異常に敏感ならしめた。だから强力なツァールの政府に對する極く少數のロシア革命家の英雄的鬪爭は、これらの經驗ある革命家の心のうちに最も同情的な反響を見出した。これに反して、假想的な經濟的利益のために、ロシアの社會主義者の最も直接且つ重要な任務――政治的自由の獲得――から外れようとする偏向は、當然彼等の眼には怪しいものであり、社會……の大事業に對する裏切とさへ彼等には直接考へられたのである。『プロレタリアートの解放は彼等自身の事業でなければならぬ』――これがマルクスおよびエンゲルスが絶えず敎へたところである。だが自己の經濟的解放のために鬪爭するためには、プ

ロレタリアートは一定の政治的權利を獲得しなければならぬ。それのみならず、マルクスもエンゲルスも、ロシアにおける政治革命は、西ヨーロッパの勞働者運動にとつても巨大な意義を有するであらうことを見た。專制ロシアは常にすべてのヨーロッパの反動の支柱であつた。ドイツとフランスとの間に長い間不和の種を蒔いた一八七〇年の戰爭がロシアに齎したところの異常に有利な國際的地位は、勿論、たゞ反動的勢力としての專制ロシアの意義を增大したにすぎない。ポーランド人、フィンランド人、ドイツ人、アルメニア人その他の小民族を抑壓する必要もなく、フランスとドイツとを絕えず嗾けて仲違ひさせる必要もない、自由なロシアのみが、現代ヨーロッパを戰爭の重荷から自由に一息つかせ、ヨーロッパにおけるすべての反動的要素を弱め、そしてヨーロッパの勞働者階級の力を增大するであらう。さればこそエンゲルスは西歐における勞働者運動の成功のためにもロシアに政治的自由を齎すことを熱心に願つたのである。ロシアの革命家達は彼の死によつてその最良の友人を失つた。

プロレタリアートの偉大な鬪士および敎師たる、フリードリヒ・エンゲルスへの永遠の追憶！

（全集、第三版、第一卷、四〇七―四一六頁）。

マルクス主義の三つの源泉と三つの構成分

一九一三年三月、『プロスヴェシチェニエ』
（『啓蒙』）第三號所載。

マルクスの學說は、全文明世界において、マルクス主義を何か『有害な宗派』に類するものと考へるすべてのブルジョア的（および官學的、および自由主義的）科學の最大の敵意と憎惡とを喚び起してゐる。これ以外の態度は期待することができない、何故なら階級鬪爭を基礎とする社會においては『公平な』社會科學はありえないからである。しかしいづれにもせよ、すべての官學的および自由主義的科學は賃銀奴隸制を擁護するが、マルクス主義はこの奴隸制に對して容赦なき鬪爭を宣言した。賃銀奴隸制の社會において公平な科學を期待することは、資本の利潤を減らして勞働者への支拂を增加すべきではないか、といふ問題において公平な工場主を期待すると

同じ間の抜けた素朴さである。

しかしそればかりではない。哲學史および社會科學史は、マルクス主義のうちには世界文明の發展の大道から脇へ外れて發生した、何か封鎖的な、硬化した學説の意味での『宗派主義』に類するものは何一つ存在しない、といふことを全く明瞭に示してゐる。反對に、マルクスの天才は、まさに、人類の進歩的思想がすでに提起してゐた諸問題に對して彼が解答を與へた、といふ點にある。彼の學説は哲學、經濟學および社會主義の最も偉大な代表者達の學説の直接の繼續として發生したのである。

マルクスの學説は、正しいが故に、全能である。それは完全且つ整然としてをり、如何なる迷信とも、如何なる反動とも、ブルジョア的抑壓の如何なる擁護とも相容れない完全な世界觀を人人に與へる。それは人類が十九世紀にドイツの哲學、イギリスの經濟學、フランスの社會主義において作り出した最善のものゝ正當な相續者である。

マルクス主義の哲學は唯物論である。ヨーロッパの最近世史全體を通じて、特に十八世紀末、諸制度および諸觀念におけるあらゆる中世的殘滓に對して、農奴制に對して決定的な鬪爭が行はれたフランスにおいては、唯物論は、自然科學のすべての學說に忠實な、迷信、僞善等々に敵對的な、唯一の徹底的な哲學であることがわかつた。だから民主々義の敵は全力を擧げて唯物論を『論駁し』、掘り崩し、誹謗しようと努め、そしていづれにもせよ常に宗敎の擁護または支持に歸着するところ、哲學的觀念論の種々の形態を擁護したのである。

マルクスおよびエンゲルスは最も決定的に哲學的唯物論を主張し、そしてこの基礎からの一切の逸脫の深い誤謬を一度ならず說明した。彼等の見解はエンゲルスの著作、『ルードウィッヒ・フォイエルバッハ』と『反デューリング論』とにおいて最も明瞭且つ詳細に敍述されてゐる。そしてこれらの著書は――,,Das Kommunistische Manifest‘‘と同樣に――あらゆる自覺せる勞働者の必讀書である。

しかしマルクスは十八世紀の唯物論に止まつてゐないで、哲學を前進させた。彼はドイツの古典哲學、特にヘーゲルの體系――それはそれでまたフォイエルバッハの唯物論へ導いた――の獲得

によつて、それを豐富にした。これらの獲得のうちの主要なものは辨證法、即ちその最も完全な、深刻な、一面性から自由な形における發展に關する學說、永久に發展する物質の映像を我々に與へるところの人間の知識の相對性に關する學說であつた。自然科學の最近の發見——ラヂウム、電子、元素の變化——が、ブルジョア哲學者の學說と古くして腐敗した觀念論への彼等の『新しい』復歸とにも拘らず、マルクスの辨證法的唯物論を確認したことは注目すべきことである。

哲學的唯物論を深化し且つ發展させつゝ、マルクスは、それを最後まで導き、その自然認識を人間社會の認識に擴大した。科學的思想の最大の獲得はマルクスの史的唯物論である。今日まで歷史および政治に對する見解において支配した混沌と專斷とは、如何にして一つの社會生活樣式から、生產力の成長の結果として、他の一層高度の樣式が發展するか、——例へば農奴制から資本主義が成長するか——を示すところの、驚くべく完全な、整然とした理論によつて取つて代へられた。

人間の認識が彼から獨立して存在する自然、即ち發展しつゝある物質を反映するのと丁度同じやうに、人間の社會的認識(即ち哲學的、宗敎的、政治的等々の種々の見解および學說)は、社

會の經濟的構造を反映する。政治制度は經濟的基礎の上に立つ上層建築である。我々は、例へば、近代ヨーロッパ諸國家の種々の政治形態が、如何にプロレタリアートに對するブルジョアジーの支配の强化に役立つてゐるかを見るのである。

マルクスの哲學は完成された唯物論であつて、それは人類、特に勞働者階級に認識の偉大な武器を與へたのである。

二

經濟的構造はその上に政治的上層建築が立つところの基礎であることを認めたマルクスは、最も多くの注意をこの經濟的構造の研究に割いた。マルクスの主著――『資本論』は、近代社會、即ち資本主義社會の經濟的構造の研究に獻げられてゐる。

マルクス以前の古典經濟學はイギリス――最も發展した資本主義國において形成された。アダム・スミスとデーヴィッド・リカルドオとは、經濟的構造を研究して、勞働價値說の基礎を据ゑた。マルクスは彼等の事業を繼承した。彼はこの理論を嚴密に基礎づけ且つ徹底的に發展させ

た。彼は、あらゆる商品の價値は商品の生産に費される社會的に必要な勞働時間の量によつて規定されることを指示した。

ブルジョア經濟學者が物の關係（商品と商品との交換）を見たところにマルクスは人と人との間の關係を見た。商品の交換は市場を通じての個々の生産者の間の聯關を表現してゐる。貨幣は、個々の生産者のすべての經濟生活を一全體に不可分的に結合しつゝ、この聯關が益々緊密になることを意味する。資本はこの聯關の一層進んだ發展を意味する、即ち人間の勞働力が商品となるのである。賃銀勞働者は自己の勞働力を土地、工場、勞働器具の所有主へ賣る。勞働者は勞働力の一部分を、自己および自己の家族の生計費（賃銀）を償ふために使用し、他の一部分を勞働者は無償で働き、資本家階級の利潤の源泉であり、富の源泉である剩餘價値を資本家のために作り出す。

剩餘價値に關する學說はマルクスの經濟學理論の礎石である。

勞働者の勞働によつて作り出された資本は、小經營者を破滅させ、失業者軍を作り出すことによつて、勞働者を壓迫する。工業においては大生産の勝利は一目瞭然としてゐるが、農業におい

てもまた我々は同じ現象を見るのである。即ち大資本主義的農業生産は増大し、機械の應用は發展し、農民經濟は貨幣資本の係蹄に陷り、後れた技術の壓迫の下に沒落し且つ破滅する。農業においては、小生産の沒落は異つた形態を取るが、その沒落自體は爭ふ餘地のない事實である。

小生産を征服しつゝ、資本は勞働生産性の增大と大資本家聯盟の獨占的地位の造出とに導く。生産自體は益々社會的となる——數十萬、數百萬の勞働者は計畫的な經濟的有機體のうちに結びつけられる——が、共同勞働の生産物は一握りの資本家によつて横領される。生産の無政府狀態、恐慌、狂暴な市場爭奪、人口大衆にとつての生活の不安が增大する。

資本への勞働者の隷屬を增大しつゝ、資本主義制度は結合された勞働の偉大な力を作り出す。マルクスは資本主義の發展を、商品生産の最初の萠芽から、單なる交換から、その最高の形態、大生産に至るまで追跡した。

そして古い國も、新しい國も、すべての資本主義國の經驗は、年々益々多數の勞働者に、マルクスのこの學說の正しいことを明瞭に示してゐる。

資本主義は全世界において勝利したが、この勝利はたゞ資本に對する勞働の勝利の序幕にすぎ

ないのである。

三

農奴制が顚覆されて神の世界に『自由な』資本主義社會が現はれるや否や、——この自由は勤勞者の抑壓および搾取の新しい制度であることが、忽ち暴露された。種々の社會主義學說が、この抑壓の反映およびこれに對する抗議として、直ちに發生し始めた。しかし最初の社會主義は空想的社會主義であつた。これは資本主義社會を批判し、それを非難し、呪咀し、その廢棄について夢想し、ヨリ良き組織について空想し、搾取の不正なことを富者に說敎した。

しかし空想的社會主義は眞實の出口を示すことができなかつた。それは資本主義の下における賃銀奴隸制の本質を說明することもできず、その發展法則を發見することもできず、新社會の創造者となりうる社會的勢力を見出すこともできなかつた。

そのうちにヨーロッパの到るところにおいて、特にフランスにおいて、封建制度、農奴制の沒落を伴つたところの、猛烈な革命は、階級鬪爭がすべての發展とその原動力であることを、益々

明瞭に暴露した。

農奴所有者階級に對する政治的自由の如何なる勝利も死物狂ひの抵抗なくしては獲得されなかつた。如何なる資本主義國も、資本主義社會の種々の階級の間における生死の闘爭なくしては、多かれ少かれ自由な、民主々義的な基礎の上に形成されなかつた。

マルクスの天才は、世界史の教へる結論を彼が誰よりも早く、こゝから引き出し、そしてそれを徹底的に導きえたことにある。この結論は階級闘爭に關する學說である。

人々が耳障りのいゝ道德的、宗教的、政治的、社會的言辭、聲明、約束の背後にあれやこれやの階級の利害を探索することを學ばない限りは、彼等は常に政治における欺瞞および自己欺瞞の馬鹿らしい犧牲であつたしまたあるであらう。改良と改善との支持者は、すべての古い制度は、それが如何に野蠻且つ腐敗的に見えようとも、あれやこれやの支配階級の力によつて維持されてゐることを理解しない限りは、古い制度の擁護者によつて愚弄されるであらう。だがかゝる階級の抵抗を粉碎するためには、たゞ一つの手段がある。卽ち古きものを一掃して新しきものを創造する能力を有する勢力を成しうる――そしてその社會的地位によつて成さなければならない――

やうな勢力を、我々を圍繞する社會自體において見出し、啓蒙し且つ組織することである。

たゞマルクスの哲學的唯物論のみが、今日まですべての被壓迫階級がその中に默々として生活し來つたところの、精神的奴隷制からの出口をプロレタリアートに示した。たゞマルクスの經濟學理論のみが資本主義の一般的構造におけるプロレタリアートの眞實の地位を説明した。

アメリカから日本に至り、またスウェーデンから南アフリカに至る全世界において、プロレタリアートの獨立的組織が增加しつゝある。彼等は自己の階級鬪爭を遂行することによつて、自らを啓蒙し敎育し、ブルジョア社會の先入見から解放し、益ゝ緊密に集結し、自己の成功の程度を計ること、自己の力を鍛へることを學び、そして不可抗的に成長しつゝある。

（全集、第三版、第十六卷、三四九―三五三頁）。

カール・マルクスの學說の歷史的運命

一九一三年三月十四(一)日、『プラウダ』第五十(二百五十四)號所載。

マルクスの學說における主要なものは、社會主義社會の建設者としてのプロレタリアートの世界史的な役割の闡明である。全世界における事件の進行は、それがマルクスによつて敍述された後、この學說を確認したであらうか？

マルクスはそれを一八四四年に初めて提起した。一八四七年に出たマルクスおよびエンゲルスの „Das Kommunistische Manifest“ は、すでにこの學說の完全な、體系的な、今日まで最善なものとして殘つてゐるところの敍述を與へてゐる。世界史はこの時以來明かに三つの主要な時期に區分される、(一)一八四八年の革命からパリ・コンミューン(一八七一年)まで、(二)パリ・コンミューンからロシア革命(一九〇五年)まで、(三)ロシア革命以後。

これらの時期の各〻におけるマルクスの學說の運動に一瞥を投じよう。

一

第一期の初めにはマルクスの學說は決して支配的ではない。それは、たゞ社會主義の非常に多くの分派または流派の一つにすぎない。根本において我國のナロードニキ主義に類するやうな社會主義の諸形態が支配的である。卽ち歷史的運動の唯物論的基礎の無理解、資本主義社會の各〻の階級の役割と意義とを區別することの無能力、『人民』、『公正』、『權利』等々に關する種々の、似而非社會主義的言辭を以てする民主々義的變革のブルジョア的本質の隱蔽が、これである。

一八四八年の革命は先マルクス主義的社會主義のこれらすべての騷々しい、灰色の、口喧しい形態に瀕死の打擊を齎す。革命はすべての國々において社會の種々の階級を行動において示した。パリにおける一八四八年六月事件における共和主義的ブルジョアジーによる勞働者の射殺は、プロレタリアートのみが社會主義的性質を有することを最終的に決定する。自由主義的ブルジョアジーは、如何なる反動よりも百倍も多くこの階級の獨立を恐れる。臆病な自由主義は反動

の前に屈服する。農民層は封建制度の遺物の撤廢によつて滿足し、そしてたゞ稀れに勞働者民主主義とブルジョア自由主義との間を動搖しつゝ、秩序の味方となる。非階級的社會主義および非階級的政治に關するすべての學說は、空虛な愚論であることが示される。

パリ・コンミューン（一八七一年）はブルジョア的變革のこの發展を終結させる。共和國、即ち階級的關係が最も公然の形態で現はれる國家組織の形態は、その强化をたゞプロレタリアートの英雄主義にのみ負うてゐる。

すべての他のヨーロッパ諸國においては、一層複雜した且つ一層未完成の發展が、同じやうな成立したブルジョア社會へ導く、第一期（一八四八―一八七一年）の、即ち嵐と革命との時期の終りに、先マルクス主義的社會主義は死滅する。獨立的プロレタリア黨、即ち第一インターナショナル（一八六四―一八七二年）とドイツ社會民主黨とが生れる。

二

第二期（一八七二―一九〇四年）は『平和的』性質によつて、革命の缺如によつて、第一期と區別される。西歐はブルジョア革命を終結した。東洋はまだそれまで成熟してゐなかつた。

西歐は來るべき變革時代への『平和的』準備の地帶へ入る。その基礎においてプロレタリア的な社會主義黨が到るところに形成され、そしてこれらの黨はブルジョア議會主義を利用すること、自己の日刊新聞、自己の教育機關、自己の勞働組合、自己の協同組合を創設することを學ぶ。マルクスの學說は完全な勝利を保持し、そして擴まつて行く。徐々に、しかし撓まず、プロレタリアの力の拾集と集合との過程、來るべき戰鬪へのその準備の過程が前進する。

歷史の辨證法は次の如くである、卽ちマルクス主義の理論的勝利はその敵をしてマルクス主義者として假裝せしめる。內面的に腐敗した自由主義は社會主義的日和見主義の姿で自らを蘇らせようとする。偉大な戰鬪のための力の準備の時期を、彼等はこの戰鬪の否認といふ意味に解釋する。賃銀奴隷制に對する鬪爭のための奴隷の地位の改善を、彼等は奴隷が五カペーク銅貨に代へて自由に對する自己の權利を賣ることの意味に說明する。彼等は臆病にも『社會的平和』（卽ち奴隷所有との平和）を、階級鬪爭の放棄等々を說教する。彼等は社會主義的代議士、勞働者運

動の種々の役員および『同情的』インテリゲンチャの間に非常に多くの味方を持つてゐる。

三

最大の世界的な嵐の新しい源泉がアジアに開かれるや、日和見主義者は『民主々義』の下における『社會的平和』や嵐の非必然性を讃美することができなくなつた。ロシア革命に次いで、トルコ、ペルシャ、支那の革命が起つた。我々は今や恰もこれらの嵐とヨーロッパに對するそれらの『逆の反映』との時代に生活してゐる。種々の『文明化された』ハイエナ達が今やそれに對して牙を研いでゐる大支那共和國の運命がどうであらうとも、世界における如何なる力もアジアにおいて古い農奴制を復活することはできないし、アジアおよび半アジア諸國における人民大衆の英雄的民主々義を地球面から掃蕩することはできない。

ヨーロッパにおける資本主義に對する決定的闘爭の久しい延期は、大衆的闘爭の準備と發展とに注意しない若干の人々を絶望と無政府主義とに至らしめた。我々は今や、無政府主義的絶望が如何に近視的であり怯懦であるかを見るのである。

八億のアジアが同じヨーロッパ的理想のための闘爭に引き入れられた事實からは、絶望ではなくて、勇氣を汲み取らなければならぬ。

アジアの革命は、自由主義の同じやうな無性格と下劣、民主々義的大衆の獨立性の同じやうな排他的な意義、プロレタリアートとあらゆるブルジョアジーとの同じやうな明確な區劃を我々に示した。ヨーロッパ並びにアジアの經驗の後に非階級的政治や非階級的社會主義を口にする者は、あつさりと檻に入れてオーストリアのカンガルーとでも並べて見世物にするに値する。

アジアに次いでヨーロッパもまた——たゞアジア式にではないが——動き始めた。一八七二—一九〇四年の『平和的な』時期は歸ることなく永遠に過ぎ去つた。トラストの物價引上げと壓迫とは經濟闘爭の未曾有の尖銳化を喚び起し、そしてこの尖銳化は、自由主義によつて最も墮落せしめられたイギリスの勞働者をさへ動かした。政治的危機は最も『堅固な』ブルジョア＝ユンケル國、ドイツにおいてさへ、我々の眼に見える。熱狂的な軍備と帝國主義の政策とは、現代ヨーロッパを火藥樽に最もよく似たやうな『社會的平和』たらしめつゝある。だがすべてのブルジョア黨の崩壞とプロレタリアートの成熟とは撓まず前進しつゝある。

マルクス主義の出現以後、世界史のの三大時代の各〻は、マルクス主義に新しい確認と新しい勝利とを齎した。しかし來るべき歴史的時代は、プロレタリアートの學說としてのマルクス主義に、更に大きな勝利を齎すであらう。

（全集、第三版、第十六卷、三三一―三三三頁）。

カール・カウツキー、『ベルンシュタインと社會民主黨綱領、反批判』（評論）（註八）

一八九九年に書かれ、一九二八年『レーニン・スボールニク』第七巻に初めて掲載されたもの。

……序論においてカウツキー*は、もしそれの計畫者が良心なきペダンチズムと學者氣取りとの狭隘な埒内に批判を閉ぢこめたくないならば、もし彼等が『理論的頭腦』と『實踐的頭腦』との聯關を、而も特殊な條件の下におかれた一個人ではなくて、人口大衆の實踐的頭腦との聯關を見失ひたくないならば、眞摯にして良心的な批判は如何なる條件を充たさなければならないか、といふテーマに關する最高度に貴重且つ適切な思想を若干述べてゐる。勿論、最高度の眞理である――とカウツキーはいふ――そしてもしベルンシュタインが自己の從前の見解が誤つてゐたといふ心底からの確信に到達したとすれば、彼の直接の義務は自己の確信を全く決定的に述べること

である。しかし實に不幸は、ベルンシュタインにはまさに率直さと決斷とが足りないとにある。彼の小册子は著しく『百科辭典的』である（すでにアントニオ・ラブリオラが或るフランスの雜誌において指摘したやうに）（註九）、それは多くの問題、無數の問題に觸れてゐるが、これらの問題中の一つについてさへも批判者の新しい見解の全體的且つ明晰な說明を與へてゐない。批判者はたゞ自己の疑問を述べてゐるのみで、彼によつて僅かに觸れられた困難且つ複雜な諸問題を何等の獨立的な硏究なしに投げ出してゐる。このことから――と皮肉にカウツキーは指摘してゐる――ベルンシュタインの味方は彼の著書を種々雜多に理解し、そしてベルンシュタインの敵はすべてそれを一樣に理解する、といふ奇妙なことが生ずるのである、と。ベルンシュタインが自己の敵に向つてなしてゐる抗議は、彼等が彼を理解せず、彼を理解しようと欲しない、といふ點にある。ベルンシュタインによつて彼の敵に對する答として書かれた數多の雜誌および新聞の論文は、彼の積極的な見解を少しも明かにしなかつた。

* 原稿の初めは保存されてゐない（編輯者）。

カウツキーは彼の反批判を方法の問題から始めてゐる。彼は唯物史觀に對するベルンシュタイ

ンの反駁を考察して、ベルンシュタインが『決定論的』概念と『機械論的』概念とを混同し、意思の自由と行爲の自由とを混同し、何等の基礎づけなしに歴史的必然と人間の强制的な、出口のない狀態とを同一視したことを示してゐる。ベルンシュタインが實に反覆してゐるところの宿命論の陳腐な非難は、マルクスの歴史理論の最も基本的な前提によつてすでに反駁されてゐる。すべてを生產力の發展に歸することはできない、とベルンシュタインはいふ。他の諸要因をも『計算に取り入れ』なければならぬ、と。――至極結構だ、とカウツキーは答へる、しかしこれは、如何なる歴史觀によつて指導されようとも、すべての研究者がなさねばならないことではないか、と。我々にマルクスの方法を、卽ち實際においてかくも輝しく正しいことを自ら證明したしまた證明し續けてゐる方法を放棄させようと欲する者は、二つの道のうちの一つを進まなければならぬ。卽ち一つは彼が一般に歴史的過程の合則性、必然性の觀念を放棄することである、そしてその時には卽ち、彼は社會學の科學的基礎づけのすべての試みを海中に投棄するのである。或ひは彼は、如何にして他の事實（例へば、倫理的見解）から歴史的過程の必然性を結論することができるかを示さなければならぬ、――彼は『資本論』におけるマルクスの分析との僅かの比較

にでも耐へうる分析によつて示さなければならぬ。ベルンシュタインはほんの僅かでもこれをしようとしないのみならず、他の諸事實を『計算に取り入れる』ことに關する無内容の一般的な章句を口にするのみで、その不十分なことを彼自ら知らないかの如くに、自己の著書において古い唯物論的方法を用ひ續けてゐる！　カウツキーが示してゐるやうに、ベルンシュタインはこの方法を最も許すべからざる亂暴さと一面性とを以てあちこちにさへ應用してゐる！　更に、ベルンシュタインの非難は、氣儘な構造等々に導くといふ辨證法に向けられてゐる。ベルンシュタインはこの文句（すでにロシアの讀者には嘔氣を催すまでに飽き〳〵してゐるところの）反覆するので、辨證法の誤りが何處にあるか、――ヘーゲルまたはマルクスおよびエンゲルスが方法論的誤謬（そしてまさに如何なる誤謬）を犯してゐるかどうかを示さうとは少しもしてゐない。ベルンシュタインがそれによつて自己の意見を是認し且つ裏書しようと試みてゐる唯一のものは、『資本論』の結論的な章句の一つ（資本蓄積の歷史的傾向に關するもの）の『傾向性』の指摘である。この非難は極度に使ひ古されたものである。卽ちオイゲン・デューリングも（註一〇）ユリウス・ヴォルフも（註一一）ドイツにおけるその他の多くのものもそれを提起し、七十年代におけるJ・ジュ

コフスキー氏も（註一二）九十年代におけるN・ミハイロフスキー氏も（註一三）、――曾てこの非難のためにJ・ジュコフスキー氏に輕業の罪を立證した（註一四）ところのそのミハイロフスキー氏――提起したのである。そしてベルンシュタインはこの使ひ古された妄誕を支持するために如何なる證明を引用してゐるか？ たゞ次のものだけである、即ちマルクスは豫めすでに準備された結論を携へて『研究』に着手した、何故なら『資本論』はすでに四十年代にマルクスによつて提起されたと同じ結論を一八六七年に引き出してゐるからである、と。かゝる『證明』は事實の歪曲に等しい、――とカウツキーは答へてゐる、――何故ならマルクスによつて „Zur Kritik“（ロシア譯『經濟學の若干命題の批判』參照）（註一五）の序文のなかに正確に述べられてゐるやうに、マルクスは自己の結論の基礎を一つの研究ではなくて、二つの研究の上においてゐるからである。最初の研究は、四十年代に、マルクスが『ライン新聞』の編輯部から退いた後に行はれた。マルクスが編輯部から退いたのは、彼は物質的利害について論じなければならなかつたが、彼はこれに對して教養が足りないことを自覺したからである。公けの舞臺から――とマルクスは自ら書いてゐる――私は書齋に退いた、と。かくして（とカウツキーはベルンシュタインに對して暗

示的に力說してゐる）、マルクスは、物質的利害に關する自己の判斷の正しさについて、當時支配したこの問題に對する諸見解の正しさについて疑惑を抱いたが、自己の疑惑をば、それについて一冊の書物を書くほど、そのことを萬人に知らせるほど重要とは考へなかつた。否、マルクスは、舊來の諸見解に對する疑惑から何等かの積極的な新しい見解へ移るために、勉强に着手したのである。彼はフランスの社會理論とイギリスの經濟學とを研究し始めた。彼は、當時イギリスにおける國民經濟の事實的狀態を詳細に研究してゐたエンゲルスと親しんだ。この共同事業、この最初の研究の結果は、二人の著述家が四十年代の終りに全く決定的に敍述したところの周知の結論であつた。一八五〇年以後マルクスはロンドンへ移住した、そして科學的研究にとつてのロンドンにおける生活の有利な條件は彼を鼓舞して『もう一度すつかり初めからやり直して新しい材料によつて批判的に仕事を仕上げよう』と決意させた（『若干命題の批判』、XI頁、傍點は私のもの）（邦譯、全集、第七卷、四一七頁）。長年月の間續いたこの第二の研究の成果は、„Zur Kritik"（1859）と „Das Kapital"（1867）であつた。『資本論』の到達した結論が四十年代の最初の結論と一致してゐるのは、第二の研究が第一の研究の結果を確認したからである。『私の見

解は、如何に批判されようと、……私の誠實な長年月の研鑽の成果である』――とマルクスは一八五九年に書いた（同上、XII頁）（邦譯、同上、四一七頁）。これが研究それ自體よりも遙か以前に準備された結論に似てゐるといふのは虚僞ではないか？　とカウツキーは質問してゐる。

カウツキーは辨證法の問題から價値の問題へ移つてゐる。ベルンシュタインはいふ、マルクスの理論は完成されてはゐない、それは、『決してまだ完全には説明されてゐない』多くの問題を殘してゐる、と。カウツキーはこれを否認しようとは思はない、即ち、マルクスの理論は科學の最後の言葉ではない、と彼はいつてゐる。歴史は、理論のヨリ以上の發展を要求するところの、新しい事實を齎し、新しい研究法を齎す。もしベルンシュタインが新しい事實と新しい研究法とを理論のヨリ以上の發展のために利用しようと試みたのであるならば、すべての人々は彼に感謝したであらう。然るにベルンシュタインはこのことについては考へないで、マルクスの弟子達に對する安つぽい攻撃と、ゴッセン＝ジェボンス＝ボェーム學派の限界效用説はマルクスの勞働價値説に劣らず公正である、といふが如き全く愚劣な、純折衷主義的批評とに止まつてゐるのである。二つの理論は異つた目的のためにそれぞれ意義を持つてゐる、――とベルンシュタインはい

ふ、――何故ならマルクスがそれらは效用であるといふ商品の性質を捨象する權利を持つてゐると同樣に、ボェーム・バウェルクは、それらが勞働によつて生産されるといふ商品の性質を捨象する同じ權利をア・プリオリに持つてゐるから、と。カウツキーは指示する、これは――二つの對立的な、互ひに排他的な理論を異つた目的のために役立つと考へること（而もベルンシュタインは、あれやこれやの理論が如何なる目的のために役立つかを述べてゐない）は、全く馬鹿げたことである、と。問題は、商品の如何なる性質を我々がア・プリオリに（von Hause aus）捨象するのが正しいかといふことにあるのではなくて、生産物の交換を基礎とする近代社會の基本的諸現象を如何に說明するか、商品の價値、貨幣の機能その他を如何に說明するかにある。マルクスの理論は多くの問題をまだ說明しないで殘してゐると假定しよう。しかしベルンシュタインの價値說はまだ全く說明されてゐない問題である。ベルンシュタインはなほ、勞働の『限界密度』の概念を構成したブーフ（註一六）を引用してゐるが、しかしベルンシュタインはブーフの見解の完全な敍述をも與へず、この問題に關する自己の意見の決定的な聲明をも與へてゐない。だがブーフは、明かに、價値を賃銀に依存させ、また賃銀を價値に依存させることによつて、矛盾のうちに

困惑してゐる。ベルンシュタインは價値に闘する自己の批評の折衷主義を感じて、折衷主義一般を擁護しようと試みてゐる。彼はそれを『すべてのドグマに固有な、思想を窮屈な壓搾機におしこめようとする傾向に對する健全な常識の反逆』と呼んでゐる。もしベルンシュタインが思想史を回顧するならば――とカウツキーは答へてゐる――彼は、狹い壓搾機に思想をおしこめることに對する大なる反逆は折衷主義ではなかつたこと、見解の統一、完全性への傾向が常にそれに內在的であつたことを見るであらう。折衷主義者はあまりに臆病で、反逆を敢行することができなかつた。もし私がマルクスの前で鄭重に摺足し、それと同時にボェーム・バウェルクの前で鄭重に摺足するとすれば、こゝから反逆に至るにはまだ非常に遠いではないか！　カウツキーはいふ、反逆者の名稱に値するやうな折衷主義者を一人でもいゝから思想共和國において私に指名せしめよ！　と。

方法から方法の適用の結果へ移つて、カウツキーはいはゆる Zusammenbruchstheorie、西ヨーロッパ資本主義の破滅、突然的崩壞の理論、マルクスがそれを不可避と考へ且つそれを巨大な經濟的恐慌と結びつけたといふ崩壞の理論に立ち停まつてゐる。カウツキーは、未だ曾てマルク

スおよびエンゲルスが Zusammenbruchstheorie を提起せず、Zusammenbruch を確かに經濟恐慌と結びつけなかつたことを述べ且つ指示してゐる。これは、個々の著作から個々の章句を意味もなしに引き拔くことによつて、マルクスの理論を一面的に說明し、それで以て次いで理論の『一面性』と『粗雜性』とを得意になつて繰返すところの、敵の歪曲なのである。實際においては、マルクスおよびエンゲルスは、西ヨーロッパの經濟的諸關係がヨーロッパの最近世史によつて登場せしめられた諸階級の成熟と力とによつて變革されることを提議したのである。ベルンシュタインは、これはマルクスの理論ではなくて、カウツキーによる解釋とその擴大である、と主張しようと試みたが、カウツキーは四十年代および六十年代のマルクスの諸著作からの正確な引用によつて、そしてまたマルクス主義の根本思想の分析によつて、ベルンシュタイン――かくも無作法にマルクスの學徒に『辯護論と胡麻化し』との罪を着せたところの――のこの、眞に胡麻化し屋的な詭計を完全に反駁した。カウツキーの著書のこの箇所は、二、三のロシアの著述家(例へば雜誌『ナチャーロ』におけるブルガーコフ氏)(註一七)がベルンシュタインが『批判』の形で提供したマルクスの理論の歪曲を大急ぎで反覆しただけに、特に興味がある(この歪曲をプロコポ

ヴィッチ氏もその著書『西歐における勞働者運動』、ペテルブルグ一八九九年において反覆してゐる)。

カウツキーは近代の經濟的發展の基本的傾向を特に積極的に解剖し、それによつて、この發展がマルクスの特徴づけた方向に進行してゐないといふベルンシュタインの意見を反駁してゐる。カウツキーの著書の『大生產と小生產』の章、そしてまた、經濟學的分析にあてられ且つかなり廣汎な數字的材料を有する諸章が、こゝでは說明されえないこと、そして我々はそれらの內容の簡單な言及に止めなければならないことは、自明である。カウツキーは力說してゐる。肝要なのは卽ち全體としての發展方向であつて、如何なる理論によつてもそのすべての多樣性において考慮されえないところの、部分性と表面的諸現象ではない、と。(この單純な、而も屢〻忘れられる眞理をマルクスもまた『資本論』の當該諸章において讀者に思ひ出させてゐる)。一八八二年および一八九五年のドイツの工業調査の資料の詳細な解剖によつて、カウツキーは、これらの資料がマルクスの理論を立派に確認し且つ資本の集中と小生產の驅逐との過程について一切の疑惑なからしめたことを指示してゐる。ベルンシュタイン自身はまだ一八九六年(彼自身もまだ辯護

論者および胡麻化し屋の同業組合に屬してゐた時――とカウツキーは皮肉つてゐる）には、全く決定的にこの事實を承認してゐたが、今や小生産の力と意義とを無限に誇張してゐる。例へば、勞働者數二十人以下の企業數をベルンシュタインは數十萬と算定し、『明かにその悲觀的な熱心さで餘計な零を附加へてゐる』、何故ならドイツにおけるかゝる企業は僅かに四萬九千にすぎないからである。而も統計によつて小企業家に一緒に算入されてゐるものは、即ち辻馬車の馭者、即ち便利屋、即ち葬儀屋、即ち果物行商人、假令彼等が資本家のために自宅で勞働してゐようとも、即ち裁縫女、等々である！　理論的な點において特に重要なカウツキーの批評を指摘しよう、即ち小商工企業（上にあげた種類の）は屢〻資本主義社會においてはたゞ相對的過剰人口形態の一つであるにすぎない――破滅しつゝある小生産者、職業を見出しえない勞働者は（往々一時的に）小商人、行商人、下宿屋および間貸人（これもまた、あらゆる種類の他の企業と並んで統計によつて登錄される『企業』である！）等々に轉化する。これらの職業が溢れることは決して資本主義社會における小生産の活況を示すものではなくて、貧困の増大を示すものである。しかしベルンシュタインは、彼の意見によつて、これが彼に有利な時には（大生産および小生産の問

題において）、小『工業家』の意義を力說し且つ誇張し、これが彼に不利な時には（貧困の增大に關する問題において）、それらのことを貶すのである。

ベルンシュタインは、株式會社は資本を分割することを『許し』且つその集中を『餘計なものにする』といふロシアの公衆にも周知の議論をずつと以前から繰返し、小株式に關する若干の數字を引用してゐる（『ジーズニ』、一八九九年第三號比照）（註一八）。カウツキーは答へていふ、これらの數字はまるで何物をも證明しない、何故なら諸會社の小株式は大資本家の所有となりうるから（これはベルンシュタインもまた承認せざるをえない）、と。株式會社が有產者の數を增大する、といふ主張においては、ベルンシュタインは絕對に何等の證明をも齎さないし、そしてまた齎しえない、何故なら株式會社は實際において、信じ易い小資產の公衆を大資本家と投機業者とのために收奪するに役立つから。株式數の增加は、たゞ富が株式の形態を取る傾向を有することを示すだけであつて、富の分配についてはこの增大はまるで何物をも語らないのである。一般に、ベルンシュタインは有產者數、所有者數の增大の問題に驚くべく輕卒に觸れてゐるのであるが、これはブルジョア的支持者がまさにベルンシュタインの著書のこの部分を賞讃し、そしてそれ

は『尨大な數字的材料』に基いてゐるのだ、と宣言することを妨げなかつた。ベルンシュタインはこの尨大な材料を二頁に收めたほど巧妙であつた！　とカウツキーは皮肉つてゐる。ベルンシュタインは有產者と資本家とを混同してゐる、後者の數の增大は何人も否認しなかつたけれども。彼は所得稅に關する資料を取り、そしてそれの財政的性質と、財產所得および俸給その他の所得の混同とを無視してゐる。彼は異つた時期のために異つた方法で得られた（例へばプロシャについて）從つて比較されえない資料を比較してゐる。彼は、ヴィクトリア女王の紀念祭を祝福して統計を極度に輕蔑してゐる或る街の新聞の雜報からイギリスにおける有產者數の增大に關する數字を借用するまでに立ち至つてゐる（而もこれらの數字を自已の主要な切札として太字で印刷さへもしてゐる！）これらの報道の典據は不明であり、そしてかゝる報道はイギリスの所得稅に關する資料を基礎にしては得ることができない、何故ならこれらの資料は納稅者數と各〻の納稅者の總收入とを算定することを許さないからである。カウツキーはコルブの著書から一八一二―一八四七年のイギリスの所得稅に關する資料（註一九）を引用し、そしてそれらがベルンシュタインの雜報的資料と同樣に、有產者數の（似而非）增大を示してゐる――而もイギリスにおける民

衆の最もひどい貧困の恐るべき増加の時期について！――ことを指摘してゐる。カウツキーによるベルンシュタインの資料の詳細な解剖は、ベルンシュタインは眞實に有產者數の增大を證明する數字は一つも引用してゐない、といふ結論に導いてゐる。

ベルンシュタインはこの現象を理論的にも導き出さうと試みてゐる。即ち、資本家達は、と彼はいふ、その數量がかくも巨大に增加する剩餘價値を殘らず自ら消費することができない、即ち、それを消費する有產者の數が增大するのである、と。マルクスの實現理論（この理論はロシアの文獻においてすでに度々說明された）を全く無視してゐるこの滑稽な議論を反駁するためには、カウツキーには大した勞力はいらない。特に興味があるのは、カウツキーがそれを反駁するのに、單に理論的考察を以てしないで、西ヨーロッパ諸國における奢侈と浪費との增大や、この過程をかくも尖銳化する急速に變化する流行の影響や、失業者の大衆や、剩餘價値の『生產的消費』――即ち新しい企業への投資、特にロシア、アジア、アフリカの鐵道その他の企業へのヨーロッパ資本の投下を立證するところの、具體的資料にもよつてゐることである。

ベルンシュタインはマルクスの『貧困理論』または『貧困化理論』がすべての人々に置きざり

にされてゐると宣言してゐる。カウツキーは、これもまたマルクスの敵の歪曲的誇張であつて、マルクスはこの種の理論を提起しなかつたことを指示してゐる。マルクスは貧困、墮落その他の増大について語り、これと並んで反作用的傾向およびひとりそれのみが實にこの傾向を産出するところの眞の社會的力を指示した。貧困の增大に關するマルクスの言葉は現實によつて完全に是認されてゐる。卽ち第一に、資本主義は貧困を生み且つ强める傾向を持つてをり、そしてこの貧困は前述の反作用的傾向が缺如してゐる場合には巨大な規模に達することを、我々は實際に見るのである。第二に、貧困は物理的な意味においてゞはなくて、社會的な意味において、卽ちブルジョアジーの欲望および社會全體の欲望の上昇しつゝある水準と勤勞大衆の生活水準との間の不調和といふ意味において、增大する。ベルンシュタインは、『貧困』のかゝる理解について、これはピックウィック的な（特殊な）意味での理解だと皮肉つた。カウツキーはこれに答へて、ラッサール、ロードベルトゥス、エンゲルスの如き人々は、貧困を物理的な意味においてのみならず、また社會的な意味においても理解する必要を全く決定的に聲明したことを指示してゐる。『ピックウィック』クラブ（註二〇）には——と彼はベルンシュタインの皮肉を受け流してゐる——見らるゝ如

く、悪くない交際仲間が集るのである、と。最後、第三に、貧困の増大といふ言葉は、資本主義の『邊疆地方』についてそのあらゆる眞實さを保持してゐる、邊疆といふ言葉を地理的意味に理解しても（やつと資本主義が侵入し始め、往々物理的貧困のみならず、人口大衆の直接の飢餓をも生みつゝある國々）、政治的經濟的意味に理解しても（クスタール工業および一般にまだ時代後れの生産様式を保存してゐる國民經濟諸部門）。

我々ロシア人にとつて極めて興味がありまた特に敎訓的なのは、『新中間身分』に關する章である。もしベルンシュタインがたゞ、沒落しつゝある小生産者の代りに新中間身分――インテリゲンチヤが現はれる、といはうと欲したのであるならば、彼は正しかつたであらう、とカウツキーはいひ、彼はすでに數年前この現象の重要性を指摘した、と述べてゐる。資本主義は國民的勞働のすべての領域において特に急速に使用人の數を上昇せしめ、インテリゲンチヤに對する益々大なる需要を表はしてゐる。インテリゲンチヤは他の諸階級の間において獨自の地位を占め、その交友關係、見解その他によつて一部分はブルジョアジーに加はり、資本主義が愈々益々インテリゲンチヤの獨立的地位を奪ひ、彼等を隷屬的な雇人に轉化し、彼等の生活水準を低下すべく脅

威するにつれて、一部分は賃銀勞働者に加はる。考察されつゝある社會層の過渡的な、不安定的な、矛盾的な地位は、五十年前にマルクスがその皮肉を以てかくも容赦なく鞭打つたところの、中途半端な、折衷主義的な見解、對立的な主義および見地の混合物、言葉の上では最高の領域へ上り且つ歴史的人口群の衝突を文句で塗りつぶさうとする傾向が、彼等の間に特に廣く普及されてゐることのうちに反映されてゐる。

恐慌理論に關する章においてカウツキーは、マルクスは産業恐慌が十年毎に循環するといふ『理論』を全く提起せず、たゞ事實を確認したにすぎないことを指示してゐる。近時におけるこの循環の變化はエンゲルス自身によつて指摘されてゐる。企業家のカルテルは、生産を制限し且つ統制することによつて、恐慌に反作用しうる、と人々はいふ。しかしこのアメリカ――カルテルの國において、我々は制限の代りに生産の巨大な增大を見る。次に、國内市場のための生産を制限しつゝ、カルテルは國外市場のために生産を擴張し、そこでは商品を缺損價格で販賣し、祖國の消費者からは獨占價格を取る。保護主義の下においてはこの制度は不可避的であるが、自由貿易制度が保護主義に取つて代ることを期待することは、何等の根據も持つてゐない。小工場を

閉鎖し、生産を集中し且つ獨占し、改善を導き入れることによつて、カルテルは生産者の地位を著しく劣惡化する。ベルンシュタインは、恐慌を生む投機は世界市場の諸條件が算定されえないものから算定されうるものおよび知られたものへ轉化されるにつれて弱まる、と考へてゐる。しかし彼は、新しい國々の『算定されえない』諸條件こそ古い國々における投機に巨大な衝擊を與へることを忘れてゐる。カウツキーはまさに近年における投機の增大と、そしてまた非常に遠い將來における恐慌を豫告するところの徵候の數の增大とを、統計的資料によつて指示してゐる。

カウツキーの著書の爾餘の部分のうちから、我々は、或る群の經濟的力とその經濟的組織とを混同する(S・プロコポヴィッチの前記の著作のやうに)人々の陷る混亂の解剖を指摘し、ベルンシュタインは與へられた歷史的情勢の純粹に一時的な諸條件を一般的法則に引上げてゐる、といふカウツキーの指示、——民主々義の本質に對するベルンシュタインの誤つた見解の反駁、——すべての勞働者がドイツでは選擧權を行使するのではなく(二十五藏以上の男子に限られてゐる)またすべてが選擧に參加するのではない、といふ些事を忘れて、ドイツにおける工業勞働者數を選擧人の數と對置したところの、ベルンシュタインの統計的誤謬の解明、を指摘しよう。我々

は、ベルンシュタインの著書の意義およびそれに關する論爭の問題に興味を有する讀者に、ドイツの文獻に振り向いてロシアの文獻において支配してゐる折衷主義者の支持者達の偏頗にして一面的な拔萃を決して信用しないやうにと、たゞ極力勸めうるのみである。聞くところによれば、こゝに考察されたカウツキーの著書の一部分はロシア語に飜譯される筈だといふ。これは非常に望ましいことであらうが、しかしこれは原本を讀む代りにはならない。

（全集、第三版、第三十卷、九一―一七頁）。

K・L・クーゲルマン宛のK・マルクスの書簡のロシア譯への序文(註一二)

一九〇七年二月十八(五)日に書かれ、一九〇七年小册子『L・クーゲルマン宛のK・マルクスの書簡』、『ノーヴァヤ・ドゥーマ』版に掲載されたもの。

ドイツ社會民主黨の週刊誌『ノイエ・ツァイト』に發表されたクーゲルマン宛のマルクスの書簡の完全な蒐集を單行小册子として出版することによつて、我々はロシアの公衆にマルクスおよびマルクス主義をヨリ親しく知らしめることを自己の任務としたのである。マルクスの往復書簡においては、常然期待されるやうに、非常に多くの箇所が個人的な用件に割かれてゐる。傳記作者にとつてはこれらすべてのものは、極めて貴重な材料である。しかし一般に廣汎な公衆にとつて、そして特にロシアの勞働者階級にとつては、理論的および政治的材料を含んでゐる手紙の箇

所の方が無限に重要なのである。まさに我々にあつては、我々によつて經驗されつゝある……時代においては、勞働者運動および世界政治のあらゆる問題に直接反應する人としてマルクスを描き出してゐる材料を探究することが、特に敎訓的である。『偉大な變革の諸條件の下においてその思考と意欲とが形成された人々の面影を知ることは、向上的な影響を及ぼす』といふ、『ノイエ・ツァイト』編輯部の言葉は全く正しい。一九〇七年におけるロシアの社會主義者にとつてはかゝる相識は二重に必要である、何故ならそれは大衆に彼の國によつて經驗されつゝあるありとあらゆる……における社會主義者の直接的任務に對して極めて貴重な指示を與へるからである。ロシアは今やまさに『偉大な變革』を經驗しつゝある。比較的暴風的な一八六〇年代におけるマルクスの政策は、今日のロシア革命における社會民主々義者の政策にとつて非常に屢〻直接の模範として役立たなければならないものである。

だから我々はマルクスの往復書簡のうちで理論上の點において特に重要な箇所を簡單に指摘し、——そしてプロレタリアートの代表者としての彼の……政策を一層詳しく述べるに止めようと思ふ。

マルクス主義を一層完全に且つ深く究明するといふ見地から著しく興味があるのは、一八六八年七月十一日附の手紙（四二二頁以下）（邦譯、全集、第二十一巻、七〇頁以下）である。マルクスは、こゝで、俗流經濟學者に對する論爭的批評の形態で、いはゆる『勞働』價値說に關する彼の理解を極めて明瞭に叙述してゐる。『資本論』の最も教養のない讀者において最も自然的に生じ、從つて『教授的』、ブルジョア的科學の月並の代表者によつて最も熱心に摑まれてゐるマルクスの價値論に對する駁論が、まさに、こゝでマルクスによつて簡潔に、單純に、極めて明瞭に解剖されてゐる。マルクスはこゝで、如何にして彼が價値法則の闡明に到達したか、また如何にして到達しなければならないかを示してゐる。彼は、最も普通の駁論の例によつて、彼の方法を教へてゐる。彼は價値論の如き（一見）純理論的且つ抽象的な問題と、『混亂の永久化』を要求する『支配階級の利益』との聯關を明かにしてゐる。マルクスを研究し且つ『資本論』を讀み始めたすべての人々が、『資本論』の最初の最も難解な章の研究と共に、右の手紙を再三繰返して讀むことが望ましい。

理論上の點において特に興味のある手紙の箇所は、種々の著述家に對するマルクスの評價であ

る。生き生きと書かれ、熱心に滿たされた、すべての偉大な思潮とその分析とに對する深甚の關心を表はしてゐるマルクスのこれらの批評を讀む時には、天才的な思想家の演說を聞くかのやうに感ずる。ディーツゲンについて折に觸れて發せられた批評の外に、讀者の特殊の注意に値するのは、プルードン主義者に關する批評である（一七頁）（一八六六年十月九日附の手紙のことであらう。邦譯、前掲版、四九―五〇頁）。社會的昂揚の時期に『プロレタリアート』の中へ投じながら、勞働者階級の見地に貫かれて執拗に、熱心にプロレタリア組織の『隊列の中で』働く能力のない、ブルジョアジー出身の『輝かしい』インテリゲンチャ的青年が、僅かの筆致で驚くべく明瞭に描かれてゐる。

こゝには、十年の後エンゲルスによつて（マルクスと共同で）書かれた有名な著書『反デューリング論』の內容を豫示するやうな、デューリングに關する批評がある（三五頁）（邦譯、同上、六四頁）。（『反デューリング論』には）ツェデルバウムのロシア譯があるが、遺憾ながら、脫漏があるのみならず、まさしく惡譯であり、誤謬がある（註二二）。同じくそこにはまたリカルドオの地代論に觸れてゐるチューネンに關する批評がある。マルクスはすでに當時、一八六八年に、『リカルドオの

誤謬』を決定的に論駁した。この誤謬は一八九四年に出版された『資本論』第三巻において彼が最後的に論駁したものであり、そしてそれは、我國の超ブルジョア的であるのみならず『黑百人組的』でさへあるブルガコフ氏から『殆ど正統派的な』マスロフに至るまでの修正主義者達が、今日に至るまで反覆してゐるものである。

同じく興味があるのは、ビュヒナーに關する批評、並びに俗流唯物論とランゲ（『敎授的』ブルジョア哲學の通常の源泉！）から剽竊された『淺薄な駄辯』との評價である（四八頁）（邦譯、七六頁）。

マルクスの……政策へ移らう。我がロシアにおいては社會民主々義者の間に、特殊な鬪爭形態およびプロレタリアートの特殊な任務を有する……時期は殆ど例外であつて、『憲法』と『極端反對派』とが原則であるといふやうな、マルクス主義に關する小ブルジョア的觀念が驚くほど普及されてゐる。現在世界中の何れの國にもロシアにおけるやうな深刻な……危機は存在しない、――そして何れの國にも……に對してかくも懷疑的な、俗物的な態度を取る『マルクス主義者』（マルクス主義を墮落させ且つ俗惡化するところの）は存在しない。……內容がブルジョア的であ

るといふことから、我國ではブルジョアジーが……推進力であり、この……におけるプロレタリアートの任務は副次的、非獨立的であり、それをプロレタリア的に指導することは不可能である！といふ淺薄な結論がなされてゐる。

マルクス主義のこの淺薄な理解をマルクスはクーゲルマン宛の手紙において如何に暴露してゐることだらう！　こゝに一八六六年四月六日附の手紙がある。マルクスは當時彼の主著を完成してゐた。彼は一八四八年のドイツ革命の評價をこの手紙より十四年前にすでに最終的に與へてゐた。一八四八年における間近い社會主義革命に關する彼の社會主義的幻想は彼自身が一八五〇年に論駁した。そして一八六六年に、新しい政治的危機の發展をやつと目撃し始めた時に、彼はかう書いてゐる――

『ハプスブルグ家とホーヘンツォルレルン家……(小さな糞蟲共のことはいふに及ばず)……がなければ、結局再び三十年戰爭に到達しなければならない、といふことを我が俗物ども（ドイツの自由主義的ブルジョアのこと)も遂に洞察するであらう！』(一三―一四頁)（邦譯、同上、四七頁)。

來るべき……（それはマルクスの期待したやうに、下からではなくて、上から行はれた）がブ

ルジョアジーと資本主義とを廢止するといふ幻想は露ほどもない。それはたゞプロシャとオーストリーとの……にすぎないといふ極めて明瞭且つ明白な確認。而もこのブルジョア……に對する何といふ信賴だらう！　社會主義的前進にとつてのブルジョア……の巨大な役割を理解してゐるプロレタリア鬪士の何といふ……であらう！

三年後、フランスにおけるナポレオン帝國の崩壞の前夜に、『非常に興味ある』社會運動を確認しつゝ、マルクスは、『パリ人は當面せる新しい……鬪爭のために準備するために、彼等の最近の……過去を本當に學び始めてゐる』とまさに感激を以て述べてゐる。そしてマルクスは、過去のこの評價に際して明かにされた階級鬪爭を記述した後、かう結論してゐる（五六頁）（邦譯、同上、八二頁）、そして『歷史的魔法鍋全體はかくも沸騰してゐる。何時になつたら我國では（ドイツでは）そこまで行くことだらう！』

懷疑主義によつて衰弱し、ペダンチズムによつて愚鈍になり、懺悔の言葉に傾き、……には忽ち飽き、お祭を夢みると同じやうに、……の葬儀と合法的散文によるその代置とを夢みてゐる、ロシアのインテリゲンチャ的マルクス主義者がマルクスに學ぶべきことはこれである。彼等はプ

ロレタリアの理論家＝指導者から、……信念を、勞働者階級をその直接的……任務の最後までの防守に呼びつどへる能力を、……一時的な失敗の後における臆病な泣面を許さない精神の堅牢さを學ぶべきであらう。

マルクス主義の半可通は考へる、これはすべて倫理的饒舌であり、空想であり、現實主義の缺如である、と。否、紳士諸君、これは……理論と……政治との結合であり、それなくしてはマルクス主義がブレンタノ主義、スツルーヴェ主義、ゾンバルト主義となるところの結合である。マルクスの學說は階級鬪爭の理論と實踐とを不可分の一全體に結合した。そして客觀的情勢を現存するものゝ肯定に白面で歪曲し、……あらゆる一時的衰徵へできるだけ早く阿り、できるだけ早く『……幻想』を投げ棄て、そして『現實的』吝嗇に取りかゝる傾向に達してゐる者は、マルクス主義者ではない。

マルクスは最も平和的な、彼の表現によれば、『牧歌的な』、——（『ノイエ・ツァイト』編輯部の言葉によれば）『あはれにも愚鈍な』時代において……を感知し、そしてプロレタリアートをその進步的な、……任務の意識に高めることを理解してゐた。俗物的にマルクスを單純化する我

がロシアのインテリゲンチャは、最も……時代にプロレタリアートに受動の政策、『流れに從つて』、卽ち流行の自由主義黨の最も不安定な分子のびく〳〵の支持に從順について行く政策を敎へてゐる！

マルクスによるコンミューンの評價はクーゲルマン宛書簡集の王冠である。そしてこの評價はそれをロシア社會民主黨右翼の態度と對照する場合には特に多くのものを與へる。一九〇五年十二月の後『……』と叫んだプレハーノフは、自己をマルクスと比較するほどの謙遜さを持つてゐた。マルクスもまた、一八七〇年には……にブレーキをかけたのである、と。

然り、マルクスも**また**それにブレーキをかけた。しかし見よ、プレハーノフ自身によつて取り上げられたプレハーノフとマルクスとの間のこの比較の場合には、何といふ深淵が現はれることであらう。

プレハーノフは一九〇五年十一月（註二三）、卽ちロシア革命の波の絕頂の一ケ月前、プロレタリアートを決定的に戒めなかつたのみならず、反對に、……について率直に述べた。しかし一ケ月の後鬪爭が燃え上つた時には、プレハーノフは、その意義、事件の一般的進行におけるその役

割、以前の鬪爭とのその聯關を少しも分析することなしに、轉々するインテリゲンチャの役割を取急いで演じたのである、『……』と。

マルクスは一八七〇年九月、卽ちコンミューンの半年前に、フランスの勞働者を率直に戒めた、……は狂氣の沙汰である、と彼は有名なインターナショナルの宣言に書いた（註二四）。彼は一七九二年の精神での運動の可能性についての國民的幻想を豫め明かにした。彼は後日ではなくて、數ケ月前に、『……』といふことができたのである。

そして、彼自身の九月の聲明によれば、この見込のない問題が一八七一年三月實現され始めた時、彼は如何に振舞つたか？ 恐らく、マルクスはこれを（十二月事件におけるプレハーノフのやうに）たゞ自己の敵、コンミューンを指導したプルードン主義者およびブランキー主義者の『壓迫』のために利用したであらうか？ 恐らく、彼は學級擔當の女教師のやうに、ぶつぶつ不平をいひ始めたであらうか？ ——私は前からいつておいた、私は豫め警告した、これは諸君の空想だ、諸君の革命的譫言だ、と。恐らく、彼は、プレハーノフの十二月の鬪士に對するが如くに、自己滿足せる俗物の教訓を以てコンミューン戰士を指導したであらうか？ ——『……』と。

否。一八七一年四月十二日マルクスはクーゲルマンへ宛てゝ、歡喜の手紙を書いてゐる――我がすべてのロシアの社會民主々義者の、文字を知るすべてのロシアの勞働者の部屋の壁に吊り下げたいやうな手紙を。

一八七〇年九月に……を狂氣の沙汰と呼んだマルクスは、一八七一年四月、國民的、大衆的運動を見て、最大の注意を以て、世界史的……運動において一歩前進を意味する大事件の關與者の態度を取つてゐるのである。

これは――と彼はいふ、それを簡單に他の手に渡すのではなくて、……試みである、と。そして彼はプルードン主義者とブランキー主義者とによつて指導されるパリの『英雄的』勞働者の眞實の讃歌を歌つてゐる。『このパリ人における何といふ彈力性、――と彼は書いてゐる――何といふ歷史的創意、何といふ自己犧牲の能力であらう！』(七五頁)……『歷史はまだこれほど偉大な類似の實例を知らない！』と。

大衆の歷史的創意をマルクスは何よりも高く評價してゐる。おゝ、一九〇五年十月および十二月におけるロシアの勞働者および農民の歷史的創意の評價において我がロシアの社會民主々義者

がマルクスに學んでゐたならば！

半年前に失敗を豫見した最も深遠な思想家の大衆の歴史的創意の前における低頭と、――『……』といふ生氣のない、良心のない、ペダンチックな言葉。これは天地の相違ではないか？

そしてロンドンに亡命生活をしながら、彼に固有のすべての熱情と激情とを以て經驗したところの大衆鬪爭の關與者として、マルクスは、『天をも衝かんとする』、『狂氣の如く大膽な』パリ人の直接的な歩みの批判に取りかゝつてゐる。

おゝ、當時において、一九〇六―一九〇七年のロシアにおいて……空想を叱責したマルクス主義者の中の我が今日の『現實的』賢者は、如何にマルクスを嘲笑したことであらう！　天を衝かうとする『試み』の前に低頭する唯物論者、經濟學者、空想の敵を人々は如何に愚弄したことであらう！　一揆主義的傾向、空想主義等々について、天に冲せんとする運動に對するこの評價について、形式ばつたすべての人々は、いかほど涙または寛大な笑ひまたは同情を注いだことであらう！

だがマルクスは……最高形態の技術を討議することを恐れる三文文士の賢さに充たされてはゐ

なかつた。彼はまさに……を討議してゐる。……？——と彼は、軍事的行動がロンドン附近で進行してゐたかの如くに述べてゐる。そして彼は決定する、勿論……だ、『直ちにヴェルサイユへ進むべきであつた』……

これは一八七一年四月に、偉大な……五月の數週前に書かれたものである……天を衝く『狂氣の沙汰』（一八七〇年九月）を開始した叛亂者は『直ちにヴェルサイユへ進むべきであつた』。

一九〇五年十二月には、征服された自由を奪還する最初の試みを力によつて固守するために、『……』。

然り、プレハーノフが自己をマルクスと比較したのは無駄ではなかつた！

『第二の誤謬は』と——マルクスはその技術的批判を續ける——『中央委員會』（軍事政府——このことを注意せよ——國民軍の中央委員會が問題になつてゐる）『があまりに早く……放棄したことである』。

マルクスは指導者達に……を戒めることを理解してゐた。しかし天を衝くプロレタリアートに

對しては、ブランキーおよびプルードンの虚僞の理論と誤謬にも拘らず、實際的助言者として、全運動を最高の段階に高めるところの大衆の闘爭の關與者としての立場を取つた。

『それはどうであらうとも』と彼は書いてゐる、『現在のパリ叛亂は――假令それが舊社會の狼や、豚や、下劣な犬どもに屈服しようとも――六月叛亂以來の……たるを失はない』。

そしてマルクスは、コンミューンのたゞの一つの誤謬をも、プロレタリアートに隱蔽しないで、この偉業に一つの著作を獻げた。そしてこの著作は今日に至るまで『天』を目ざす闘爭における最良の手引、――および自由主義的並びに急進主義的な『豚』にとつて最も恐るべき案山子となつてゐる。

プレハーノフは十二月に一つの『著作』を獻げたが、それは殆どカデットの福音書となつた。然り、プレハーノフが自己をマルクスと比較したのは無駄ではなかつた。

クーゲルマンはマルクスに、明かに或る疑惑の言葉を以て、事態の望みなきことや、空想に對立する現實主義の指示を以て答へた、――少くとも、彼はコンミューン――暴動をパリにおける一八四九年六月十三日の平和的デモンストレーションと比較した。

マルクスは直ちに（一八七一年四月十七日附）嚴しい返事を與へてゐる。

『もし鬪爭が――と彼は書いてゐる――間違ひなく有利な機會の條件の下においてのみ取り上げられたなら、世界史を作ることは、勿論極めて樂であつたらう』。

マルクスは一八七〇年九月……を狂氣の沙汰と呼んだ。……マルクスは彼等と行動を共にし、鬪爭の進行において彼等と共に學ばうとするのであつて、講壇的說敎をしようとはしない。彼は、豫め完全な正確さを以て機會を考慮しようとする試みは詐欺師の仕業または望みなきペダンチズムであらう、といふことを理解してゐる。彼は、勞働者階級が英雄的に、獻身的に世界史を創造することを、何よりも高く評價する。マルクスはこの歷史を、豫め誤りなく機會を考慮する可能性を持たないでそれを創造する人々の見地から眺めたのであつて、『それは容易に豫見されうることであつた……執るべきではなかつた……』などと說法するところの、インテリゲンチャ＝小ブルジョアの見地からは眺めなかつたのである。

マルクスはまた、望みのないことのためさへもの大衆の……がこれらの大衆のその後の……である瞬間が歷史上存在することを評價することができたのである。

マルクスから未來を創造する能力ではなくて、過去の評價のみを取り上げるために、無益に彼を引用することを好むところの、我が今日の似而非マルクス主義者には、——かゝる問題提起は、全く理解されないものであり、原則において無關係でさへもある。プレハーノフは、彼が一九〇五年十二月以後任務に『ブレーキをかけ』始めた時、そのことを考へて見もしなかつた……しかしマルクスは、一八七〇年九月に彼自身が……を狂氣の沙汰と認めたことを少しも忘れないで、まさにこの問題を提起してゐるのである。

『ブルジョア的なヴェルサイユの賤民どもは——と彼は書いてゐる——パリ人たちを鬪爭を選ぶか、鬪爭なしに仆れるか二者擇一の立場においた。後の場合における勞働者階級の墮落は、若干數の「指導者」の沒落よりも遙かに大きな不幸であつたらう』。

これを以て我々は、マルクスがクーゲルマン宛の手紙において與へてゐるところの、プロレタリアートに値する政策の敎訓の簡單な概觀を終ることにしよう。

ロシアの勞働者階級は、彼が『天を衝く』能力を有することをすでに一度證明したし、そしてなほ一度ならず證明するであらう。

（全集、第三版、第十卷、三六一—三六七頁）。

『F・A・ゾルゲその他宛のJ・P・ベッカー、J・ディーツゲン、F・エンゲルス、K・マルクスその他の書簡』のロシア譯への序文(註二五)

一九〇七年、右の譯書、P・G・ダウゲ出版に掲載されたもの。

こゝにロシアの公衆に提供される、マルクス、エンゲルス、ディーツゲン、ベッカーその他の前世紀の國際勞働者運動の指導者の書簡集は、我國の進步的マルクス主義文獻への必然的な補充物である。

我々は、これらの書簡が社會主義史にとつて、またマルクスおよびエンゲルスの活動の全面的

な解明にとつて重要なことをこゝでは詳細に論述しないであらう。問題のこの方面は說明を要しない。こゝではたゞ、印刷される書簡の理解のためにインターナショナルの歷史に關する基本的諸著作（イェック、『インターナショナル』、ロシア譯『ズナーニエ』版參照）、次にドイツおよびアメリカの勞働者運動（フランツ・メーリング、『ドイツ社會民主黨史』およびモーリス・ヒルキット、『アメリカ社會主義史』參照）等々に通ずることが必要である、といふことを指摘しよう。

我々はまたこゝにこの書簡集の內容の一般的概要とそれが屬する種々の歷史的時期の評價とを與へるつもりはない。メーリングはこれをその論文、„Der Sorgesche Briefwechsel"（„Neue Zeit", 25 Jahrg., Nr. 1 und 2）（『ゾルゲの往復書簡』（『ノイエ・ツァイト』、第二十五年、第一號および第二號）において立派に果してゐる、この論文は出版所によつてこの飜譯の附錄にされるかまたは單行ロシア版として出版されるであらう（註二六）。

我々によつて經驗されつゝある……時代におけるロシアの社會主義者にとつては、鬪爭しつゝあるプロレタリアートが殆ど三十年間に亙るマルクスおよびエンゲルスの活動（一八六七―一八九五年）の親密な方面に通ずることから引き出さなければならぬ敎訓は、特殊の興味を呈する。

だから、我國の社會民主々義文獻において、ゾルゲ宛のマルクスおよびエンゲルスの書簡を讀者に知らしめようとする最初の試みがロシア革命における社會民主々義的戰術の『鬪爭的』諸問題と關聯してなされたこと（プレハーノフの『ソヴレメンナヤ・ジーズニ』、メンシェヴィキの『アトクリーキ』）（註二七）は、不思議ではない。ロシアにおける勞働者黨の今日の任務の見地から特に重要な、こゝに印刷される往復書簡の箇所の評價に、我々は實に讀者の注意を留めたいと思ふ。

マルクスおよびエンゲルスはその手紙において、英米およびドイツの勞働者運動の當面の問題について最も多く述べてゐる。これは當然のことである、何故なら彼等は當時イギリスに住ひ、そしてそのアメリカの同志と文通したところのドイツ人であつたから。フランスの勞働者運動、そして特にパリ・コンミューンについては、マルクスはドイツの社會民主々義者クーゲルマンへ宛てゝ書いた手紙においてもつと屢ゝ且つ詳細に述べてゐる。

マルクスおよびエンゲルスが英米およびドイツの勞働者運動の問題について述べたこととの比較は、極めて敎訓的である。一方ではドイツ、他方では英米が資本主義的發展の異つた段階、これらの國々の政治生活における階級としてのブルジョアジーの支配の異つた形態を示してゐること

を考慮するならば、右の比較は特に大なる意義を帯びる。科學的見地からすれば、我々はこゝに唯物辨證法の模範を、あれやこれやの政治的および經濟的條件の具體的特殊性への適用において問題の異つた點、異つた方面を前面へ押出し且つ力說する腕前を見るのである。勞働者黨の實際的政策および戰術の見地からすれば、我々はこゝに『共產黨宣言』の著者達が戰鬪的プロレタリアートの任務を異つた國の國民的勞働者運動の異つた段階に應じて如何に規定したかの模範を見るのである。

英米の社會主義においては、マルクスおよびエンゲルスはその勞働者運動からの分離を最も銳く批判してゐる。イギリスにおける『社會民主聯盟』(Social-Democratic Federation)(註二八)やアメリカの社會主義者に關するマルクスおよびエンゲルスの多くの批評のすべてを通じて終始一貫してゐる非難は、彼等がマルクス主義をドグマに轉化したこと、『化石的(starre)正統主義』に轉化し、彼等がマルクス主義のうちに『行動への指針ではなくて、信仰箇條』(註二九)を見ること、彼等が彼等の周圍に進行しつゝある、理論的に無援な、しかし生きた、大衆的な、力强い勞働者運動を滿足させえないことにある。『もし我々が一八六四年から一八七三年に至る時代に公

然我々の綱領を採用した人々とのみ共同しようと欲したならば、――とエンゲルスは一八八七年一月二十七日附の手紙において感嘆してゐる、――我々は今日何處にゐたであらうか?』と。だがその前の手紙(一八八六年十二月二十八日附)においては、アメリカにおける勞働者階級に對するヘンリー・ジョージの思想の影響の問題に觸れて、彼はかう書いてゐる――

『眞實の(„bona fide")勞働者黨に對する明年十一月における勞働者の百萬票または二百萬票は、理論的に完全な綱領に對する十萬票よりも、現在では無限に價値あるものである』。

これは非常に興味ある箇所である。我國にはそれを『勞働者大會』またはラーリン式の『廣汎な勞働者黨』の思想を擁護するために利用しようと焦つた社會民主々義者がゐた。何故『左翼聯合』を擁護するために利用しないのか? と我々はかゝる早熟のエンゲルス『利用者』に質問しよう。引用句が取られた手紙は、アメリカにおける勞働者が選擧においてヘンリー・ジョージのために投票した時に關するものである。ウィシュネウェツカヤ女史*――アメリカ婦人で、ロシア人に嫁ぎエンゲルスの著書を飜譯した――は、エンゲルスの答によつて分るやうに、彼にヘンリー・ジョージを十分に批判してくれと請うたのである。エンゲルスはかう書いてゐる(一八八六年

十二月二十八日附)、まだその時は到達しない、何故なら寧ろ勞働者黨をして全くは純粹でない綱領の上に形成され始めさす方がいゝから。その後、勞働者自身が、何が肝腎であるかを見出し、『自分自身の失策によつて學び』、そして『いかなる綱領の上に立つてゐるにもせよ、勞働者黨の全國的結束を妨害することは、大なる誤謬であると私は考へるであらう』と。

* 『ゾルゲ宛書簡集』その他におけるローマ字綴りでは、いつもウィシュネウェツキー(Wischnewetzky)と書かれてゐる(譯者)。

だが、勿論、ヘンリー・ジョージの思想のあらゆる不合理と反動性とを、エンゲルスは社會主義的見地から立派に理解し且つ屢々指摘した。ゾルゲとの往復書簡のうちには一八八一年六月三十日附のK・マルクスの極めて興味ある手紙があり、そこでマルクスは急進的ブルジョアジーのイデオローグとしてのヘンリー・ジョージの評價を與へてゐる。『理論的にはヘンリー・ジョージは全く時代後れの人間だ』(total arrière)、とマルクスは書いた。そしてフリードリヒ・エンゲルスは、大衆がこの眞正の反動的社會主義者と一緒に選擧に赴くことを恐れなかつた、たゞ大衆に『彼等自身の誤謬の結果』を豫言しうる人々がありさへすれば(エンゲルス、一八八六年十一

月二十九日附の手紙)。

當時のアメリカ勞働者の組織『勞働騎士團』(註三〇)について、エンゲルスは同じ手紙の中にかう書いてゐる、『勞働騎士團の最も弱い(文字通りには、最も腐敗した、faulste)方面は、政治的中立であつた』……『新たに運動に入る何れの國においても、その最初の大きな歩みは、――それがたゞはつきりした勞働者黨でありさへすれば同じことだが、――勞働者を獨立的な黨として組織することである』。

社會民主々義から無黨勞働者大會等々への飛躍を擁護する何物をもこゝから引き出しえないことは、明かだ。マルクス主義を『ドグマ』、『正統主義』、『宗派主義』等々に墮落させたといふエンゲルスの非難を蒙ることを欲しないすべての人々は、こゝから急進主義的な『反動的社會主義者』との共同の選擧戰を時々許す必要を引き出さなければならぬ。

しかしもつと興味があるのは、勿論、かゝるアメリカとロシアとの相似性(我々は反對者に答へるためにそれに觸れなければならなかつたが)に立ち停まることよりも、寧ろ英米の勞働者運動の基本的特徴に立ち停まることである。これらの特徴はプロレタリアートの前に多少とも大き

な、全國民的な、民主々義的任務が缺如してゐること、ブルジョア政治へのプロレタリアートの完全な從屬、一塊、一握の社會主義者のプロレタリアートからの宗派主義的分離、社會主義者が選擧において勞働者大衆の前に些かの成功をも收めてゐないこと等々である。これらの基本的條件を忘れて、『アメリカとロシアとの相似性』から廣汎な結論をしようとするものは、極度の皮相さを暴露するものである。

エンゲルスがこの種の條件の下にある勞働者の經濟的組織をかくも强調してゐるのは、プロレタリアートの前に純社會主義的任務を提出するところの最もよく確立された民主々義的秩序が問題になつてゐるからである。

エンゲルスが、惡い綱領を持つてゐようとも、獨立的勞働者黨が重要なことを强調してゐるのは、今日まで勞働者の政治的獨立の片鱗もなく、勞働者が政治上最も多くブルジョアジーに追隨したしまた追隨してゐる國が問題になつてゐるからである。

かゝる考察から取られた結論をば、プロレタリアートが自由主義ブルジョアジーよりも早く自己の黨を設立したところの、プロレタリアートがブルジョア政治家に投票する傳統の片影さへ持

つてゐないところの、社會主義的任務ではなくて、ブルジョア民主々義的任務が直接當面の問題となづてゐるところの、國または歴史的契機にまで擴張しようとすることは、マルクスの歴史的方法を愚弄することを意味する。

我々が英米の運動に關するエンゲルスの批評とドイツの運動に關する批評とを對照するならば、我々の思想は讀者に更に一層明瞭になるであらう。

かゝる批評はこゝに印刷される往復書簡の中にもまた非常に多いし且つ極めて興味あるものである。そしてすべてこれらの批評を通じて終始一貫するものは全く他の何物でもない、即ち勞働者黨の『右翼』に對する警告、社會民主黨内の日和見主義との無慈悲な（往々――一八七七―一八七九年のマルクスにおけるが如く――猛烈な）鬪爭である。

先づ書簡からの引用によつてこれを確認し、次にこの現象の評價に立ち停まらう。

何より先づこゝではヘヒベルグ一派に關するカール・マルクスの批評を指摘しなければならぬ。フランツ・メーリングはその論文 „Der Sorgesche Briefwechsel“ においてマルクスの攻撃、並びに日和見主義者に對するエンゲルスの後の攻撃を緩和しようと努力してゐる、――我々

の意見によれば、若干過度に努力してゐる。特に、ヘヒベルグ一派については、メーリングは、マルクスのラッサールおよびラッサール派の評價は誤つてゐる、といふその意見を固執してゐる。然しこゝで我々に興味があるのは、繰返していふが、特に某々社會主義者に對するマルクスの攻撃の妥當また誇張の歷史的評價ではなくて、社會主義一般の一定の流派に對するマルクスの原則的評價である。

ドイツ社會民主黨のラッサール派およびデューリングとの妥協を遺憾とすると同時に(一八七七年十月十九日附の手紙)、マルクスは、社會主義に『ヨリ高尙な觀念論的』傾向を與へること、即ち社會主義の唯物論的基礎(もし人がそれを基礎にして活動しようと欲するならば、眞面目な客觀的研究を要するところの)に代へるに正義、自由、平等および fraternité(友愛)のそのすべての女神を伴ふ新しい神話を以てすることをその任務とするところの、『一團の半熟の學生および賢すぎるドクトル達』(ドイツ語のドクトルは、我國の『候補者』または『最高級の大學卒業者』に相當する學位)との妥協を非難してゐる。この傾向の代表者の一人は、黨へ『金を拂つて加入した』ところの、"Zukunft"(『未來』)(註三二)の發行者、ドクトル・ヘヒビルグである

――私は『最も高尙な』意圖を以てだと想定するが、『意圖』などは問題にしない。〝Zukunft〟の彼のプログラムのやうな見すぼらしいものが、これ以上に『謙虚な自負』を以て日の光を見たことは稀れにしかないことだ（書簡第七十號）（邦譯、全集、第二十四卷、一四八頁）。

それから殆ど二年後に書かれた他の手紙（一八七九年九月十九日附）において、マルクスは、彼がエンゲルスと共にヨハン・モストを後援してゐるといふ風說を反駁しつゝ、ドイツ社會民主黨內における日和見主義者に對する自己の態度についてゾルゲに詳しく物語つてゐる。雜誌〝Zukunft〟はヘヒベルグ、シュラムおよびベルンシュタインが指導してゐた。マルクスおよびエンゲルスはかゝる出版物に參加することを拒絕してゐたが、同じヘヒベルグの參加の下に且つ彼の金錢的援助の下に新しい黨の機關紙を創刊することが問題となつた時には、マルクスおよびエンゲルスはこの『ドクトルと學生と講壇社會主義者との混合物』に對する統制のために先づ彼等によつて指命された責任編輯者ヒルシュを採用することを要求し、次いでベーベル、リープクネヒトその他の社會民主黨の指導者に向つて率直な回章を送つて、もしヘヒベルグ、シュラム、ベルンシュタインの傾向が變更されないならば、『理論および黨のかゝる俗惡化』（Verluderung――

ドイツ語ではもつと強い言葉だ）に對して公然鬪爭するであらう、と豫告した。

これは、ドイツ社會民主黨において、それについてメーリングがその『歴史』に『動亂の一年』（„Ein Jahr der Verwirrung"）と書いた時代であつた。『社會主義鎭壓法』以後黨は、最初はモストの無政府主義とヘヒベルグ一派の日和見主義との打擊を受けて、直ぐには正しい道を見出すことができなかつた。『理論的にはゼロで、實踐的には何の役にも立たないこれらの連中は、――とマルクスは後者について書いてゐる、――社會主義（それを彼等は大學の處方箋によつて調整した）および特に社會民主黨を骨拔きにし、勞働者を啓蒙し、または彼等のいふやうに、彼等の混亂せる半可通によつて「敎養の要素」を勞働者に注入し、そして就中黨を小ブルジョアの眼に尊敬されうるものにしようと欲してゐる。哀れな反革命的な饒舌家だ』。

マルクスの『猛烈な』攻擊は、日和見主義者を退却させ……且つ消え失せさせるに至つた。一八七九年十一月十九日附の手紙においてマルクスは、ヘヒベルグを編輯委員會から遠ざけたこと、そして黨のすべての有力な指導者ベーベル、リープクネヒト、ブラッケ等々は彼の思想から離脱したことを報告してゐる。社會民主黨機關紙『ゾチアール・デモクラット』（註三二）は、當時

は黨の革命派であつたフォルマールの編輯の下に發行され始めた。更に一年を經て（一八八〇年十一月五日附）マルクスは、彼がエンゲルスと共にこの『ゾチアール・デモクラット』の『みすぼらしい』（miserabel）指導に對して絶えず闘爭し、そして屢〻激烈に（wobei's oft scharf herging）に闘爭したことを物語つてゐる。リープクネヒトは一八八〇年マルクスを訪問し、そしてすべての點において『改善』に着手することを約束した。

平和は恢復され、そして戰爭は表面には現はれなかつた。ヘヒベルグは去り、そしてベルンシュタインは革命的な社會民主々義者となつた……少くとも一八九五年エンゲルスが死ぬまでは。

一八八二年六月二十日エンゲルスはゾルゲに宛てゝ書いて、この闘爭のことをすでに過去のことゝして物語つてゐる、『ドイツにおいては事態は大體において旨く行つてゐる。實際、黨の文筆家連中は一つの反動的な轉向を實行しようと試みたが、それは美事に挫折せしめられた。社會民主々義者の勞働者がいたるところで曝されてゐる恥辱は、彼等をいたるところで三年前におけるよりも遙かに革命的ならしめた。……これらの人々（黨の文筆家）は如何なる代價を拂つても社會主義鎭壓法の撤廢を溫和と溫順、卑屈と從順とによつて懇願したいのである、何故ならこの

法律は彼等の文筆稼業を簡單に片附けるからである。この法律が撤廢されるや否や、……恐らく分裂が現はれ、そしてフィーレック、ヘヒベルグ一派は別個の右翼を形成するであらう。そしてその場合には、人々は、彼等が遂に決定的に沒落するまで、時々彼等と交捗することができよう。我々はすでにこのことを、社會主義鎭壓法發布の直後、ヘヒベルグとシュラムとが「年報」(註三三)において從來の黨の活動について當時の事情の下においては全く恥知らずの判斷を發表し、そして黨がヨリ多く敎養ある、上品な、社交的な態度を取ることを要求した時に、宣言したのである』(,, jebildetes "(『敎養ある』)――gebildetes の代りにエンゲルスはドイツの文筆家のベルリン・アクセントを暗示的に用ひてゐる)。

一八八二年になされたベルンシュタイン主義の豫言は、一八九八年およびそれ以後において立派に確證された。

この時以來、特にマルクスの死後、エンゲルスは、――と誇張なしにいふことができる――ドイツの日和見主義者によつて曲げられた『棒を曲げ直すのである』――倦まず撓まずに。

一八八四年末。汽船會社補助案(,, Dampfersubvention "――メーリングの『歴史』參照)に贊

成投票したドイツ社會民主黨の國會代議士の『小ブルジョア的偏見』が非難されてゐる(註三四)。エンゲルスはゾルゲに宛てゝ、この問題については多くの文通をしなければならぬ、と書き送つてゐる(一八八四年十二月三十一日附の手紙)。

一八八五年。„Dampfersubvention“ の全經過を評價しつゝ、エンゲルスは書いてゐる(六月三日附)、『殆ど分裂しさうになつた』。社會民主黨の代議士の『小ブルジョア根性』は『莫大な』ものであつた。『小ブルジョア的＝社會主義的分派はドイツの如き國においては不可避的である』――とエンゲルスは述べてゐる。

一八八七年。黨はフィーレック(ヘヒベルグ型の社會民主々義者)の如き人物を代議士に選出することによつて自らを汚辱してゐる、と書き送つたゾルゲにエンゲルスは答へてゐる。どうも仕方がない、――とエンゲルスは辯解してゐる、――勞働者黨は何處からも善い代議士を得ることができないのだ。『右翼の諸君は、これらの代議士がたゞ社會主義鎭壓法の結果として我慢されてゐるにすぎないこと、黨が再び運動の自由を得た曉には、忽ち黨から放り出されることを知つてゐる』。そしてまた一般に、『黨がその議會の英雄達よりも良いならば、その反對の場合よりも』

好ましい、と（一八八七年三月三日附）。リープクネヒトは妥協家だ、とエンゲルスは嘆いてゐる、――彼はすべて言辭を以て意見の相違を隱蔽してゐる。しかし事態が分裂まで到達する時には、――決定的な瞬間には、彼は我々と共に立つであらう、と。

一八八九年。パリにおける二つの國際社會民主黨大會。日和見主義者は（フランスのポシビリスト（註三五）を先頭とする）革命的社會民主々者と分裂した。エンゲルス（彼は當時六十八歳であつた）は青年の如くに戰鬪に飛び込んだ。多くの手紙（一八八九年一月十二日から七月二十日に至る）が日和見主義者との鬪爭に獻げられてゐる。日和見主義者のみならず、ドイツ人、リープクネヒト、ベーベルその他も、彼等の妥協主義の故に非難されてゐる。

ポシビリストは政府へ自らを賣つた、――とエンゲルスは一八八九年一月十二日附で書いてゐる。そして彼はイギリスの社會民主聯盟（S. D. F.）の會員のポシビリストとの同盟の罪を實證してゐる。『この呪はれた大會のための文通と奔走とは、私に他事を顧みる時間を與へない』（一八八九年五月十一日附）。ポシビリストは狂奔してゐるのに、我々の仲間は眠つてゐる、――とエンゲルスは立腹してゐる。今やアウエルおよびシッペルさへもが、我々がポシビリストの大會

へ出席すべきことを要求してゐる。しかしこれは『遂に』リープクネヒトの眼を開いた。エンゲルスはベルンシュタインと共に日和見主義者に反對するパンフレットを書いてゐる（ベルンシュタインによつて署名されたもの、――エンゲルスはそれを『我々のパンフレット』と呼んでゐる）。『ポシビリストは、社會民主聯盟以外には、全ヨーロッパにおいて一つの社會主義的組織をも持つてゐない（一八八九年六月八日附）。そこで彼等は非社會主義的トレード・ユニオンへ復歸する以外に行くところがない』（廣汎な勞働者黨、勞働者大會等々の我が崇拜者の御參考までに！）『アメリカからは彼等は勞働騎士團の一人を獲得してゐる』。敵はバクーニン主義者との鬪爭におけると同一人だ。『異るところは、たゞ無政府主義者の旗がポシビリストの旗にすりかへられてゐるだけだ、即ち小賣利權や、特に指導者に對する暖い椅子（市會議員、職業紹介所等々）に代へてブルジョアジーに主義を賣ることとである』。ブルース（ポシビリストの指導者）とハインドマン（ポシビリストと結合した社會民主聯盟の指導者）とは『强權的なマルクス主義』を攻擊し、そして『新しいインターナショナルの核心』を構成しようと欲してゐる。

『ドイツ人の無邪氣さについては君は想像もつくまい。何が本當に問題になつてゐるかを、ベ

ーベルに說きつけるのにさへ、僕は限りなき努力を要した』（一八八九年六月八日附）。そして二つの大會が成立し、革命的社會民主々義者が數においてポシビリスト（トレード・ユニオニスト、社會民主聯盟、オーストリー人の一部等々と結合された）に優越した時、エンゲルスは歡喜してゐる（一八八九年七月十七日附）。リープクネヒトその他の妥協案および提議が成功しなかつたことが、彼を喜ばしたのである（一八八九年七月二十日附）。『我々のセンチメンタルな妥協派連があらゆる友誼的な宣誓に對する報ゐとして尻を蹴飛ばされたのは、彼等には當然のことである』。『これは恐らく暫くの間彼等を癒やすだらう』。

……メーリングが（„Der Sorgesche Briefwechsel"）、マルクスおよびエンゲルスは『上品で』、物事にあつさりしてゐた、『彼等は打擊を加へるに際して長く考慮することなく、また彼等が受けた各〻の打擊について、泣面をするといふこともなかつた』、といつたのは正しい。『もし諸君が――と嘗てエンゲルスは書いた、――諸君の留針の刺傷が僕の古い、よく鞣された厚い皮膚を突き通しうると考へるならば、諸君は間違つてゐる』と。そしてメーリングはマルクスおよびエンゲルスについてから書いてゐる、彼等は彼等によつて獲得されたこの無感覺性をまた他人

にも豫期してゐた、と。

一八九三年。『フェビアン』(註三六)の審判、そしてこの審判はそれ自體自らベルンシュタイン主義者の批判でもある(ベルンシュタインが彼の日和見主義をイギリスにおいて『フェビアン』によつて『養育した』のは實に故なきことではない)。『フェビアンはこのロンドンで、社會的變革の不可避性を洞察するだけの理解を持つてゐるが、粗野なプロレタリアートのみにこの大事業を委すことができず、從つて自ら先頭に立たうとする親切を持つてゐるところの、野心家の一團である。……に對する恐怖が彼等の根本原則である。彼等は優れて「敎養ある人々」である。彼等の社會主義は自治體社會主義である。國民ではなくて、自治體が、少くとも當分の間生産手段の所有者でなければならぬ。彼等のかゝる社會主義はブルジョア自由主義の窮極の、だが不可避的な歸結だと考へられてゐる。こゝから彼等の戰術が生れる、卽ち自由主義者を敵として決定的に征服しないで、彼等を社會主義的歸結に追ひこんで行く、卽ち彼等を欺瞞し、「自由主義を社會主義で浸し」、社會主義の候補者を自由主義に對立させないで、彼等にぶらさがり、押しかゝり、或ひはたぶらかさうといふのである。……この際彼等が自分自身を欺いてゐるのか、欺かれてゐる

のか、または社會主義を欺いてゐるのかは、勿論彼等にはわからないのである。

『彼等は非常に努力してあらゆるいかさま物と共に多くの立派な宣傳本を、而もイギリス人がこの點においてなし遂げたものゝうちの最上のものを提供した。しかし彼等は、階級鬪爭を隱蔽しようとするその特殊な戰術に來るや否や、全く腐敗して了ふ。だからまた、マルクスおよび我我すべてに對する彼等の氣狂ひじみた憎惡――階級鬪爭の故に――が生ずるのである。

『この人々は多くのブルジョア的支持者を、從つて「金」を持つてゐる』……

社會民主黨内におけるインテリゲンチヤ的日和見主義の古典的評價

一八九四年。農民問題。『大陸では、――とエンゲルスは一八九四年十一月十日附で書いてゐる、――運動の成功と共に、益々大きな成功を得ようとする氣分が高まつてゐるし、農民の獲得は文字通りの意味で流行である。先づフランス人はナントにおいてラファルグを通じて、小農の

破滅――それは資本主義が我々のためにやつてくれてゐる――を直接の干渉によつて我々の側から促進することは我々の仕事ではないことを宣言したのみならず、小農を國庫と高利貸付と大地主とに對して直接に保護しなければならない、と宣言した。しかし我々はそれに同意することができない、何故ならそれは第一に馬鹿げてをり、第二に不可能であるからだ。しかし今度はフォルマールがフランクフルトへやつて來て、農民一般に諛はうとしてゐる。そして彼が上バウエルンで關係を持たうとする農民は、借金を背負つたライン地方の小農ではなくて、下僕や下婢を搾取し、家畜や穀物を賣る中農や獨立の大農なのである。そしてこれは一切の原則を放棄することなくしては行はれないことである』(註三七)。

一八九四年十二月四日。……『非常に、非常に日和見主義になつてしまつて、殆どすでに普通の人民黨である(大抵の指導者と多くの新黨員のことだが)バーヴァリア人は、バーヴァリア議會における總豫算に贊成投票した。そして特にフォルマールは上バーヴァリアの大農――二五乃至八〇エーカーの土地(一〇乃至一三ヘクタール)を有し、從つて賃銀勞働者なしにはやつて行けない人々――を掴むために、そして彼等の農僕を掴むためではなく、農民の間に煽動を行つた』…

これによつて我々は、マルクスおよびエンゲルスが十年間以上組織的に、撓まずにドイツ社會民主黨の日和見主義と鬪爭し、そして社會主義におけるインテリゲンチャ的俗物主義および小ブルジョア主義を追求したことを見るのである。これは極めて重要な事實である。一般の公衆は、ドイツ社會民主黨がプロレタリアートのマルクス主義的政策および戰術の模範と考へられてゐることを知つてゐるが、マルクス主義者の創始者達が如何に不斷の戰ひをこの黨の『右翼』（エンゲルスの表現）に對して行はねばならなかつたかを知らない。エンゲルスの死後間もなくこの戰ひが秘密的なものから公然のものになつたことは、偶然ではない。これはドイツ社會民主黨の十年間の史的發展の不可避的結果である。

そして今や我々の前には、エンゲルス式（およびマルクス式）の助言、指示、矯正、威嚇および教化の二つの方向が、特にはつきりと浮び上る。彼等は最も執拗に英米の社會主義者に勞働者運動と融合し、彼等の組織から狹隘にして凝り固まつたセクト的精神を除くやうにと呼びかけた。ドイツ社會民主黨に對しては彼等は最も執拗に、俗物主義、『議會的白痴』（一八七九年九月

十九日附の手紙におけるマルクスの表現)、小ブルジョア的＝インテリゲンチャ的日和見主義に陥る勿れ、と敎へたのである。

我國の社會民主黨の喋り女達が第一種の助言についてはベチャクチャ喋り、そして第二種の助言についてはロをつぼめてこれを默殺してゐるのは特徴的ではないか？ マルクスおよびエンゲルスの手紙の評價におけるかゝる一面性は、我がロシアの社會民主主義者の……『一面性』の立派な指標ではないか？

今日、國際勞働者運動が深刻な不安と動搖との徴候を表してゐる時、日和見主義、『議會的白痴』および俗物的改良主義の極端が革命的サンヂカリズムの反對の極端を喚び起してゐる時——今日英米およびドイツの社會主義に對するマルクスおよびエンゲルスの『矯正』の一般的方針は排他的な重要性を持つてゐるのである。

社會民主勞働者黨の存在しない、議會に社會民主々義的代議士が存在しない、選擧においても新聞においても何等の組織的な、自制力ある社會民主々義的政策の存在しない等々の如き國々——かゝる國々においては、マルクスおよびエンゲルスはどんなになつても社會主義者に狹隘な宗

派主義を脱却して、プロレタリアートを政治的に奮ひ起たせるために、勞働者運動に結びつくべきことを教へた。何故ならイギリスにおいてもアメリカにおいても、プロレタリアートは十九世紀の最後の三十年間殆ど何等の政治的獨立性を表はさなかつたからである。これらの國における政治的舞臺は――ブルジョア民主々義的な歴史的任務の殆ど絶對的缺如の下に――勞働者を欺瞞し、頽廢させ且つ買收する技術において世界に類を見ない凱歌を上げる、自己滿足的なブルジョアジーによつて完全に充たされてゐた。

英米の勞働者運動に對するマルクスおよびエンゲルスのこれらの助言がそのまゝ直接にロシアの條件に適用されうると考へることは、マルクス主義をその方法の解明のためや、一定の國々における勞働者運動の具體的歴史的特殊性の研究のために利用するのではなくて、小さな分派的、インテリゲンチヤ的打算のために利用することを意味する。

反對に、ブルジョア民主々義……が完了されてゐない國、『議會的形式を以て緣取られた軍事的專制政治』(『ゴータ綱領批判』におけるマルクスの表現)が支配したし且つ支配してゐる國、プロレタリアートがずつと以前からすでに政治に引き入れられて社會民主々義的政策を取つてゐる

國――かゝる國においては、マルクスおよびエンゲルスは勞働者運動の任務と展開との議會的俗化、俗物的妥協を何よりも恐れたのである。

我國において廣い、『立派な』、富める自由主義的ブルジョア的新聞が聲を揃へてプロレタリアートに隣國ドイツの勞働者運動の『模範的な』忠誠、議會的合法性、質朴さおよび穩健さについて言觸らしてゐるだけに、それだけ一層我々は、ロシアにおけるブルジア民主々義……の時代においてマルクス主義のこの方面を强調し且つ前面に押し出すべく義務づけられてゐる。

ロシア革命のブルジョア的裏切者のこの貪慾な虛言は、偶然によつて喚び起されたのでもなく、誰かカデット陣營の過去又は未來の大臣の個人的腐敗によつて喚び起されたのでもない。それはロシアの自由主義的地主と自由主義的ブルジョアとの深刻な、經濟的利益によつて喚び起されたのである。そしてこの虛言、この『大衆の愚鈍化』(„Massenverdummung“――一八八六年十一月二十九日の手紙におけるエンゲルスの表現)においても、マルクスおよびエンゲルスの手紙はすべてのロシアの社會主義者にとつて代へ難い武器として役立たなければならぬ。

自由主義的ブルジョアの貪慾な虛言はドイツ社會民主黨の模範的な『素朴さ』を民衆に示して

ゐる。この社會民主黨の首領、マルクス主義理論の創始者は、我々にかういつてゐる――

『フランス人の革命的な言葉と行動とはフィーレック一派（ドイツ社會民主黨議會フラクションにおける日和見主義者達）の僞善を初めてひどく無氣力なものに見せしめた』（フランス議會における勞働者黨の組織とフランスの急進主義者をフランスのプロレタリアートから引き離したドカゼヴィーユのストライキとが問題になつてゐる）（註三八）。『最近の社會主義鎭壓法の討論においてはベーベルとリープクネヒトだけが登壇し、そして二人とも非常に上出來であつた。この討論によつて我々は再び上流社會に顔を出すことができるだらう、これは以前には決してなかつたことだ。ドイツ人が、特にかくも多くの俗物を選出（これは勿論不可避的であつたが）して以來、指導のことが若干問題となるのは、一般によいことだ。ドイツでは平穩な時代には萬事が俗物的になる。だからフランスの競爭の刺戟が絶對に必要である……』（一八八八年四月二十九日附の手紙）。

ドイツ社會民主黨の支配的思想の影響下にあるロシア社會民主勞働者黨が最も堅固に我がものにしなければならぬ敎訓はこれである。

これらの教訓を我々に與へるものは、十九世紀の二人の最大偉人の往復書簡のあれやこれやの個々の箇所ではなくて、プロレタリアートの國際的經驗に對する彼等の同志的な、率直な、非外交的な、細かい考慮、批判の全精神と全内容とである。

マルクスおよびエンゲルスの全書簡が、實際、どの程度までこの精神によつて貫かれてゐるかは、更に次の、比較的私的ではあるが、その代りに極めて特徴的な箇所が示してゐる。

一八八九年にイギリスでは、未訓練の、不熟練の、純朴な勞働者（瓦斯工、波止場人足等々）の若い、清新な、新しい革命的精神に充たされた運動が始まつた。エンゲルスはそれに狂喜してゐる。これらの勞働者の間で煽動したマルクスの娘『タッシー』（Tussy）の役割を彼は凱歌を上げて强調してゐる。『こゝで最も不快なことは、――と彼は一八八九年十二月七日附ロンドンから書き送つてゐる、――勞働者の骨肉まで泌みこんでゐるブルジョア的「體面」である。それについて各々が彼等自身の誇りを持ち、而もまた彼等の「眼上の人」および「えらい人」に對して彼等の生れながらの尊敬を持つてゐるところの、無數の、異議なく承認された階段に分れてゐる社會編成は、社會的には極めて古く且つ基礎が堅固であつて、ブルジョアは未だに絶えずかなり

容易に好餌を以て誘惑することができる。例へば、私は、ジョン・バーンズが（Burns）がマンニング大僧正や、ロンドン市長や、ブルジョア一般の間における彼の人望を彼自身の階級における人望よりも心秘かに誇つてゐない、とは決して保證することができない。そしてチャンピオン（Champion）――前大尉――は數年前ブルジョア分子、特に保守的な分子を瞞して、僧侶の敎會大會で社會主義を說敎したりなどした。我が最も頼もしい男と思つてゐたトム・マン（Mann）でさへ、彼がロンドン市長と晩餐を共にすることを喜んで語つてゐる。もしこれをフランス人と比べるならば、革命が何の藥になつてゐるかゞ分るであらう』。

註釋は蛇足である。

更に一例をあげよう。一八九一年にはヨーロッパ戰爭の危險があつた（註三九）。エンゲルスはこれについてベーベルと文通し、そして彼等は、ロシアがドイツを攻擊した場合にはドイツの社會主義者はロシア人に對してもロシアの如何なる同盟者に對しても死物狂ひに戰ふべきであらう、といふことに一致した。『もしドイツが壓殺されるならば、その時には我々もまた壓殺されるだらう。しかし一方鬪爭は、最も好都合な場合には、ドイツがたゞ……手段によつてのみ自分を維

持することができ、従つて恐らく我々が權力を握つて、一七九三年を演ずることを餘議なくされるほど激烈なものになるであらう』（一八九一年十月二十四日附の手紙）。

一九〇五年におけるロシア勞働者黨にとつての『ジャコビン的』展望は非社會民主々義的であることを全世界に向つて叫んだ日和見主義者の御參考までに！　エンゲルスは社會民主々義者が臨時政府に參加しなければならぬ可能性をベーベルに率直に指摘したのである。

社會民主勞働者黨の任務に對してかゝる見解を持つてゐたマルクスおよびエンゲルスが、ロシア革命とその强力な世界史的意義に對する最も輝かしい信賴に充たされてゐたことは、全く自然である。殆ど二十年間我々はこの往復書簡において、ロシアにおける革命のこの熱烈な期待を見るのである。

こゝに一八七七年九月二十七日附のマルクスの手紙がある。東方における危機（註四〇）はマルクスを歡喜させてゐる。『ロシアは……すでに久しい間變革の閾の上に立つてゐる。そのためのすべての要素は成熟してゐる。勇敢なトルコ人はその打擊によつて爆發を數年間早めた……變革は secundum artem（「人工的に」）憲法ごつこを以て始まるであらう、そして大變な騷ぎが起るだ

らう (il y aura un beau tapage)。もし母なる自然が我々に特に無慈悲でないならば、我々はなほ生きてこの祝典を見るであらう』(マルクスは當時六十一歳であつた)。

『この祝典』まで母なる自然はマルクスに壽命を與へなかつた——そして或ひは與へえなかつたのであらう。しかし彼は『憲法ごつこ』を豫言した、そして彼の言葉は、第一および第二國會について昨日書かれたもののやうに見える。そして『憲法ごつこ』に對する國民の警戒は、實に、自由主義者や日和見主義者によつてかくも憎惡されるボイコット戰術の『潑剌たる精神』を成したではないか……

こゝには一八八〇年十一月五日附のマルクスの手紙がある。彼はロシアにおける『資本論』の成功について狂喜し、當時發生したばかりの土地改革派に對する人民の意思派の味方になつてゐる。彼等の見解における無政府主義的要素はマルクスによつて正しく把握されてゐる、そして——土地改革派＝ナロードニキの社會民主々義者への未來の進化については、當時知らずまた知る可能性もなくて——マルクスはその針の如き皮肉の全力を擧げて土地改革派を攻擊してゐる——

『これらの諸君はすべての政治的＝……行動に反對である。ロシアは命がけの飛躍によつて、無政府主義的＝共産主義的＝無神論的一千年王國に飛びこむべきである！といふ。その間彼等は退屈な空論によつてこの飛躍を準備する、そしてこの空論のいはゆる原理は故バクーニン以來ありふれたものである』。

一九〇五年およびそれ以後のロシアにとつての社會民主々義者の『政治的＝……行動』の重要性をマルクスが如何に評價したであらうかといふことは、このことから見ることができる。*

* 序でながら、私の記憶に間違ひがなければ、プレハーノフまたはW・I・ザスリッチが私に一九〇〇—一九〇三年頃、『我々の意見の相違』およびロシアにおける來るべき革命の性質に關するプレハーノフ宛のエンゲルスの手紙があることを話したことがある。こんな手紙であるかどうか、それは無視であるかどうか、それを發表すべき時機ではないかどうかを正確に知ることは、興味があることであらう（註四一）。

こゝに一八八七年四月六日附のエンゲルスの手紙がある。『これに反して、ロシアにおける危機は眼前に迫つてゐるやうに見える。最近の暗殺事件は大混亂を喚び起した……』。一八八七年四月九日附の手紙——また同様である……『軍隊は不滿を抱き陰謀をめぐらす將校に充たされて

ゐる』（エンゲルスは當時人民の意思派の革命的鬪爭の印象下にあつて、將校に期待をかけ、それから十八年の後にかくも輝かしく現はれたロシアの兵卒と水兵との……をまだ見なかつた……）。『……私はまだ今年も持ちこたへるとは信じない。先づロシアで勃發すれば（„losgeht“）、萬歳だ！』

一八八七年四月二十三日附の手紙、『ドイツでは迫害に迫害が重ねられてゐる。ビスマルクは、今や恐らくたゞ數ケ月の問題にすぎないところの、ロシアにおける革命の勃發の際には、ドイツでもまた直ちに起りうるやうに（„losgeschlagen werden“）、萬事を準備しようと欲してゐるかのやうだ』。

年月は非常に長かつた。額を顰め、顏を顰めて、エンゲルスの『革命主義』を嚴しく非難しまたは年老いた亡命革命家の舊式な空想を嘲笑する俗物が存在することは、疑ひない。

然り、マルクスおよびエンゲルスは、革命が近づいたといふ算定において、革命の勝利（例へば、一八四八年ドイツにおける）に對する期待において、ドイツ共和國が近づいたといふ信念において（エンゲルスはこの時代について、一八四八―一八四九年の帝國憲法獲得の軍事的カンパ

ニヤの參加者としての自己の氣分を回想しつゝ、『共和國のために死ぬこと』と書いてゐる)、多くの誤謬を犯し且つ屢〻誤謬を犯した。彼等は一八七一年に、『南フランスを蹶起させる』ことに忙しく『そのために彼等(べッカーは彼自身と親友達のことを「我々」と書いてゐる、書簡第十四號、一八七一年七月二十一日附)は人間として可能な一切を爲し、犧牲にし、敢行した……』時に、誤謬を犯した。同じ手紙にいふ、『もし我々が三月および四月にヨリ多くの資金を持つてゐたならば、我々は南フランス全體を蹶起せしめ、パリにおけるコンミューンを救つてゐたであらう』(二九頁)(ゾルゲ宛のべッカーの手紙、ドイツ版二五頁)。しかし全世界のプロレタリアートを小さな、日常の、賃銀引上げ的任務の水準以上に引き上げ且つ高めたところの……思想の巨人のかゝる誤謬は、……虛榮の無價値や、……鬪爭の徒勞や、反革命的『立憲的』……の絕美を謳ひ、叫び、呼ばはり且つ語る官製自由主義の俗惡な聰明よりも、千倍も高貴であり、偉大であり、歷史的に貴重であり、公正である……

ロシアの勞働者階級は自由を戰ひ取り、そして誤謬に充たされた自己の……行動によつてヨーロッパに對して衝擊を與へるであらう、――俗惡者どもはその……無行動の無誤謬を勝手に自慢

するがいゝ。

一九〇七年四月十九（六）日。

（全集、第三版、第十一卷、一六一―一七九頁）。

國際自由主義によるマルクスの評價

一九〇八年三月二十五（十二）日、『プロレタリー』第二十五號所載。

ツルゲーネフの或る主人公は次の如くドイツの大詩人の詩を傳へてゐる――

Wer den Feind will versteh'n
Muss im Feindes' Lande geh'n.

即ち『敵を知らんと欲する者は、敵の國に行かねばならぬ』、敵の習慣や、風習や、推理および行動の方法を知らねばならぬ、と。

マルクス主義者にとつてもまた、マルクス二十五年忌記念に對して種々の國の有力な政治的機關紙が、特に讀者大衆に對して影響を及ぼす可能性と、公的の、政府の、肩書付の、教授的な科學の名によつて語る權利とを結合してゐるところの、自由主義的および『民主々義的な』ブルジ

ヨア新聞が、如何に批評したか、といふことに一瞥を投ずることは、何等妨げないのである。

我々の瞥見を『ルッスキエ・ヴェードモスチ』から始めよう。これは、最も穏かな（そして最も退屈な）、最も科學的な（そして生きた生活から最も縁遠い）教授的新聞である。カール・マルクスの二十五年忌に關するこの新聞の小論文においては（三月一日第五十一號）、無味乾燥の、無表情な調子――『正教授』および『助教授』の言語でいふところの『客觀性』が支配してゐる（註四二）……事實と小事實――これだけに止めようと論文の筆者は努力してゐる。そして彼は、公平な歴史家として、マルクスに相當なものを與へるだけの準備がある――少くとも、すでに死んでゐる過去、死せるものとして述べることができる過去については。『ルッスキエ・ヴェードモスチ』はマルクスにおいて『拔群の肖像』をも、『科學における偉大な』人間をも、『プロレタリアートの卓越せる指導者』、大衆の組織者をも認めてゐる。しかしこの承認は過去に歸せられる。今日では、――と新聞はいふ――『新しい道が實際に必要である』、即ち、『古いマルクス主義』とは別の、勞働者運動および社會主義の新しい道が必要である、と。この新しい道はまさに如何なるものであるか、これについては新聞は直接に語つてゐない――これは教授にとつては餘りに

生きたテーマであり、『機轉を利かして沈默する』技能の名人にとつては餘りに『輕卒な』主題である。しかし暗示は明かになされてゐる、『彼の（マルクスの）構成の多くのものは諸事件の科學的分析と容赦なき批判とによつて打破されてゐる。學者の間には、彼の全體系に忠實な追隨者は殆ど存在しない。マルクスの精神的な子供——ドイツ社會民主黨——は、ドイツ社會主義の創始者によつて意圖された革命的な道からかなり烈しく逸脫した』。諸君の見らるゝ如く、筆者はマルクスを修正主義者風に修正しようとする極めて僅かな自己の願望に言及してゐない。

もう一つの新聞、『レーチ』、ロシア自由主義の演奏において第一ヴァイオリンを彈いてゐる政黨の機關紙は、遙かに活潑なマルクスの評價を以て現はれてゐる。傾向は、勿論、『ルッスキエ・ヴェードモスチ』と同じであるが、あそこでは我々は部厚な書物への序文を見、こゝでは、今日のすべての事件、現代のすべての問題の評價に際して、直接に議會の演壇から一聯の進出を指揮するところの政治的スローガンを見た。論文『カール・マルクスとロシア』（三月二日第五十三號）を書いてゐるのは有名な脫走者イズゴエフ氏——二十五—三十歳頃は『マルクス主義者』、三十五—四十歳頃は自由主義者となり、その後は黑百人組となるロシアのインテリゲンチヤの見

本――である。

イズゴエフ氏は、恰も革命の最初の驚くべき成功の後强化する反革命との長い且つ頑强な闘爭の困難な時代が始まつた時に、社會民主々義者から自由主義者に移つたのである（これは彼自身が聲明したところであり、また彼について背敎の巨匠スツルーヴェ氏が聲明したところである）。そしてイズゴエフ氏はこの點において高度に典型的である。彼は、マルクスの評價に際しての敎授的な勿體ぶりが誰の利益になるか、この肩書付の『科學』が誰の仕事をしてゐるかを美事に說明し且つ指示してゐる。『この政治家的戰術家は、――イズゴエフはマルクスについて怒鳴つてゐる、――偉大な學者をひどく妨害し、彼をして少からぬ誤謬をなさしめた』と。根本的誤謬は、勿論、正しい、理性的な、『多數者』（俗物の多數者？）によつて分有される『進化的マルクス主義』の外に、有害な、非科學的な、空想的な、そして『ナロードニキの田舍ビールによつて僞造された』革命的マルクス主義がこの世に現はれたことにある。ロシア革命におけるこのマルクス主義の役割は我が自由主義者を特に怒らせる。次のことだけでも考へて見よ、即ちこの『ブルジョア革命』自體の生産のためにプロレタリアートの××にまでも、『マルクス主義者が全く

空想的に語られてゐるプロレタリアートと農民の××』にまでも言及されてゐるのである。『ロシアにおいて種々の毛色のボリシェヴィキによつて我がものにされたやうな形態における革命的マルクス主義が倒壊の憂目を見たといふことは、當然のことである』……『普通の「ブルジョア的」（イズゴエフ氏の皮肉な括弧）憲法の制定について考へなければならぬ』。

こゝに諸君の前には、倒壊の憂目を見たのはマルクス主義と革命的戰術であつて、妥協、裏切および內通のカデット的政策ではなかつたと全く確信してゐるところの、觀念的に全く完成され政治的に成熟した十月黨員がゐるのだ！

更に進まう。ロシアの新聞からドイツの新聞へ移らう。後者は、數十の日刊機關紙において自己の見解を表はしてゐる公然の社會黨と面を接して、自由な雰圍氣の中で活動してゐるのである。ドイツの最も富裕な、最も普及された、最も『民主々義的な』ブルジョア新聞の一つ、„Frankfurter Zeitung“（『フランクフルト新聞』）は、マルクスの二十五年忌に大きな社說を獻げてゐる。（新曆三月十六日第七十六號 „Abendblatt“〔『夕刊』〕）。ドイツの『民主々義者達』は直ちに牡牛の角を捉へてゐる。『社會民主黨の新聞が――と彼等は我々にいふ、――この日多くの論文

においてその師を記念するのは、自明のことである。しかし或る有力な國民的＝自由主義的新聞においてさへも、マルクスは、普通の斷り書を附してゞはあるが、偉大な人間として認められた。然り、勿論、彼は偉大であつた、しかし彼は偉大な誘惑者であつた』と。

ヨーロッパ的自由主義と呼ばれるところの觀念的黑百人組主義の變種の精華を代表してゐるこの新聞は、マルクスの人格的潔白さは少しも疑へないことを明かにしてゐる。しかし彼の理論は無數の害毒を齎した。必然性と合則性との概念を社會現象の領域へ導き入れ、道徳の意義と我々の知識の相對的、條件的性質とを否定することによつて、マルクスは反科學的なユートピアと自己の宗派的追隨者の眞の『敎會』とを創始した。だが彼の主要な有害な觀念は階級鬪爭である！マルクスは two nations、各〻の文明國民の内部における二つの國民、『搾取者』國民と『被搾取者』國民（新聞はこの非科學的な表現を殺人的に皮肉な括弧に入れてゐる）に關する古臭い格言を眞に受けた。マルクスは、社會生活においては『鬪爭ではなくて、協調が目的だ』といふ自明な、明白な、すべての健全な人々には理解されうる眞理を忘却した。マルクスは『國民を諸部分に分裂させた、何故なら彼は自己の味方の頭に、彼等と他の人々との間には何等共通なものがな

いこと、彼等は不倶戴天の仇敵であることを鎚を以て叩きこんだからである』。

『多くの實際的要求においてブルジョアジーの多くのものと一致してゐる社會民主黨が、彼等と接近しようと努力したといふこと以上に自然的なことが何かありうるだらうか？　しかしこのことは恰もマルクス主義理論の故に行はれない。社會民主黨は自身で自身を孤立に運命づけた。或る時期の間、この點において原則的變化がやつて來るだらう、と思ふことができた。それは修正主義者がそのカンパニヤを開始した時であつた。しかしこれは誤謬であることがわかつた。そして修正主義者と我々との間の差異は、就中、我々はこの誤謬を理解したが、彼等は理解しなかつたことにある。修正主義者は、或る仕方でマルクスに噛りつきながら而もなほ他の黨となりうる、と考へたしまた今日まで考へてゐる。無駄な望みだ。マルクスは或ひはすつかり鵜呑にするか、或ひは全く放棄すべきであつて、そこでは中途半端なことをしてはならないのである』……

全くだ、自由主義者諸君！　實際諸君も時には思はず眞實を語ることがある！

……『社會民主黨がマルクスを尊敬する限り、それは階級鬪爭の觀念から離れず、また社會民主黨と共に生きることをかくも困難ならしめるその他のすべてのことから離れないであらう……學界は、マルク

ス主義の經濟學理論のうちたゞの一つも正しいものはない、といふことについて一致してゐる』……

その通り、その通り。紳士諸君、諸君はブルジョア科學、ブルジョア自由主義およびその全政策の本質を美事に表現したのだ。諸君はマルクスを部分的に呑みこんではならないことを理解したのだ。イズゴエフ君達とロシアの自由主義者達はまだこれを理解しなかつた。やがて彼等も理解するであらう。

さて、最後に、ブルジョア共和國の保守派の機關紙 ,,Journal des Débats"（『ジュルナール・ド・デバット』）（註四三）を見よう。新聞は三月十五日號に紀念日について、社會主義者が、これらの『野蠻な平等論者』が、自己の偉人達への禮拜を說敎してゐること、『ブルジョアジーを憎惡した』マルクスの學說の主要な惡は、階級鬪爭の理論であることを書いてゐる。『彼は休戰に伴ふ一時的衝突ではなくて、神聖戰爭を、絕滅と收奪との戰爭を、集團主義の約束の地のための戰爭を……不思議なユートピアを勞働者階級に說敎した』……

ブルジョア諸新聞は、何物かゞそれらを生きたものに眞實に突きあたらせる時には、立派に書く。そして全世界におけるプロレタリアートの自由主義的な敵の觀念的統一が形成され且つ鞏固

になるのを見る時には、生きることが愈〻愉快になる、——何故ならこの統一は、どうなつても自己の約束の地を戰ひとるところの、何百萬の國際プロレタリアートの結合の證據の一つであるから。

（全集、第三版、第十二卷、一六五—一六八頁）。

マルクス主義と修正主義（註四四）

一九〇八年四月に書かれ、論集『カール・マルクス紀念』、ペテルブルグ一九〇八年、に收錄されたもの。

一つの有名な箴言はかういつてゐる、幾何學的定理が人々の利益に牴觸したならそれはきつと論駁されたであらう、と。神學の古い偏見に牴觸した自然史的理論は、最も猛烈な鬪爭を喚び起したしまた今日まで喚び起してゐる。現代社會の進歩的階級の啓蒙と組織とに直接役立ち、この階級の任務を指示し且つ新しい秩序による現代制度の不可避的な――經濟的發展の故に――代置を證明するところの、マルクスの學說、この學說が生活行程におけるその各〻の步みを戰ひを以て獲得しなければならなかつたことは、不思議とするに足りない。

有產階級の發育盛りの靑年を愚昧化するためおよび彼等を內外の敵に對して『訓練する』ため

に、官學教授達によつて官學的に教授される、ブルジョア的な科學および哲學についてはいふまでもない。この科學はマルクス主義については、それは論駁され且つ絶滅されたものと說明することによつて、それには、耳を傾けようと欲しない。社會主義の論駁によつて出世する若い學者も、ありとあらゆるぼろ〳〵の『體系』の遺訓を保存する老ひぼれの老人も、同樣な熱心さを以てマルクスを攻擊してゐる。マルクス主義の發展、勞働者階級におけるその觀念の普及と鞏固化とは、マルクス主義に對するこれらのブルジョア的攻擊の頻繁化と尖銳化とを不可避的に喚び起す。しかしマルクス主義は公認科學によるその各〻の『絕滅』の後愈〻鞏固になり、鍛練されたものとなり、生き生きしたものとなる。

しかし勞働者階級の鬪爭と結びついた、主にプロレタリアートの間に普及された諸學說の間においても、マルクス主義は決して〳〵一擧にその地位を固めたのではない。マルクス主義はその存在の最初の半世紀の間(十九世紀の四十年代以來)、根本においてそれに敵對的な諸理論と鬪爭した。四十年代の前半にマルクスおよびエンゲルスは、哲學的觀念論の見地に立つてゐた急進的な少壯ヘーゲル學派を淸算した。四十年代の終りには經濟學說の領域における鬪爭——プルー

ドン主義に對する闘爭が始まる。五十年代にはこの闘爭が完了される、即ち暴風的な一八四八年に現はれた黨および學說の批判が行はれる。六十年代には闘爭は一般的理論の領域から直接の勞働者運動にもつと近い領域へ移る、即ちインターナショナルからのバクーニン主義の驅逐がこれである。七十年代の初めにはドイツに短期間プルードン主義者ミュールベルガーが擡頭し、七十年代の終りには實證論者デューリングが擡頭する。しかしプロレタリアートに對する彼等の影響はすでに全くいふに足りない。マルクス主義はすでに勞働者運動の他のすべてのイデオロギーを無條件的に克服してゐる。

前世紀の九十年代までにこの克服は大體において完了されてゐた。プルードン主義の傳統が最も長く維持されたロマン諸國においてさへ、勞働者黨は事實上その綱領と戰術とをマルクス主義的基礎の上に打ち建てた。勞働者運動の更新された國際的組織——定期的國際大會の形での——は忽ち、そして殆ど闘爭なしに、すべての本質的な點においてマルクス主義の基礎の上に立つた。しかしマルクス主義がそれに對していくらかでも全體的に敵對的なすべての學說を驅逐した時、これらの學說のうちに表現された諸傾向は、自ら他の道を求め始めた。闘爭の形態と動機と

は變化したが、鬪爭は繼續された。そしてマルクス主義の存在の後の半世紀は、マルクス主義の内部に於けるマルクス主義に敵對的な流派との鬪爭を以て始まつた(前半世紀の九十年代)。

嘗ての正統派マルクス主義者ベルンシュタインは、最大の騷々しさと、マルクスへの修正、マルクスの再檢討、修正主義といふ最もまとまつた表現とを以て立ち現はれたことによつて、この流派に名稱を與へた。非マルクス主義的社會主義が自然と――國の經濟的立後れと農奴制の遺物によつて壓迫された農民人口の優勢との故に、――最も長く維持されたロシアにおいてさへ、このロシアにおいてさへ、非マルクス主義的社會主義は我々の眼前で明かに修正主義へ轉化しつゝある。農業問題においても(すべての土地の公有化の綱領)、綱領および戰術の一般問題においても、我國の社會=ナロードニキは、古い、自己流にまとまつた、根本においてマルクス主義に敵對的な體系の、死滅し且つ倒壞しつゝある遺物を、益々マルクスへの『修正』によつて代置しつゝある。

先マルクス主義的社會主義は粉碎されてゐる。それはすでに自己の獨立的地盤の上においてゞはなくて、マルクス主義の一般的地盤の上において、修正主義として、鬪爭を繼續しつゝある。

そこで、修正主義の觀念的內容は如何なるものであるかを見よう。

哲學の領域においては修正主義はブルジョア教授的『科學』の尻尾について行つた。教授達は『カントへ歸つて』行つた、――そこで修正主義者達は新カント主義者の後について行つた。教授達は千回も述べられた哲學的唯物論に對する僧侶的俗惡を反覆した、――そこで修正主義者達は自卑的に微笑しながら、唯物論はとつくに『論駁されてゐる』と（一語一語最近の參考書に從つて）つぶやいた。教授達はヘーゲルを『死せる犬』（註四五）として鼻であしらひ、そして自らは觀念論を、而もヘーゲルのそれよりも千倍も矮小且つ俗惡な觀念論を說教して、辨證法については輕蔑的に肩を聳やかした、――そこで修正主義者達は彼等について科學の哲學的俗惡化の泥濘の中へ匍ひこみ、『精巧な』（そして革命的な）辨證法を『單純な』（そして穩和な）『進化』によつて取り代へた。教授達は觀念論的でもあり『批判的』でもある自己の體系を支配的な中世的『哲學』（即ち神學）へ驅り立てることによつて、自己の官學的俸給を稼いだ、――そこで修正主義者達は彼等に近づいて、宗教を現代國家との關係においてゞはなくて、進步的階級の黨との關係において『私事』たらしめようと努力した。

マルクスへのこの種の『修正』が如何なる現實的な階級的意義を有するか、これについてはいふまでもないことである――事態は自明である。我々はたゞ、こゝで修正主義者が喋つた信じ難いほどの俗惡さに對して徹底的な辨證法的唯物論の見地から批判を與へた、國際社會民主々義におけるの唯一のマルクス主義者は、プレハーノフであつた、といふことだけを指摘しておかう。このことは、今日プレハーノフの戰術的日和見主義の批判といふ旗印の下に、古い反動的な哲學的がらくたを持ち出さうとする深く誤つた試みがなされてゐるだけに、決定的に强調することが一層必要なのである。*

* ボグダーノフ、バザロフその他の『マルクス主義哲學槪論』を見よ。こゝはこの書物を解剖すべきところではない、そして私はさしあたり、次の聲明に止めなければならぬ、即ち近い將來に一聯の論文または特別の小册子において、新カント主義的修正主義者について本文で述べられたすべてのことは事の本質においてこれらの『新』ヒューム主義的および新バークレー主義的修正主義者にもあてはまることを示すであらう、と。(『唯物論と經驗批判論』參照。編輯者)。

經濟學へ移ることにして、何よりも先づ我々は、この領域においては、修正主義者の『修正』

が遥かに多面的であり且つ詳細であることを指摘しなければならぬ。彼等は『經濟的發展の新資料』によつて公衆に働きかけようと努力した。集中と大生産による小生産の驅逐とは農業の領域においては全く行はれず、商工業の領域においてはこれは極めて徐々に行はれる、と彼等はいつた。恐慌は今や一層稀れになり、一層弱くなつたし、恐らくカルテルおよびトラストは恐慌を全く排除する可能性を資本に與へるだらう、と彼等はいつた。資本主義がそれに向つて進むところの『崩壞の理論』は、階級的矛盾の鈍化と緩和との傾向のために成り立たない、と彼等はいつた。最後に、マルクスの價値論もまたボェーム・バウェルク流に修正することを妨げない、と彼等はいつた。

これらの問題に關する修正主義者との鬪爭は、二十年前におけるエンゲルスとデューリングとの論爭が與へたと同じやうな効果的な活氣を國際社會主義の理論的思想に與へた。修正主義者の論據は手許にある事實と數字とを以て解剖された。修正主義者は現代の小生産を組織的に修飾してゐることが證明された。小生産に對する大生産の技術的および商業的優越の事實は、工業においてのみならず、農業においても、論駁され難い諸事實がこれを證明してゐる。しかし農業にお

いては商品生産は遙かに弱く發展してゐる、そして現代の統計學者や經濟學者は農業の世界經濟の交換への進歩的な引き入れを表現する農業の專門的部門（時には作業さへ）を通常拙劣にしか區分することができない。小生產は食物の限りなき劣惡化、慢性的飢餓、勞働日の延長、家畜の質およびその世話の劣惡化によつて、一言にすれば、クスタール生產が資本主義的マニュファクチュアに對抗して維持されたと同じ手段によつて、自然經濟の廢墟の上に維持されてゐる。科學と技術との前進の一歩一歩は資本主義社會における小生產の基礎を不可避的に且つ容赦なく掘り崩す。そして社會主義經濟學の任務は、この過程をそのすべての形態において、往々複雜且つ錯綜した形態において研究すること、——小生產者に資本主義の下において頑張ることの不可能を、資本主義の下における農民經濟の行詰りを、農民がプロレタリアの見地へ移行することとの必然性を證明することとである。修正主義者はこの問題において、科學的な點においては、資本主義の全制度との聯關の外において一面的に捉へられた諸事實の淺薄な一般化の罪を犯し、——政治的な點においては、彼等は、農民を……プロレタリアートの見地へ押しやる代りに、不可避的に、欲すると否とに拘らず、農民を經營主の見地へ（卽ちブルジョアジーの見地へ）召集しまたは押し

やる、といふ罪を犯した。
恐慌理論および崩壊理論については事態は修正主義のために一層悪かつた。たゞ極めて短期間のみ、そしてたゞ極めて近視的な人々のみが、數年間の産業的昂揚と繁榮との影響の下にマルクスの學説の基礎の改造について考へることができた。恐慌が死滅しなかつたことは、極めて急速に現實が修正主義者に示した。即ち恐慌は繁榮の後にやつて來た。個々の恐慌の形態、持續性、姿は變化したが、恐慌は依然として資本主義制度の不可避的な構成分であつた。カルテルとトラストとは、生産を結合すると同時に、すべての人々の眼前で生産の無秩序、プロレタリアートの不安および資本の壓迫を強め、かくして未曾有の程度に階級的矛盾を尖鋭化した。資本主義が崩壞に向つて進みつゝあること――個々の政治的および經濟的危機といふ意味においても、全資本主義制度の完全な破滅といふ意味においても――このことは恰も最近の巨人的トラストが特にはつきりと且つ特に廣汎な規模において示した。多くの徵候がこれを指示してゐる切迫せる産業恐慌のことはもういはないとしても、アメリカにおける近頃の金融恐慌、全ヨーロッパにおける失業の恐るべき激化、――これらすべてのことの結果、修正主義者の近頃の『理論』は、すべての

人々によつて、見受けるところ彼等自身のうちの多くの者によつても、忘れられるに至つた。ただ、このインテリゲンチャ的不安定性が勞働者階級に與へた教訓だけは忘るべきではない。

價値理論についてはたゞ、修正主義者はボェーム・バウェルク流の極めて曖昧な暗示や慨嘆の外に決定的に何物をも與へず、從つて科學的思想の發展に何等の痕跡をも殘さなかつた、といふことだけを述べなければならぬ。

政策の領域においては、修正主義者は實際マルクス主義の基礎、即ち階級鬪爭に關する學説を再檢討しようと試みた。政治的自由、民主々義、普通選擧權は階級鬪爭のための地盤を絶滅する、——と彼等は我々にいつた、——そして勞働者は……を持たない、といふ『共產黨宣言』の古い命題を不當なものにする。民主々義においては、『多數者の意志』が支配する以上、國家を階級支配の機關と見ることも、反動家に對する進步的、社會改良家的ブルジョアジーとの同盟を拒絶することもできない、と。

修正主義者のこれらの反駁が諸見解、——即ちとうに知られてゐる自由主義的＝ブルジョア的諸見解の十分調和した體系に歸着するものであつたことは爭へない。自由主義者は常にかういつて

ゐた、投票權、國事への參與權をすべての市民が無差別に持つ以上、ブルジョア議會主義は階級および階級分裂を絶滅する、と。十九世紀の後半におけるヨーロッパの全史、二十世紀の初めにおけるロシア革命の全史は、この種の見解が如何に無意味であるかを明瞭に示してゐる。經濟的差別は『民主々義的』資本主義の自由の下においては弱められないで、强められ且つ尖鋭化される。議會主義は階級的抑壓の機關としての最も民主々義的なブルジョア共和國の本質を排除しないで、それを暴露する。以前政治的事件に活潑に參加したものよりも測り難く廣汎な人口大衆を啓發し且つ組織することを援助することによつて、議會主義は危機と政治的……の排除を準備しないで、これらの……期における市民戰爭の最大の激化を準備する。一八七一年春のパリの事件および一九〇五年冬のロシアの事件は、かゝる激化が如何に不可避的にやつて來るかを最も明瞭に示した。フランスのブルジョアジーは、一刻も躊躇しないで、プロレタリア運動の鎭壓のために、全國民の敵、その祖國を荒廢せしめた外國の軍隊と協定を結んだ。議會主義およびブルジョア民主々義の不可避的な內的辨證法、紛爭を大衆的强壓によつて從前の時代よりも更に一層思ひ切つた解決に導くところの辨證法を理解しない者は、決してこの議會主義の地盤の上に立つて、

勞働者大衆をかゝる『紛爭』への勝利的參加に實際に準備させるところの原則的に自制力ある宣傳および煽動を行ふことができぬ。西歐における社會改良家的自由主義、ロシア革命における自由主義的改良主義（カデット）との同盟、協調、聯合の經驗は、これらの協調がたゞ大衆の意識を鈍らせ、彼等の闘爭の眞實の意義を强めないで、それを弱め、闘爭者をば最も闘爭能力のない、最も動搖的且つ裏切的な要素と結びつけるにすぎないことを、切實に示した。フランスのミルラン主義――修正主義的な政治的戰術を廣汎な、眞に國民的な規模に適用した最大の經驗――は、全世界のプロレタリアートが決して忘れないやうな、修正主義の實際的評價を與へた。

修正主義の經濟的および政治的傾向の自然的補充は、社會主義運動の窮極目的に對するその態度であつた。『窮極目的は無で、運動がすべてだ』、ベルンシュタインのこの慣用語は多くの長々しい議論よりもよく修正主義の本質を表現してゐる。場合々々に應じて自己の態度を決定し、日日の出來事へ、政治的些事の轉換へ順應し、プロレタリアートの根本的利益と全資本主義制度、全資本主義的進化の基本的特徵とを忘れ、刻々の現實的な又は豫想される利得のためにこの根本的利益を犧牲にすること、――これが修正主義的政策である。そしてこの政策が無限に多樣な形

態を取りうること、各〻のいくらかでも『新しい』問題、いくらかでも不意の且つ豫期されなかつた事件の轉換――この轉換はたゞ微細な程度のものにすぎず、そして極めて短い期間内に發展の基本的方向を變へるとはいへ、――が不可避的に修正主義のあれやこれやの變種を喚び起すであらうといふことは、この政策の本質自體から明白に生ずるのである。

修正主義の不可避性は現代社會におけるその階級的根據によつて條件づけられてゐる。修正主義は國際的現象である。いくらかでも事情に通曉し且つ思慮あるすべての社會主義者にとつては、ドイツにおける正統派とベルンシュタイン派、フランスにおけるゲード派とジョーレス派（今は特にブルース派）、イギリスにおける社會民主聯盟と獨立勞働黨、ベルギーにおけるブルッカーとヴァンダーヴェルデ、イタリーにおけるインテグラリストと改良主義者、ロシアにおけるボリシェヴィキとメンシェヴィキとの關係が、これらすべての國の現狀における國民的諸條件および歷史的諸契機の巨大な多樣性にも拘らず、その本質においてはいたるところで同種類のものであることは、少しの疑ひもありえない（註四六）。現代の國際的社會主義の內部における『分化』は、本質において、すでに今や種の國々において、一つの方向に進み、そしてこのことによつて、統一的な

國際社會主義の内部において同種ならざる諸傾向が種々の國において闘爭した、三十―四十年前におけるものと比較すれば、巨大な前進を記錄してゐる。そして今やロマン諸國において『革命的サンヂカリズム』(註四七)として描き出された『左からの修正主義』もまた、マルクス主義を『修正』しつゝ、マルクス主義に適應してゐる。卽ちイタリーにおけるラブリオラ、フランスにおけるラガルデールは、始終、誤解されたマルクスに訴へ、正解されたマルクスに訴へてゐる。

我々はこゝで、日和見主義的修正主義の如くに決してまだ發展せず、國際化せず、何れの國の社會黨との一つの大きな實際的挌鬪をも經てゐないこの修正主義の觀念的内容の解剖に立ち停ることができぬ。それ故我々は、上に描き出された『右からの修正主義』に局限しよう。

資本主義社會におけるその不可避性は何處にあるか？　何故それは資本主義の發展の國民的特殊性および段階の差異よりも深いのであるか？　何故なら、すべての資本主義國にはプロレタリアートと並んで常に小ブルジョアジー、小經營主の廣汎な層が存在するからである。資本主義は小生産から生れたものでありまた絶えず生れつゝある。幾多の『中間層』は資本主義によつて不可避的に新たに作り出される（工場の附屬物、家内勞働、小作業場――大工業、例へば自轉車お

よび自動車工業の要求によつて全國に分散されたもの、等々)。これらの新しい小生產者は同じく不可避的に再びプロレタリアートの隊伍へ投げ出される。小ブルジョア的世界觀が廣汎な勞働者黨の隊伍の中へ絕えず新たに侵入するのは、全く自然なことである。……の大變動に至るまではかくの如くあらねばならず且つ常にあるであらうことは、全く自然なことである、何故ならかゝる……實現のためには人口の大多數の『完全な』プロレタリア化が必要だ、と考へることは深い誤謬であらうから。今日我々が屢々たゞ觀念的にのみ經驗するところのもの、卽ちマルクスへの理論的修正との論爭、――今日實踐においては、修正主義者との戰術上の意見の相違およびこれを基礎とする分裂の如き、たゞ勞働者運動の個々の部分的な問題についてのみ侵入してゐるところのもの、――これを勞働者階級は、……がすべての論爭的問題を尖銳化し、すべての意見の相違を大衆の行動の決定にとつて最も直接的な意義を有する點に集中させ、鬪爭の焰の中において敵と味方とを區別させ、敵に決定的な打擊を加へるために惡しき同盟者を放擲させる時に、比較にならぬ大きな規模においてなほ必ずや經驗しなければならないであらう。

十九世紀末における……マルクス主義の修正主義に對する觀念的鬪爭は、たゞ、小ブルジョア

のすべての動搖と弱さとに拘らず自己の事業の完全な勝利に向つて前進するプロレタリアートの偉大な戰ひの序幕たるにすぎない。

（全集、第三版、第十二卷、一七九－一八九頁）。

ヨーロッパの勞働者運動における意見の相違

一九一〇年十二月二十九（十六）日、新聞『ズヴェズダー』（註四八）第一號所載。

一（註四九）

ヨーロッパおよびアメリカの現代勞働者運動における基本的な戰術上の意見の相違は、事實上この運動における支配的理論となつたマルクス主義から退却するところの、二つの大きな傾向との闘爭に歸着する。この二つの傾向は修正主義（日和見主義、改良主義）と無政府主義（アナルコ・サンヂカリズム、アナルコ・ソシアリズム）である。勞働者運動において支配してゐるマルクス主義的理論およびマルクス主義的戰術からのこの二つの退却は、すべての文明國において大衆的勞働者運動の半世紀以上の歴史に亙つて種々の形態においておよび種々のニュアンスを伴つ

て見られるのである。

すでにこれだけの事實から、これらの退却は偶然性や、個々の人物またはグループの誤謬や、民族的特殊性または傳統の影響等々さへもによつて説明することができないことが、明かになる。すべての資本主義國の經濟制度とその發展の性質のうちに横はるところの、そして絶えずこれらの退却を生み出しつゝあるところの、根本的原因がなければならぬ。昨年出版されたオランダのマルクス主義者アントン・パンネケックの小著『勞働者運動における戰術の相違』(Anton Pannekoek: „Die taktischen Differenzen in der Arbeiterbewegung". Hamburg, Erdmann Dubber, 1909)は、これらの原因の科學的研究の興味ある試みである。以下の叙述において我々は、完全に正しいと認めざるをえないパンネケックの結論を讀者に紹介しよう。

戰術に關する意見の相違を定期的に生み出すところの、最も深刻な原因の一つは、勞働者運動の成長自體である。この運動を何等かの空想的理想の尺度を以て測らないで、普通人の實踐的運動として考察するならば、絶えず新しい『新兵』の吸收、勤勞大衆の新しい層の引き入れは、理論および戰術の領域における動搖、古い誤謬の反覆、陳腐な見解および陳腐なやり方への一時的

復歸等々を不可避に伴はずにはゐない、といふことが明かになる。各國の勞働者運動は新兵の『教練』に精力、注意、時間の大なり小なりの貯藏を定期的に費す。

更に、資本主義の發展の速度は種々の國および國民經濟の種々の領域において一樣ではない。マルクス主義は、大工業の最大の發展といふ條件の下において最も容易に、最も急速に、完全に且つ鞏固に、勞働者階級とそのイデオローグ達とによつて我がものにされる。その發展において後れてゐるかまた後れつゝある經濟的諸關係は、絕えず、たゞマルクス主義の或る方面のみを、たゞ新しい世界觀の個々の部分または個々のスローガン、要求のみを我がものにして、ブルジョア的世界觀一般および特にブルジョア民主々義的世界觀のすべての傳統から決定的に分離することができないやうな、勞働者運動の支持者を出現せしめる。

次に、意見の相違の不斷の源泉たるものは、矛盾のうちにおよび矛盾によつて進む社會的發展の辨證法的性質である。資本主義は古い生產樣式を破壞して生產力を發展させるが故に進步的であるが、それと同時に、發展の一定の段階において、それは生產力の成長を阻止する。それは勞働者を發展させ、組織し、訓練する、——そしてそれは壓迫し、抑壓し、墮落、貧困等々に導

く。資本主義は自ら自己の墓掘人を作り出し、自ら新しい制度の諸要素を作り出すが、それと同時に、『飛躍』なくしては、これらの個々の要素は事物の一般狀態を少しも變化せしめず、資本の支配に觸れないのである。辨證法的唯物論としてのマルクス主義は、資本主義と勞働者運動との生きた生活、生きた歷史のこれらの矛盾を把握することができる。しかし大衆が書物からではなくて、生活から學ぶといふことは、自明である。從つて個々の人物またはグループは、資本主義的發展のあれやこれやの特徵を、この發展のあれやこれやの『教訓』を絕えず誇張し、一面的な理論に、戰術の一面的な體系に引き上げるのである。

ブルジョア的イデオローグ、自由主義者および民主々義者は、マルクス主義を理解せず、現代勞働者運動を理解しないで、或る賴りない極端から他の賴りない極端へと絕えず飛び移つてゐる。惡人どもが階級を階級に『嗾ける』のだ、といつて彼等は萬事を說明したり、――勞働者黨は『平和的な改良黨』だ、といつて彼等は自ら慰めたりしてゐる。勞働者運動の一方面を捉へ、一面性を理論に引き上げ、勞働者階級の活動のあれやこれやの時期、あれやこれやの條件の特別な特殊性を構成するやうなこの運動の傾向または特徵を相互排他的なものと宣言するところの、

アナルコ・サンヂカリズムや改良主義は、このブルジョア的世界觀とその影響との直接の所產と看做さなければならぬ。だが現實の生活、現實の歷史は、自然界における生活と發展とが自らのうちに緩慢な進化をも、急速な飛躍、漸進性の中斷を包含してゐると同樣に、自らのうちにこれらの種々の傾向を包含してゐるのである。

修正主義者は『飛躍』や、舊社會全體に對する勞働者運動の原則的對立に關するすべての考察を空語だと考へてゐる。彼等は改良を社會主義の部分的實現と取り違へてゐる。アナルコ・サンヂカリストは『小さな仕事』、特に議會の演壇の利用を否認する。實際においてはこの後者の戰術は、偉大な出來事を創造する力を集めえないまゝで『偉大な日』を待ち受けることに歸着する。そしてあれもこれも、最も重要な、最も緊要な仕事、卽ち勞働者をば階級鬪爭の精神に貫かれた、自己の目的をよく意識した、眞實にマルクス主義的世界觀に教育された、大きな、力強い、よく働く、あらゆる條件の下においてよく働きうる組織に結合することを阻止してゐる。

こゝで我々は少しばかり本題から離れて、萬一の誤解を避けるために、パンネケックが自己の分析を專ら西ヨーロッパの歷史、特にドイツおよびフランスの實例によつて例解して、ロシアのこ

とは全く眼中においてゐないことを特記しよう。もし時に彼がロシアに觸れてゐるやうに見えるとすれば、それはたゞ、ロシアと西歐との巨大な文化的、生活的および歷史的=經濟的差異にも拘らず、マルクス主義的戰術からの一定の退却を生むところの基本的傾向は、我國にも現はれつつあるといふことによるものである。

最後に、勞働者運動の關與者の間における意見の相違を生む一つの極めて重要な原因は、支配階級一般、特にブルジョアジーの戰術における變化である。ブルジョアジーの戰術が常に一樣でありまたは常に同種であるなら、勞働者階級は同じく一樣または同種の戰術によつてそれに答へることを急速に習得したであらう。實際ブルジョアジーはすべての國において自己の利益と自己の支配の維持とのために、二つの支配體系、二つの鬪爭方法を不可避的に作り出す、そしてこの場合これらの二つの方法は或ひは互ひに入れ代つたり、或ひは種々の組合せで一緒に絡れ合つたりする。それは、第一には、強壓の方法、勞働者運動へのあらゆる讓歩を拒絶する方法、すべての古い且つ時代後れの制度を維持する方法、改良の絶對的否認の方法である。これが、西ヨーロッパでは地主階級の政策として愈〻存在しなくなり、益〻一般ブルジョア政策の變種の一つとなり

つゝあるところの、保守的政策の本質である。第二の方法は、『自由主義』の方法、政治的權利の發展の方向への、改良、讓步等々の方向への、步みである。

ブルジョアジーが一つの方法から他の方法へ移るのは、個々の人々の狡猾な打算によるのではなく、また偶然性によるのでもなくて、それ自身の地位の根本的矛盾性によるのである。正常的な資本主義社會は確立された代議制度なしには、『文化的』關係における比較的高度の要求によつて區別されざるをえない住民の或る程度の政治的權利なしには、首尾よく發展されえない。その高度の技術、複雜性、柔軟性、移動性、世界的競爭の高度の發展等々を有する資本主義的生產樣式自體の諸條件は、文化の或る最低限度に關するこの要求を生み出す。ブルジョアジーの戰術における動搖、强壓の制度から特有の讓步ともいふべき制度への移行は、その結果、最近半世紀間におけるすべてのヨーロッパ諸國の歷史において示されてゐるが、この場合種の國々は一定の期間主にその何れかの方法の適用を發展させた。例へば、十九世紀の六十年代、七十年代におけるイギリスは『自由主義的』ブルジョア政策の古典國であり、七十年代および八十年代のドイツは强壓の方法を保持した等々。

ドイツにおいてこの方法が支配してゐた時には、この一つのブルジョア的支配制度の一面の反響は、アナルコ・サンヂカリズム、または當時の言葉に從へば、勞働者運動における無政府主義の成長であつた(九十年代の初めの『靑年派』、八十年代の初めのヨハン・モスト)。一八九〇年に『讓步』への轉換が始まつた時、この轉換は何時でもさうであるやうに、勞働者運動にとつて一層危險なものであり、ブルジョア『改良主義』の同じく一面的な反響、卽ち勞働者運動における日和見主義を生み出すものであつた。『ブルジョアジーの自由主義的政策の積極的な、眞實の目的は——とパンネケックはいふ——勞働者を迷路に導くこと、彼等の間に分裂を齎すこと、彼等の政策を無力な、常に無力な且つ果敢ない改良主義の無力な附屬物に轉化することである』(註五〇)。

往々ブルジョアジーは、パンネケックの正當な指摘に從へば、『一層狡猾な』政策であるところの、『自由主義的』政策によつて、暫くの間自己の目的を達成する。勞働者の一部分と彼等の代表者の一部分とは、見せかけの讓步によつて忽ち欺瞞される。修正主義者は階級鬪爭說を『陳腐な』ものと宣言したり、事實上それからの退却を實現する政策を實行し始める。ブルジョア的戰術のジグザグは勞働者運動における修正主義の强化を喚び起し、往々その內部における意見の相違を

直接の分裂にまで導く。

上述の如き種類のすべての原因が勞働者運動の内部、プロレタリア仲間の内部における戰術に關する意見の相違を喚び起すのである。しかしプロレタリアートとそれと接觸する、農民層をも含めての小ブルジョアジーの層との間には、萬里の長城は存在しないしまた存在しえない。個々の人々、グループおよび層の小ブルジョアジーからプロレタリアートへの移行が、おのづから、プロレタリアートの戰術における動搖を生み出さざるをえないことは、明かである。

種々の國の勞働者運動の經驗は、マルクス主義的戰術の本質を實踐の具體的諸問題において明かにすることを助け、ヨリ若い國々がマルクス主義からの退却の眞の階級的意義を一層明かに識別し且つこれらの退却と一層首尾よく鬪爭することを助けるであらう。

（全集、第三版、第十五卷、一一九頁）。

マルクス主義の史的發展の若干の特殊性について

一九一一年一月五日（一九一〇年十二月二十三日）、『ズヴェズダー』第二號所載。

我々の學說は――とエンゲルスは自己と自己の有名な友人とについて述べた――ドグマではなくて、行動のための指針である、と。この古典的な命題のうちには著しい力と明白さとを以て、マルクス主義の極めて屢々見逃されてゐる方面が强調されてゐる。だがそれを見逃すことによつて、我々はマルクス主義を一面的なもの、畸形的なもの、死せるものにし、我々はマルクス主義からその生きた魂を拔き取り、我々はその根本的な理論的基礎――辨證法、卽ち全面的な且つ矛盾に充たされた史的發展に關する學說を傷つける。我々は、歷史の各々の新しい轉換に際して變化しうるところの、時代の一定の具體的任務とのその聯關を傷ける。

そしてまさに現今においては、ロシアにおけるマルクス主義の運命に關心を有する人々の間に、特に屢々、恰もマルクス主義のこの方面を見逃してゐる人々が見受けられる。然るに近年ロシアが大なる變動を經驗し、そしてこの變動が當面且つ直接的に行動の條件、從つてまた行動の任務を規定するところの情勢、社會的＝政治的情勢を異常な急速さでまた非常に激烈に變化させた、といふことは、何人にも明かである。私は、勿論、一般的および基本的任務のことを述べてゐるのではない、それは、諸階級間の基本的な相互關係が變化しない限り、歴史の轉換に際して變化するものではない。ロシアの經濟的（および單に經濟的のみではない）進化のこの一般的方向は、ロシア社會の種々の階級の間の基本的關係と同樣に、例へば、最近六年間に變化しなかつた。

しかし當面且つ直接の行動の任務は、具體的な社會的＝政治的情勢と同樣に、この期間に激烈に變化した、――從つて、生きた學說としてのマルクス主義においても、その種々の方面が前面へ押し出されざるをえなかつた。

この思想を明かにするために、最近六年間における具體的な社會的＝政治的情勢がどうであつ

たかを一瞥しよう。我々の前には、この時期がそれに分たれる二つの三年が直ちに區分される。卽ち一つは、ほぼ一九〇七年の夏を以て終るものであり、他は一九〇一年の夏を以て終るものである。第一の三年は、純理論的見地から見れば、ロシアの國家組織の基本的特徵の急速の變化によつて特徵づけられ、そしてその場合、この變化の進行は非常に不均等であり、兩側への振動の幅は非常に大きかつた。『上層建築』のこれらの變化の社會的＝經濟的基礎は、ロシア社會のすべての階級が極めて種々の活動舞臺へ(國會的活動、國會外的活動、新聞、同盟、集會等々)、歷史上屢〻は見られないほど公然と、堂々と、大衆的な姿を取つて進出したことであつた。

これに反して、第二の三年は――繰返していふが、我々は今のところ純理論的『社會學的』見地に止つてゐるのである――殆ど停滯と等しいやうな緩慢な進化によつて特徵づけられる。國家組織には多少とも著しい何等の變化もない。前期においてこれらの進出が展開された『舞臺』の大多數における諸階級の何等のまたは殆ど何等の公然且つ多面的な進出もない。

兩期の類似は次の點にある、卽ちロシアの進化は前後の期間依然として以前の、資本主義的進化であつた。かゝる經濟的進化と幾多の封建的、中世的制度の存在との矛盾は、除去されない

で、やはり以前のまゝであり、それは片附けられるどころか、寧ろあれやこれやの個々の制度への若干の部分的なブルジョア的内容の侵入によつて尖鋭化されつゝある。

兩期の差異は次の點にある、即ち第一期には歴史的行動の前景に、上述の急速且つ不均等な變化の結果はまさに如何にして形成されるであらうか、といふ問題が存在した。これらの變化の内容は、ロシアの進化の資本主義的性質の故に、ブルジョア的たらざるをえなかつたが、しかしブルジョアジーにも色々ある。多かれ少かれ穩和な自由主義の立場に立つ中および大ブルジョアジーは、自己の階級的地位自體によつて、激烈な變化を恐れ、そして農業組織においても政治的『上層建築』においても、舊制度の顯著の遺物の保存に努力した。農村の小ブルジョアジーは、『自己の手の勞働』によつて、生活する農民層と錯綜してゐるために、あらゆる中世的舊習に對して遙かに小さな地位しか殘ないところの、他の種のブルジョア的變革に努力せざるをえなかつた。賃銀勞働者は、彼等が彼等の周圍で行はれてゐる事柄に對して意識的態度を取つた限りにおいて、二つの異つた傾向のこの衝突に對して一定の態度を自ら作り上げざるをえなかつた。そしてこの二つの異つた傾向はいづれもブルジョア制度の埒内に止まつてはゐたが、その全く異つた

形態、その發展の全く異つた速度、その進步的影響の及ぶ異つた廣さを規定したのである。

かくして、過ぎ去つた三年は、マルクス主義において通常戰術問題と呼ばれてゐる問題を、偶然的ではなくて、必然的に前面へ押し出した。あらゆる種類のヴェヒー派（註五二）が考へてゐるやうに、これらの問題に基く論爭および不一致が『インテリゲンチヤ的論爭』であり、『未成熟のプロレタリアート』であり、『インテリゲンチヤのプロレタリアートへの順應』を表現するものであつたかの如く見る意見ほど間違つたものはない。反對に、まさにこの階級が成熟に達してゐたればこそ、それはロシアの全ブルジョア的發展の二つの異つた傾向の衝突に對して無關心ではゐられなかつたのであり、そしてこの階級のイデオローグ達はこの異つた傾向に（直接または間接に、直接の反射または逆の反射において）適應する理論的定式を與へざるをえなかつたのである。

第二の三年においてはロシアのブルジョア的發展の異つた傾向の衝突は日程に上らなかつた、何故ならこの兩傾向は『野牛ども』によつて壓しつぶされ、後方へ押しやられ、内部へ追ひこまれ、暫くの間抑止されたからである。中世的な野牛どもはたゞ舞臺の前部を充たしたのみなら

ず、ブルジョア社會の最も廣汎な層の心臟をヴェヒー派的氣分によつて、倦怠、諦めの精神によつて充たしたのである。古いもの丶改造の二つの樣式の衝突ではなくて、あらゆる改造への信念の喪失、『卑下』と『後悔』との精神、反社會的學說への熱中、神秘主義の流行等々、――これが表面に現はれたものである。

そしてこの驚くべき激烈な交代は偶然でもなければ、たゞ單に『外部的』壓迫の結果でもなかつた。前の時代は、數世代の間、數世紀の間、政治問題の局外に立つて、それに無關係であつた人口層を非常に深刻に振動させ、かくして『すべての價値の再評價』、基本的諸問題の新しい研究、理論や、イロハや、初歩からの學習への新しい關心が、自然的且つ不可避的に發生したのである。一時に長い眠からよび醒まされ、一時に最も重要な諸問題の前に立たされた數百萬の人々は、この高地を長く維持することができず、中斷なしには、初步的な問題への復歸なしには、新しい準備――未曾有の豐富な教訓を『消化』することを助け、そして比較にならぬほどヨリ廣汎な大衆に、今度は遙に斷乎として、ヨリ意識的に、ヨリ確信的に、ヨリ不撓不屈に再び前進する可能性を與へることを助けるやうな新しい準備なしには、すますことができなかつた。

史的發展の辨證法は次の如くであつた、即ち第一期においては、國の生活のすべての領域における直接的要求の實現が日程に上り、第二期においては、經驗の吟味、ヨリ廣汎な層によるその把握、から表現することができるなら、地下への、種々の階級の後れた隊伍へのその浸潤が日程に上つたのである。

マルクス主義は死せるドグマではなく、何等かの完成された、出來上つた、不變的な學說ではなくて、行動への生ける指針であればこそ、まさにその故にこそ、それは社會生活の諸條件の驚くべく激烈な交代を自己の上に反映せざるをえなかつたのである。交代の反映は、深刻な崩壞、離散、あらゆる種類の動搖、一言にすれば、マルクス主義の最も重大な內的危機であつた。この崩壞への決定的反撃、マルクス主義の基礎のための執拗な鬪爭が再び日程に上つた。自己の任務の定式化に際してマルクス主義を見逃すことができない諸階級の極めて廣汎の層は、前の時代においてはマルクス主義を極めて一面的に、畸形的に把握して、あれやこれやの『スローガン』や、戰術上の問題に對するあれやこれやの答を諳記しながら、これらの答のマルクス主義的基準を理解しなかつた。社會生活の種々の方面における『すべての價値の再評價』は、マルクス主義の最

も抽象的且つ一般的な哲學的基礎の『修正』へ導いた。種々雜多の觀念論的ニュアンスにおけるブルジョア哲學の影響は、マルクス主義者の間におけるマッハ主義的疫病のうちに現はれた。語記されてゐるが、理解されてゐない、熟考されてゐない『スローガン』の反覆は、實際においては、露骨または遠慮勝ちの『召還主義』かまたは召還主義をマルクス主義の『適法的なニュアンス』と認める類の、全く非マルクス主義的な小ブルジョア的な流派に歸着したところの、空虛な文句の廣汎な普及へ導いた。

他方では、ブルジョアジーの極めて廣汎な層を捉へたところの、ヴェヒー主義の精神、諦めの精神は、マルクス主義的な理論および實踐を『穩健と正確』との水路へ入れようと努力する流派の中へも浸潤した。こゝでマルクス主義的なものとして殘されたのは、もはやたゞ、『ヒエラルヒー』や『ヘゲモニー』に關する徹頭徹尾自由主義的精神によつて貫かれた議論を與へるところの措辭だけである。

勿論、これらの議論の考察は、本論文の任務とするところではない。マルクス主義によつて經驗されつゝある危機の深さについて、我々が經驗しつゝある時期のすべての社會經濟的情勢とマ

ルクス主義との聯關について上述したことを例解するためには、それを指摘するだけで十分だ。この危機によつて提起された問題を回避することはできぬ。空語によつてそれから離れようとする試みほど、有害な、無原則的なことはない。危機の深さとそれと闘爭する必要とを意識したすべてのマルクス主義者が、マルクス主義の種々の『同件者』に對するブルジョア的影響の普及によつて最も對立的な方面から歪曲されてゐるところの、マルクス主義の理論的基礎とその根本命題とを固守するために、結束することほど、重要なことはない。

前の三年は、往々今日初めて眞實にマルクス主義を知り始めてゐるやうな廣汎な層を社會生活への意識的參加に高めた。ブルジョア新聞はこの點について以前よりも遙かに大なる迷語を作り出し、それを廣く普及させつゝある。マルクス主義の間における崩壞はかゝる條件の下においては特に危險である。それ故、我々の經驗しつゝある時期におけるこの崩壞の不可避性の原因を理解し且つそれとの徹底的闘爭のために結束することは、言葉の最も直接且つ正確な意味において、マルクス主義者にとつて時代の任務である。

（全集、第三版、第十五卷、七一―七五頁）。

パウル・ジンガー

——一九一一年一月三十一日（十八）日死す

一九一一年二月二十一（八）日、『ラボーチャヤ・ガゼタ』（『勞働者新聞』）第三號所載。

本年二月五日ドイツ社會民主黨はその最も古い指導者の一人、パウル・ジンガーの葬儀を行つた。ベルリンのすべての勞働人口——數百千——が黨の召集によつて葬列に加はり、自己の全力を、自己の全生涯を勞働者階級解放事業のために獻げた人の記念に敬意を表した。三百萬のベルリンは未だ曾てこれほどの民衆の集まりを見なかつた。約百萬人が行列の參加者および見物人であつた。この世の如何なる權力者もかゝる葬儀の光榮には浴しなかつた。何れかの國王または内外の敵の鏖殺によつて有名な將軍の遺骨の通過の場合には數萬の兵卒を街路に堵列せしめることができるが、すべての數百萬の勤勞大衆の胸に自己の指導者に對する、政府およびブルジョアジ

ーの抑壓に對するこの大衆自身の……鬪爭の事業に對する熱烈な愛着がないならば、この巨大都市の住民を起たしめることはできぬ。

パウル・ジンガー自身はもとブルジョアジーに屬し、商人の家庭から出で、かなり久しい間富裕な工場主であつた。彼は、その政治的活動の初めは、ブルジョア民主々義に屬してゐた。しかし勞働者運動の成功に對する恐怖のために極めて急速に自由に對する自己の愛を忘れる多くのブルジョア民主々義者および自由主義者とは異つて、ジンガーは熱烈な、衷心からの、最後まで徹底的且つ大膽な民主々義者であつた。ブルジョア民主々義の動搖、臆病、裏切は彼を迷はさないで、彼のうちに反抗を喚び起し、たゞ……勞働者階級の黨のみが自由のための偉大な鬪爭を最後まで遂行することができる、といふ益〻堅い信念を作り出した。

ドイツの自由主義的ブルジョアジーがドイツにおいて發展した……卑怯にも轉向して、地主の政府と取引し、國王の獨裁と妥協した、前世紀の六十年代に、ジンガーは決定的に社會主義に身を獻げた。一八七〇年、全ブルジョアジーがフランスに對する勝利に醉つてゐた時、一般人口大衆が民族主義と排外主義との卑劣な、人間嫌ひの、『自由主義的な』說敎に迷はされてゐた時、ジ

ンガーはフランスからのアルサスおよびロートリンゲンの奪取に反對する抗議に署名した。一八七八年、ブルジョアジーが反動的、地主的（ドイツ人の言葉によれば、『ユンケル的』）大臣ビスマルクの社會主義鎭壓法を實施し、勞働者團體を解散し、勞働者新聞を閉鎖し、意識的プロレタリアートに對して幾千の迫害を加へるのを援助した時、――ジンガーは決定的に社會民主黨に加入した。

そしてこの時以來ジンガーの生涯の歴史はドイツ社會民主勞働者黨の歴史と不可分的に結びつけられてゐる。彼は×××建設の困難な事業に獻身的に沒頭した。彼はすべての自己の力、すべての自己の富、すべての自己の非凡な組織者的能力、實際家および指導者としてのすべての天才を黨に提供した。ジンガーは、自由主義の長い歴史、裏切、臆病、政府との取引き、ブルジョア的策士の追從の歴史が彼等を衰弱せしめず、腐敗せしめないで、鍛練し、骨の髓まで×××たらしめるところの、少數者――いひうべくんば、極めて稀れなブルジョアジー出身者の一人であつた。社會主義に味方するかゝるブルジョアジー出身者は稀れであり、そして多年の鬪爭によつて試驗されたかゝる稀れな人々にのみプロレタリアートは、もし彼等が現代のブルジョア的奴隸制を

××する勞働者黨を鍛へ上げたいと欲するならば、信頼しなければならぬ。ジンガーはドイツの勞働者黨の隊伍における日和見主義の無慈悲な敵であり、そしてその最後の日まで非妥協的な、……社會民主々義的政策に搖がず忠實であつた。

ジンガーは理論家でもなく、評論家でもなく、輝かしい雄辯家でもなかつた。彼は何よりも先づ且つ何よりも多く、鎭壓法時代においては非合法的な黨の實際家＝組織者であり、この法律の撤廢後は、（ベルリン）市會議員および代議士であつた。そしてその時間の大部分が小さな、日常の、技術的＝議會的な、およびあらゆる『事務的な』仕事に消え去つたこの實際家は、自ら些事の偶像とならず、この『事務的』または『積極的』な仕事の名において激烈な且つ原則的な闘爭を斷念するほどそれほど普通な、それほど平凡な傾向に陷らなかつたことによつて、偉大であつた。反對に、ジンガーは、全生活をこの仕事に獻げながら、勞働者階級の……黨の根本的性質や、その根本目的や、ブルジョアジーとのブロックや、モナーキズムに對する讓步等々に關する問題が起る度毎に、――常に日和見主義のあらゆる現はれに對する最も確乎たる、最も決定的な闘士達の先頭に立つた。社會主義鎭壓法の時代には、ジンガーは、エンゲルス、リープクネヒトお

よびベーベルと共に、二つの戰線において鬪爭した、即ち議會鬪爭を否認する『青年派』、半無政府主義者に對しても、穩健な『飽くまでもの合法主義者』に對しても。晩年にはジンガーは同じく決定的に修正主義者と鬪爭した。

彼は彼を死に至らしめたところのブルジョアジーの憎惡を受けた。ジンガーのブルジョア的憎惡者達（ドイツの自由主義者と我國のカデット）は、彼の死と共にドイツ社會民主黨の『英雄』時代、即ち指導者達において……の信念、原則的＝……政策の固守がかくも強く、新鮮で、直接的であつた時代の最後の代表者の一人が死ぬことを、他人の災害を見て喜びながら指摘してゐる。ジンガーと交代して——とこれらの自由主義者はいふ——穩健な、正確な指導者たる『修正主義者』、謙遜な要求と小さな勘定との人々が現はれる、と。いふまでもなく、勞働者黨の成長は往々その隊伍に多くの日和見主義者を引き入れる。いふまでもなく、現代におけるブルジョアジーの出身者は、……信念の堅牢さよりも、遙かに屢〻、その小心、思想の狹小さ、又は空語の愛をプロレタリア……へ持ちこむ。しかし敵はあまり早まつて狂喜しない方がいゝ！　勞働者大衆はドイツにおいても他の國々においても、益〻……に結束しつゝあり、そしてこの軍隊はその勢力を遙か

らぬ將來において展開するであらう、何故なら……ドイツにおいても他の國々においても發展しつゝあるからである。

古い……指導者達は死ぬ――……プロレタリアートの若い軍隊は成長し且つ強くなる。

(全集、第三版、第十五卷、一一一―一一三頁)。

一九一一年十二月三日（十一月二十日）ポールおよびラウラ・ラファルグの葬儀においてロシア社會民主勞働者黨の名によつてなされた演説

一九一一年十二月二十一（八）日、『ゾチアール・デモクラット』第二十五號所載。

同志諸君！

私はロシア社會民主勞働者黨の名によつてポールおよびラウラ・ラファルグの逝去について深い悲しみの情を表はすために發言するものである。ロシアの意識的勞働者およびすべての社會民主々義者は、すでにロシア革命の準備時代に、ラファルグをロシアの革命および反革命において

かくも輝かしく確認されたマルクス主義の觀念の最も天才的且つ深刻な普及者の一人として、深く尊敬することを學んだのである。これらの觀念の旗の下にロシア勞働者の前衛部隊は結束し、その組織された大衆的鬪爭によつて絕對主義に打擊を與へ、そして自由主義的ブルジョアジーのすべての裏切、浮動および動搖にも拘らず、社會主義の事業、……の事業、民主々義の事業を固守したしまた固守しつゝある。

ラファルグにおいては――ロシアの社會民主々義的勞働者の考へるところによれば――二つの時代が結合されてゐた、即ちフランスの……靑年がフランスの勞働者と共に、共和主義的觀念の名において帝制に對する攻擊に進んだ時代と、――フランスのプロレタリアートがマルクス主義者の指導の下に、全ブルジョア制度に對して不撓不屈の階級鬪爭を行ひ、社會主義のためのブルジョアジーとの最後の鬪爭を準備した時代とがこれである。

アジア的野蠻に貫かれた絕對主義のすべての抑壓を經驗しつゝあるところの、またラファルグおよび彼の友人達の著作によつてヨーロッパの勞働者の……經驗および……思想を直接に知る幸福を持つたところの、我々ロシアの社會民主々義者には、――我々には、ラファルグが彼の生涯

をその固守に獻げた事業の勝利の時が如何に急速に近づきつゝあるかゞ、今や特に明瞭に分る。ロシア革命は全アジアに民主々義……の時代を開き、そして八億の人口が今や全文明世界の民主主義運動への參加者となつてゐる。そしてヨーロッパにおいては、いはゆる平和的ブルジョア議會主義の支配の時代が終りに近づき、かくして、ブルジョアジーの支配を……樹立するところの、組織され且つマルクス主義の觀念の精神において敎育されたプロレタリアートの……戰ひの時代に席を譲らうとする徵候が益〻增加しつゝある。

（全集、第三版、第十五卷、二六四―二六五頁）。

ハインドマンのマルクス論

一九一一年十二月九日（十一月二十六日）、
『ズヴェズダー』第三十一號所載。

近頃イギリス『社會民主黨』の創立者および指導者の一人、ヘンリー・マイヤース・ハインドマンの分厚な回想錄が出版された。殆ど五百頁もあるこの著書は、『冒險的生活の記錄*』と名づけられ、著者の政治的活動および彼の知つてゐた『有名な』人々に關する生き生きと書かれた回想を示してゐる。ハインドマンの著書は、イギリス社會主義の特徴づけのため、および全國際勞働者運動の若干の最も重要な問題の評價のために、多くの興味ある材料を與へてゐる。

* „The Record of an Adventurous Life", by Henry Mayers Hyndman. London (Macmillan and Co). 1911.

だから我々は考へる、ハインドマンの著書に若干の小論文を獻げることは、特に右翼カデット

の『ルッスキエ・ヴェードモスチ』（十月十四日附）が、これらの問題の自由主義的解說、またはもつと正しくいへば、曖昧化の顯著な模範を與へるところの、自由主義者ディオネオの論文を以て『進出』してゐる（註五二）ことに鑑みて、時宜を得たものであらう、と。

マルクスに關するハインドマンの回想から始めよう。H・ハインドマンは漸く一八八〇年にマルクスを知つたが、その時には、明かにマルクスの學說および社會主義一般について非常に少ししか知つてゐなかつた。一八四二年に生れたハインドマンが、この時まで、保守黨（トーリー）の中に聯關や同情を持つた不明確な色彩の『民主々義者』であつたことは、イギリスの關係にとつて特徴的である。ハインドマンは、一八七四年から一八八〇年に至る間におけるその度々のアメリカ旅行の一つにおいて『資本論』を（フランス譯で）讀んだ後、社會主義に轉向した。

カール・ヒルシュと伴れだつてマルクスを訪問した後、ハインドマンは頭の中で彼を……マッチニと比較した！

ハインドマンが如何なる月並さを以てこの比較をしたかは、周圍に對するマッチニの影響を彼が『人格的および個人的＝倫理的な』ものと呼び、そしてマルクスの影響を『殆ど全く知的および

科學的な』ものと呼んでゐることによつて分る。ハインドマンはマルクスの許へ、『偉大な分析的天才』の許へ行くが如くに行き、彼から學ばうとした、――彼をマッチニに引きつけたものは性格であり、『思想と行爲との高尚な樣式』であつた。マルクスは『いふまでもなく、ヨリ有力な智者』であつた。ハインドマンは、勿論、一八八〇年にはブルジョア民主々義と社會主義との差異を極めて描く理解してゐた（然り、今日も全く理解してゐない――これについては下に述べる）。

『私がマルクスに會つた時、――とハインドマンは書いてゐる――私の第一印象はかうだつた、衝突に入らうと準備してをり――志してゐる、とはいへないとしても――そして恰も今は攻擊を我慢してゐるかのやうに、若干疑深い氣分になつてゐるところの、力强い、もぢやもぢやと毛を生やした、制御し難い老人。しかし彼は私と愛想よく挨拶し、そして彼の最初の言葉も同樣に愛想がよかつた。「資本論」の著者と握手することは私に大なる滿足と光榮とを與へる、と私はいつた。彼は、印度に關する私の論文*を滿足を以て讀み且つそれについて彼の新聞通信において讃めておいた、と答へた。』

＊ハインドマンは、排外主義への最近の轉向以前には、イギリス帝國主義の決定的な敵であり、そして

インドにおけるすべての黨派のイギリス人――『教養あり』且つ『急進的な』著述家ジョン・モーリー(Morley)に至るまでの――をずつと以前からそれによつて有名にしたところの、下劣な暴力、無法、掠奪、凌辱(政治『犯人』の虐殺に至るまでの)に對して、一八七八年以來立派な暴露戰を行つた。

『マルクスが自由黨の政策、特にアイルランドに對する政策について猛烈な憤怒を以て語つた時、――この老闘士の小さな、深く窪んだ兩眼は燃え、重々しい眉は顰められ、廣い大きな鼻と顏とは動き出し、そして口からは熱烈な、嵐のやうな非難が河をなして流れ出した。それらは私に、彼の氣質のすべての熱情をも優れた英語の知識をも示した。怒りがかくも深刻に彼を波立たせた時の彼の物の言ひ方と、彼が或る時代の經濟上の出來事に對する自己の見解を說明した時の彼のすべての態度との對照は、驚くべきものであつた。何等の著しい努力なしに、彼は豫言者および有力な護民官の役割から平靜な哲學者の役割へ移つた。そして私は直ちに、私がこの後の問題の領域において彼の前で教師の前における生徒として自らを感じなくなるまでには、多くの長い年月が過ぎ去るであらうと、感じた。

『私が「資本論」および特に、パリ・コンミューンに關する彼の小著および「ブリュメール十八日」を讀ん

だ時に、私を驚かしたのは、如何にして彼が經濟的原因および社會的結果に關する自己の正確且つ冷靜な研究を、階級に對するそしてナポレオン三世またはティエールの如き個々の人物――彼自身の理論によれば、資本主義的發展のジャッガーナウトの二輪車の車輪の上の蠅以上のものではなかつたところの――にさへ對する最も熱烈な憎惡と結びつけることができたか、といふことであつた。マルクスがユダヤ人であつたことを忘れてはならぬ、そして私には、彼は彼自身の中に、彼の性格の中に、彼の肖像――その印象的な額、大きな濃い眉、燃えるやうな輝く眼、廣い感覺的な鼻と活潑な口を持ち、一面にもぢやもぢやした毛を生やした顏を持つところの――の中に、彼の人種の偉大な豫言者達の正當な怒りとスピノーザおよびユダヤ學者達の冷靜な分析的頭腦とを結合してゐたやうに思はれた。これは、私がどの人間においてもこの種のものを見たことのないところの、種々の能力の異常な結合であつた。』

『私がヒルシュと共にマルクスのところから出て、私がこの偉人の人格の深い印象の下にあつた時、ヒルシュは私に、マルクスについてどう思ふか、と訊ねた。「私は――と私は答へた――これは十九世紀のアリストテレスだと思ふ」と。けれどもかういつた後、私は直ぐかゝる定義が全「對象」を包括してゐないことに氣付いた。マルクスをばマケドニヤのアレクサンドルに對する廷臣の職分と幾世代にも對してかく

も有力な影響を與へた深遠な科學的勞作とを結合するものとして考へることはできないといふことを、何よりも先づ注意しなければならぬ。だがその外に、マルクスは、古代のこの最大の哲學者にとつて特徵的であるところの、冷靜な、無味乾燥な解說の中に諸事實とそれらの環境とを考察するほど、それほど完全に直接の人間的利害から決して離れなかつた――人々はそれについて度々語つたけれども。マルクスにあつては彼を圍繞する搾取および賃銀奴隷制の體制に對する憎惡が單に知的および哲學的であつたのみならず、また熱情的＝人格的であつたことは、何等の疑ひもありえない。

『私は曾てマルクスにかういつたことを記憶してゐる、もつと年取つたら、私はもつと辛抱强くなるだらうと思ふ、と。「もつと辛抱强くなるつて？ ――とマルクスは答へた――もつと辛抱强くなるつて？」と。彼がもつと辛抱强くならないであらうといふことは明かであつた。私は思ふ、物の現存秩序に對するマルクスの憎惡と自己の反對者に對する彼の殲滅的批判とは、富裕階級の敎養ある人々の多數が彼の偉大な著作の全意義を評價することを妨げ、そして彼等の眼中において、マルクスを歪曲し且つ彼を「論駁」しようと試みたといふだけで、三流どころの半可通および屁理窟屋とボェーム・バウェルクの如き英雄たらしめたのである、と。我々は今日、特にイギリスにおいては、常に決闘用長劍の尖に大きな軟い球をつけ

て戰ふ習慣になつてゐる。マルクスが彼の反對者達に對して拔身の劍を以てする猛烈な襲擊は、我が紳士的に粉飾した博學の決闘者達には無作法であると思はれる。そして彼等は、かゝる無慈悲な論爭家並びに資本および資本家の熱狂的な敵が實際においては我々の時代の最も深刻な思想家であつたことを信ずることができないのである』。

一八八〇年にはマルクスはイギリスの公衆に殆ど知られてゐなかつた。彼の健康は當時すでに著しく衰へてゐた、激しい仕事(一晝夜約十六時間およびそれ以上の知的勞働!)は彼の身體を破壞した、醫師は彼に每晩仕事することを禁じた、そして私は――とハインドマンは物語つてゐる――一八八〇年の終りから一八八一年の初めまで、彼の暇な時間を彼との對談のために利用した、と。

『我々の話しぶりはかなり獨特なものであつた。マルクスは、論爭に熱中すると、――恰も汽船の甲板を散步するかのやうに、部屋の中を前後に步く習慣を持つてゐた。私は自己の長い旅行(アメリカ、オーストラリア等々への)の間に、頭が特に何事かに働いてゐる時には、前後に步く同じやうな習慣を獲得した。そしてこゝに、敎師と生徒とが現代の問題や過ぎし日の事件を討論しながら、二、三時間もテーブル

を廻つて部屋を縱横に歩いてゐるやうな光景を見ることができたのである』。

マルクスがハインドマンと討論した種々の問題に關するマルクスの立場はどうであつたか、これをハインドマンは一つの問題についても多少とも詳しく傳へてゐない。上述したところから、ハインドマンが何よりも多く且つ殆ど專ら問題の逸話的方面に力を注いでゐることが分る。このことは彼の著書のすべての爾餘の內容にも照應する。ハインドマンの自傳は、自己の階級における最良の者として、窮極においては、社會主義への道を開きはするが、ブルジョア的傳統、ブルジョア的見解および偏見から決して完全には分離しないところの、イギリスのブルジョア的俗物の傳記である。

マルクスおよびエンゲルスが『似而非民主々義的』インターナショナルにおける『專制者』であつたとか、彼等は實際を理解せず、人々を知らなかつたとかいふマルクスおよびエンゲルスに對する俗物的非難を反覆しながら、ハインドマンは一度も、これらの非難の中の一つをも、その時期の情勢の正確な、具體的な敍述を基礎にして評價しようとはしない。

逸話は與へられるが、マルクス主義の歷史的分析は與へられない。マルクスおよびエンゲルス

はドイツ社會民主黨の合同問題（ラッサール派との）と闘爭したが、合同は必要であつた！　これがハインドマンが述べてゐるすべてゞある。マルクスおよびエンゲルスがラッサールとラッサール派とに比して千倍も原則上正しかつたことについて、ハインドマンは一言も述べてゐない。ハインドマンはこの問題を提起さへもしない。インターナショナルの時代における『民主々義』（組織上の）は、プロレタリア的社會民主々義の建設を分解したブルジョア的宗派の掩護物ではなかつたか、といふことについてハインドマンは疑問を起しさへもしない。

これがために、ハインドマンとマルクスとの決裂の歴史も流言（ディオネオ氏等の精神における）の外にはまさに何物も出て來ないやうな仕方で物語られてゐる。見よ、エンゲルスは『難癖を附ける、疑深い、嫉妬深い』人間であつた、マルクスの妻はハインドマンの妻にエンゲルスはマルクスの『惡靈』（!!）であつたといつた、と。ハインドマンが曾て會つたこともなかつた（ディオネオ氏は『ルッスキエ・ヴェードモスチ』に反對のことを書いてゐるけれども）エンゲルスは、『彼が援助した（貨幣によつて。エンゲルスは非常に富裕であり、マルクスは非常に貧しかつた）人々との關係において、自己の貨幣から完全な交換價値を引き出さうとする』傾向があつ

た。即ちエンゲルスは、當時富裕な人であつたハインドマンがマルクスの許における富裕な友人としてのエンゲルスの地位を占めることを恐れて、マルクスとハインドマンとを仲違ひさせようとしたのである!! と。

勿論、自由主義者諸君には、まさにこの種の表現し難い俗惡さを受け賣りすることが、滿足を與へる。ハインドマン自身が述べてゐる（マルクスおよびエンゲルスの）ゾルゲ宛の手紙（註五三）にでも通じ、そして必要なところを吟味すること、これは、勿論、自由主義的文筆家達が全く關心しないことなのである！ このことについては彼等は配慮しない！ 然るにこれらの手紙の照合、それらとハインドマンの『囘想錄』との比較は、忽ち問題を解決する。

一八八〇年にハインドマンは『萬人のためのイギリス』といふ小册子を出版したが、そこにおいて彼は非常に非常に混亂したブルジョア的民主々義者に止まりつゝ、社會主義に移行してゐる。小册子は當時生れた『民主聯盟』（非社會主義的な）のために書かれたものであるが、この聯盟の中には多數の反社會主義的要素が加はつてゐた。そしてこゝにハインドマンは、自己の小册子の二つの章において『資本論』を拔萃し且つ敷寫ししながら、マルクスを名指さないで、彼

が多くのものを負つてゐる或る『大思想家兼獨創的著述家』等々について、序文において漠然と述べてゐる。このことのためにエンゲルスは私とマルクスとを『仲違ひさせた』、――とハインドマンは物語り、それと同時に彼は彼へのマルクスの一つの手紙（一八八〇年十二月八日附）を引用してゐる、この手紙においてマルクスは、ハインドマンの言葉によれば、彼ハインドマンは『イギリスについては、私の（マルクスの）黨の見解を分有してゐない』と書いてゐる、と。

ハインドマンによつて理解されず、氣付かれず、評價されなかつた意見の相違が何にあつたかは、明白である。即ちそれは、ハインドマンが當時（マルクスが一八八一年十二月十五日附でゾルゲへ宛てゝ率直に書いてゐるやうに）『愛すべき小ブルジョア的著述家』、『半ばブルジョアで、半ばプロレタリア』であつたことにある。マルクスと知り、彼に親しみ、彼の弟子と自稱する人間が、然る後『民主聯盟』を設立し、それのためにマルクス主義を歪曲しマルクスを默殺した小冊子を書くとすれば、マルクスが『猛烈な』抗議なしにこれを放つて置くことができなかつたことは、明白である。そして明かに、抗議は存在したのである。何故ならマルクスはゾルゲ宛の同じ手紙において、『イギリス人は外國人から學ぶことを好まない』とか、『マルクスの名はかくも

憎悪されてゐた』(!!)等々と辯明してゐるハインドマンの謝罪狀からの拔萃を引用してゐるからである。(ハインドマン自身は、彼は彼宛のマルクスの殆どすべての手紙を破棄した、と傳へてゐる、だからこの方面からは少しも眞理の解明を期待することができない)。

さうではないか、立派な謝罪だ! そしてこゝに、ハインドマンとマルクスとの當時の意見の相違に關する問題が全く決定的に明かにされる時、ハインドマンの今日の全著書さへも、彼の見解のうちには多くの俗物的なものおよびブルジョア的なものがあること(例へば、ハインドマンは何といふ論證によつて重罪犯人に對する死刑を擁護してゐることであらう!)を證明してゐる時、四十年間もマルクスと同一の原則的方針を取つたエンゲルスの『陰謀』が、マルクスとの決裂の說明において何を提供するであらうか。そしてハインドマンの著書の爾餘のすべてがたつぷりと滿たされた蜜の樽であつたとしても、この一匙の苦味だけで十分であらう……

マルクスとハインドマンとの當時の意見の相違は、ハインドマンがヘンリー・ジョージに對するマルクスの評價について傳へてゐることによつて、見事に暴露される。この評價は一八八〇年六月三十日附のゾルゲ宛のマルクスの手紙(註五四)によつて知られてゐる。ハインドマンはかうい

ふ論證によつてH・ジョージをマルクスに對して擁護した、『ジョージはその誤謬の說教によつて、他の人々が眞理の完全な叙述によつて敎へるよりも多くのことを敎へる』と。

『マルクスは――とハインドマンは書いてゐる――この種の論證が許容されうることについて聞かうとも欲しない。誤謬の普及は決して人民にとつて有用ではない、これが彼の意見であつた。「誤謬を反駁しないで放つて置くことは知的不誠實を奬勵することを意味する。ジョージ以上に進む十人に對して、恐らくジョージの見解を以て止まるものが百人もあることにならう、だがこの危險性はそれを冒すには餘りに大きすぎる」』。マルクスはかく語つた!!

だがハインドマンは我々にかう傳へてゐる、一方では、彼は今もなほジョージに關する彼の以前の意見を固守してをり、そして他方では、ジョージは、電氣の探照燈を持つた人と並んで愚行を演じたところの、一錢蠟燭を持つた子供であつた、と。

比較は美事だ、たゞ……たゞこの美事な比較をエンゲルスに關する自己の憐れな流言と並べて持ち出すといふ冒險がハインドマン側からなされただけだ。

（全集、第三版、第十五卷、二六六―二七一頁）。

ヨゼフ・ディーツゲンの二十五年忌によせて

一九一三年五月十八（五）日、『プラウダ』第百二（三百六）號所載。

二十五年前、一八八八年に、ドイツの優れた社會民主々義的著述家＝哲學者の一人であつた勞働者＝鞣皮工、ヨゼフ・ディーツゲンは死んだ。

次の諸著作（大部分はロシア語にも飜譯されてゐる）がヨゼフ・ディーツゲンに屬してゐる。即ち、『頭腦の働きの本質』（一八六九年に出版された）、『一社會主義者の認識論界探檢』、『哲學の實果』その他。ディーツゲンと哲學史および勞働者運動における彼の地位との最も正しい評價を、マルクスはすでに一八六八年十二月五日附クーゲルマン宛の手紙において與へた——

『かなり前のことだが、——とマルクスは書いた——ディーツゲンは「思惟能力」に關する原稿の斷片を

私に送つてよこした。これは若干の混亂とあまりに度々の反覆にも拘らず、多くの優れたものと――一勞働者の獨立的勞作としては――驚異に値するものさへをも含んでゐる』。

こゝに、辨證法的唯物論、即ちマルクスの哲學へ獨立的に到達した勞働者、ディーツゲンの意義がある。勞働者ディーツゲンの特徴づけにとつて極めて貴重なのは、彼が自らを學派の創始者と考へなかつたことである。

ヨゼフ・ディーツゲンは、すでに一八七三年、少數の人々しかマルクスを理解しなかつた時に、マルクスのことを流派の首腦として語つた。J・ディーツゲンは、マルクスおよびエンゲルスが『必要な哲學上の學派を占めてゐた』ことを强調した。そして一八八六年、マルクス主義の主要な哲學的著作の一つたるエンゲルスの『反デューリング論』が出版されてから多くの時日を經た後、ディーツゲンはマルクスおよびエンゲルスのことを、流派の『公認された創始者』として書いた（註五五）。

このことは、恰もJ・ディーツゲンにおける『若干の混亂』に飛びつからうとする、ブルジョア哲學、即ち觀念論および不可知論（『マッハ主義』をも含めての）のあらゆる追隨者を評價するため

に、眼中におかれなければならぬ。J・ディーツゲン自身はかゝる崇拜者を嘲笑し且つ突き退けたことであらう。

意識的になるために、勞働者はJ・ディーツゲンを讀まねばならないが、しかし一瞬間も忘れてならないことは、彼が、たゞ彼等においてのみ哲學を學ぶことができるところの、マルクスおよびエンゲルスの學說の正しい敍述を必ずしも與へてゐないことである。

J・ディーツゲンは、單純化され、俗惡化された唯物論が全世界に普及されてゐた時代に書いた。だからJ・ディーツゲンは唯物論の歷史的變改を、唯物論の辨證法的性質を、即ち發展の見地に立ち、各〻の人間の認識の相對性を理解し、世界のすべての現象の全面的聯關と相互依存性とを理解し、自然史的唯物論を歷史に對する唯物論的見解にまで導くことの必要を、特に力說したのである。

人間の認識の相對性を力說しつゝ、J・ディーツゲンは屢〻混亂に陷つて、觀念論および不可知論への正しからざる讓步をなしてゐる。哲學における觀念論は多かれ少かれ僧侶主義の、即ち信仰を科學よりも上にまたは科學と列べておき、又は一般に信仰に地位を割當てるところの學說

の狡猾な擁護である。不可知論（アグノスチシズム）（ギリシャ語の『ア』――不と『グノーシス』――知識から）は唯物論と觀念論との間の動搖、即ち實際においては唯物論的科學と僧侶主義との間の動搖である。不可知論者に屬するものはカントの支持者（カント派）、ヒュームの支持者（實證論者、實在論者その他）および近代の『マッハ主義者』である。だからブルジョアジーの哲學者の最も反動的な或る者、公然の非開化主義者および僧侶主義の公然の擁護者は、J・ディーツゲンの誤謬を『利用』しようと試みたのである。

しかし全體においてJ・ディーツゲンは唯物論者である。ディーツゲンは僧侶主義と不可知論との敵である。『以前の唯物論者と我々の共通してゐるところは――とJ・ディーツゲンは書いた――たゞ我々が物質を觀念の前提または根本と認めることのみである』と。この『のみ』は即ち哲學的唯物論の本質である。

『唯物論的認識論は――とJ・ディーツゲンは書いた――人間の認識器官は何等の形而上學的な光を放つものではなくて、自然の他の斷片を反映するところの自然の一斷片だ、といふ認識に歸着する』と。これは即ち永久に活動し且つ變化する物質の人間の認識における唯物論的反映理

論、——すべての官學的、教授的哲學の憎惡と恐怖、誹謗と歪曲とを喚び起すところの理論である。そしてJ・ディーツゲンは眞實の革命家の何といふ深い熱情を以て哲學者＝觀念論者、實在論者等々の『僧侶主義の學位ある從僕』を鞭打ち且つ烙印したことであらう！『すべての黨派のうちで』——とJ・ディーツゲンは哲學上の『黨派』について、卽ち唯物論と觀念論とについて、正しくも書いた——『中間の黨派が最も嫌惡すべきものである』と。

『ルーチ』の編輯部とS・セムコフスキー氏（『ルーチ』第九十二號）とはこの『嫌惡すべき黨派』に屬してゐる。編輯部は『留保條件』を與へた、卽ち『我々は一般的＝哲學的見地を分有しない』、しかしディーツゲンの敍述は『正確であり且つ明白である』と。

これは驚くべき虛僞である。セムスコフスキー氏は不當にもJ・ディーツゲンを誤り傳へ且つ歪曲し、彼において恰も『混亂』を摑み、ディーツゲンに對するマルクスの評價を默過した。けれどもマルクス主義の哲學を最もよく知つてゐるプレハーノフも、ヨーロッパにおける最良のマルクス主義者も、この評價を完全に認めてゐる（註五六）。

セムコフスキー氏は哲學的唯物論をもディーツゲンをも歪曲して、『一つの世界か二つの世界

か』の問題についても（これは『根本問題』なのだそうだ！　愛する人よ、エンゲルスの『ルードウィッヒ・フォイエルバッハ』だけでも學び、通讀しましたか）、世界と現象との問題についても（ディーツゲンは現實の世界をたゞ現象に歸着せしめたのだそうだ。これはJ・ディーツゲンに對する僧侶的および敎授的誹謗だ）、無意味なことを述べてゐる。

しかしこゝにセムスコフスキー氏におけるすべての歪曲を列擧することはできない。マルクス主義に關心を持つ勞働者は、『ルーチ』の編輯部がマルクス主義の清算者の同盟であることを知るがいゝ。或る者は地下運動、即ちプロレタリアートの黨を清算し（マエフスキー、セドフ、F・D・その他）、他の者はプロレタリアートのヘゲモニーの觀念を（ポトレソフ、コリツォフその他）、第三の者はマルクスの哲學的唯物論を（セムコフスキー氏一派）、第四の者はプロレタリア社會主義のインターナショナリズムを（ブンド派、コソフスキー、メデムその他——『文化的＝民族的自治』の支持者）、第五の者はマルクスの經濟學理論を（マスロフ氏とその地代および『新』社會學の理論）を清算する等々。

セムコフスキー氏と彼を掩護する編輯部とによるマルクス主義の驚くべき歪曲は、たゞこの文筆家的『清算者同盟』の『活動』の最も明白な模範の一つたるにすぎない。

（全集、第三版、第十六卷、三七八—三八〇頁）。

アウグスト・ベーベル

一九一三年八月二十一（八）日、『セーヴェルナヤ・プラウダ』第六號所載。

アウグスト・ベーベルの死によつて單に勞働者の間において最も勢力あり且つ大衆に最も愛せられてゐるドイツ社會民主黨の指導者を失つたのみではない。ベーベルは彼の發展および彼の政治的活動の進行において、單にドイツ社會民主々義のみならず、國際社會民主々義の生活の全歴史的時期を體現したのである。

國際社會民主々義の歴史において二つの大きな時期を區別することができる。第一期は、社會主義思想の生誕とプロレタリアートの階級闘爭の端初とである。極めて多數の社會主義的學説および宗派の長い且つ執拗な闘爭。社會主義は自己の道を求め、自らを求めてゐる。小ブルジョア的『人民』の一般大衆から漸く分離し始めてゐるプロレタリアートの階級闘爭は、リヨンの織物

工の暴動の如き、個々の爆發の性質を帶びてゐる。勞働者階級はこの時期に同じく自己の道を漸く探り出しつゝあるのである。

この時期は、歴史の試練に耐へた唯一の社會主義學説としての、マルクス主義の準備と生誕との時期である。前世紀の初めのほゞ三分の二を句括するところのこの時期は、マルクス主義の完全な勝利、社會主義のすべての先マルクス的形態の崩壞（特に一八四八年の革命以後）と勞働者階級の小ブルジョア的民主々義からの分離、獨立的な歴史的行路へのその進出を以て終つてゐる。

第二期は、階級的、プロレタリア的構成の大衆的な社會主義黨の成立、成長および成人の時期である。社會主義の廣さにおける巨大な普及、プロレタリアートのあらゆる組織の未曾有の成長、偉大な世界史的目的の彼等による遂行のための種々雜多の活動舞臺へのその全面的な準備、——これがこの時期を特徴づけるところのものである。すでに最近年には、準備された力が一聯の危機のうちにその目的を實現するところの、第三期がこれに代らうとしてゐる。

自ら勞働者であつたアウグスト・ベーベルは、執拗な鬪爭の代價によつて自ら社會主義的世界

觀を作り上げ、彼のすべての豐富な力を悉く、殘りなしに、社會主義の目的への奉仕に獻げ、成長し且つ發展しつゝあるドイツのプロレタリアートと數十年間手を組んで進み、そしてヨーロッパの最も才能ある代議士となり、最も天才的な組織者および戰術家となり、改良主義および日和見主義に敵對的な國際社會民主々義の最も勢力ある指導者となつた。

ベーベルは一八四〇年二月二十二日ライン河畔ケルンにおいて、プロシャの下士の貧しい家庭に生れた。母の乳と共に彼は少からず野蠻な偏見を吸ひこんだ。そしてこの偏見から彼は徐々に、しかし後には確つかりと解放された。一八四八―一八四九年、卽ちドイツにおけるブルジョア革命の時代におけるライン地方の住民は、共和主義的氣分を持つてゐた。國民學校においてただ二人の子供が――ベーベルはその一人であつた――王制に贊成し、これがために同僚から打たれた。『一人の打たれたものゝ代りに二人の打たれないものを與へる』――ベーベル自身が、彼の回想錄において幼年時代のこのエピソードについて物語りつゝ、引き出してゐる『道德』は、ロシア語に自由譯すれば、かう表現することができる（註五七）。

前世紀の六十年代は、多年の苦難の反革命の後に、自由主義の『春』と大衆的勞働者運動の新

しい目醒めとをドイツに齎した。ラッサールはその輝かしい、だが短期間の煽動を開始した。當時若い職人＝旋盤工であつたベーベルは、四八年の古い活動家たちによつて刊行される自由主義的新聞を貪るやうに讀み、啓蒙的な勞働者協會の熱心な參加者となる。兵營的＝プロシャ的偏見から解放されて、ベーベルは自由主義的見解に加擔し、そして社會主義に對して鬪爭する。

しかし生活はそのなすべきことをなし、――そしてこの若い勞働者は、ラ・サールの小册子を讀みつゝ、徐々にマルクスにも到達する、當時ドイツにおいては、十年以上の反革命の抑壓のために、マルクスの著作に親しむことは如何にも困難ではあつたが。勞働者生活の諸條件、社會科學の眞面目にして良心的な研究は、ベーベルを社會主義へ押しやるのである。彼は自身でも社會主義に到達したであらうが、この發展を促進するためにリープクネヒトが彼を手助けした。リープクネヒトは十四だけ年上であつて、當時ロンドンの亡命から歸つてゐた。

マルクスの反對者の間の惡口は、當時からいつてゐた、マルクスの黨は三人よる成る、黨首はマルクス、彼の秘書はエンゲルス、そして彼の『代理人』はリープクネヒトである、と。しかし馬鹿な人々が亡命者または在外者の『代理人』としてリープクネヒトを警戒したとしても、ベー

ベルはリープクネヒトにおいて彼にとつて必要なものを、即ち一八四八年におけるマルクスの偉大な進出との、當時設立された、大きくはないが眞にプロレタリア的な黨――マルクス主義的見解およびマルクス主義的傳統の生きた代表者――との、生きた聯關を見出すことができた。――『この男は、畜生、學ぶべきものを持つてゐる!』、若い旋盤工のベーベルはリープクネヒトについてから批評したといはれてゐる。

六十年代の後半にはベーベルは自由主義者とのその聯關を絶ち、勞働者同盟の社會主義的部分をブルジョア民主々義的部分から分離させ、リープクネヒトと共に、アイゼナッハ黨、即ち多年他の勞働者黨、ラッサール黨と鬪爭したところの、マルクス主義者の黨の先頭に立つてゐる。

ドイツ社會主義の分裂の歴史的原因は、簡單にいへば、次のことに歸着した。ドイツの統一問題が日程に上つてゐた。當時の階級關係の下においては、それは二通りに解決されえたのである、即ち或ひはプロレタリアートに指導され且つ全ドイツ共和國を作り出すところの革命によるか、或ひはドイツの統一におけるプロシャの地主のヘゲモニーを强化するところのプロシャの王朝的戰爭によるかであつた。

ラッサールとラッサール派とは、プロレタリア的および民主々義的な道のチャンスは薄弱と見て、動揺的な戰術を取り、ユンケルのビスマルクのヘゲモニーへ順應した。彼等の誤謬は勞働者黨をボナパルト主義的＝國家社會主義的な道へ偏向せしめたことに歸着した。これに反して、ベーベルとリープクネヒトとは、徹底的に民主々義的およびプロレタリア的な道を固守し、プロシャ主義、ビスマルク主義、民族主義への些かの讓歩に對しても闘爭した。

そしてドイツはビスマルク式に統一されたにも拘らず、歴史はベーベルおよびリープクネヒトを正當化した。ベーベルおよびリープクネヒトの徹底的に民主々義的および……戰術のみが、民族主義への彼等の『非讓歩性』のみが、『上からの』ドイツの統一およびその革新に對する彼等の非妥協性のみが、眞に社會民主々義的な勞働者黨の鞏固な土臺を据ゑることを助けたのである。そして肝腎なことはまさに黨の土臺であつた。

ラッサール派のビスマルク主義との遊戯またはそれへの彼等の『順應』がドイツ勞働者運動に害毒を齎さなかつたとすれば、それはたゞベーベルおよびリープクネヒトがこの偏向に對して與へたところの最も精力的な、最も無慈悲にして激烈な反撃のおかげである。

そして問題が歴史的に解決された時、ドイツ帝國の創立の後五年を經て、ベーベルおよびリーブクネヒトは二つの勞働者黨を統一し、そして統一黨のうちにマルクス主義のヘゲモニーを確保することができた。

ベーベルはドイツ議會の設立の當初から、全く若い二十七歳の身を以て、それに選出された。そして敵に寸尺も讓らず、勞働者のための小さな改善でも獲得すべき最小の可能性をも見逃さないと同時に、原則的＝非妥協的であり、そして常に窮極目的の實現に向けられてゐるドイツ（およびは國際）社會民主々義の議會戰術の基礎、——この戰術の基礎は、ベーベルによつて、または彼の直接の參加および指導の下に仕上げられたのである。

ビスマルク式に統一され、プロシャ式およびユンケル式に革新されたドイツは、勞働者黨の成功に對して社會主義鎭壓法を以て答へた。勞働者階級の黨にとつての合法的諸條件は破壞され、黨は法律外のものと宣言された。困難の時代がやつて來た。敵の追求の上に內的危機が——戰術の根本問題における動搖が加はつた。合法性の破壞に驚愕したところの日和見主義者が先づ擡頭し、意氣銷沈、削除なきスローガンの放棄、我々は法外に遠くへ進みすぎたといふ自責等々の歌

を歌ひ出した。この日和見主義的流派の代表者の一人へヒベルグは、就中、まだ弱くて即時には自分自身の足で立ちえなかつた黨に財政的援助を示してゐた。

マルクスおよびエンゲルスは恥づべき日和見主義的動搖に對してロンドンから猛烈に喰つてかかつた。ベーベルは黨の眞實の指導者として現はれた。彼は好時機に危險性を見拔き、マルクスおよびエンゲルスの戰術の正しさを理解し、黨を無慈悲な鬪爭の道へ向けることができた。非合法新聞『ゾチアール・デモクラット』が創刊されて、最初はチューリッヒで、後にはロンドンで發行され、毎週ドイツへ持ちこまれ、約一萬人の購讀者を持つてゐた。日和見主義的動搖には決定的な終結が與へられた。

當時における今一つの動搖は、前世紀の七十年代末におけるデューリングによる魅惑であつた。暫くの間ベーベルもまたこの魅惑を分有した。モストがその最も優れたものであつたデューリングの支持者は、『左翼』ぶつて、忽ち無政府主義に轉落した。エンゲルスによるデューリングの理論の激烈な、殲滅的な批判は、黨の多くのグループにおいて是認されず、そして黨の或る大會においてはこの批判を中央機關紙上から遠ざけようとする提議が提出されさへもした。

しかし社會主義のすべての生活能力ある要素は――そして勿論、ベーベルはその首腦であつた――『新しい』理論のすべての頽廢性を急速に理解し、この理論およびあらゆる無政府主義的偏向と訣別した。黨は、ベーベルおよびリープクネヒトの指導の下に、……とを結合することを學んだ。合法的な社會民主黨議會フラクションが、その大多數において、汽船會社補助案への贊成投票に關する有名な問題において日和見主義的立場を取つた時、――非合法的『ゾチアール・デモクラット』はこのフラクションに反對し、そして四週間の鬪爭の後に勝利を占めた。

一八九〇年に、十二年間存在した社會主義鎭壓法は倒壞した。七十年代の半ばにおけるものとほゞ同じ性質の黨の危機が、再び繰り返された。一方ではフォルマールを首腦とする日和見主義者は、削除なしのスローガンと非妥的な戰術とを放棄するために、合法性を利用しようとした。他方では、いはゆる『青年派』は『左翼』ぶつて無政府主義に轉落した。黨のこの危機が非常に短く且つ重大でなかつたとすれば、こゝで多くの功績は二つの動揺に對して最も確乎たる反撃を與へたところの、ベーベルおよびリープクネヒトの分前にまさに屬するものでなければならぬ。

黨にとつては廣さおよび深さにおける急速な成長の時期、プロレタリアートの力の單に政治的

組織のみならず、また勞働組合的、協同組合的、敎育的等々の組織の發展の時期が始まつた。代議士、煽動者、組織者としてのベーベルによつてこれらすべての領域において遂行された巨大な實踐的活動は、數へきれないほどである。まさにこの活動によつてこそベーベルは、勞働者大衆に最も親しい、彼等に最も愛せられる、爭ふべからざる公認の黨指導者の地位を獲得したのである。

ベーベルがそれに最も活潑に參加しなければならなかつたドイツの黨における最後の危機は、いはゆる『ベルンシュタイン主義』であつた。嘗ての正統派マルクス主義者ベルンシュタインは、前世紀末に純日和見主義的、改良主義的見解に到達した。勞働者階級の黨を小ブルジョア的社會改良黨たらしめようとする試みがなされた。勞働者運動の官僚の間に、インテリゲンチャの間に、新しい日和見主義的疫病は多くの支持者を見出した。

この疫病に對して全精力を以て起ち上つた時、ベーベルは、勞働者大衆の氣分と削除なきスローガンのための鬪爭の必要に對する彼等の確乎たる信念とを表現した。ハンノーフェルおよびドレスデンの黨大會における日和見主義者に對する彼の演說は、マルクス主義的見解の固守および

勞働者黨の眞實の社會主義的性質のための闘爭の模範として長く殘るであらう(註五八)。勞働者階級の力の準備と蒐集との時期は、すべての國において、プロレタリアートの世界的解放運動の發展における必然的段階を形成する。何人もベーベルほど浮彫的にこの時期の特殊性と任務とを自らにおいて體現したものはない。自ら勞働者であつた彼は、確乎たる社會主義的信念への道を自ら切り開くことができ、人類社會のヨリよき組織のための資本の賃銀奴隷の大衆的闘爭の勞働者的な指導者、代表者および參加者の模範となることができたのである。

(全集、第三版、第十六卷、五四五—五四九頁)。

マルクスとエンゲルスとの往復書簡

——共產主義の創始者の一人としてエンゲルス——

一九一三年十月に書かれ、一九二〇年十一月二十八日『プラウダ』第二百六十八號に初めて發表されたもの。

科學的社會主義の創始者達の往復書簡のずつと前から豫告されてゐた出版物が、遂に世に現はれた。エンゲルスは出版をベーベルとベルンシュタインとに遺言して讓り、そしてベーベルはその死ぬ少し前に編纂上の仕事の自己の分前を終ることができたのである。

數週前スツットガルドのディーツ書店から出たマルクスとエンゲルスとの往復書簡は、全四卷の大册である。それらの中には、一七四四年から一八八三年に至る巨大な期間におけるマルクスおよびエンゲルスの書簡が總計一千三百八十六通收められてゐる。

編纂上の仕事、即ち個々の時期における往復書簡に對する序文の作成は、エドゥアルト・ベルンシュタインによつて遂行された。當然期待されたやうに、この仕事は技術的方面から見ても、觀念的方面から見ても、不滿足なものである。ベルンシュタインは——彼が極端に日和見主義的見解への彼の悲しくも有名な『進化』の後には——徹頭徹尾革命的精神に貫かれた手紙の編纂を引受くべきではなかつた。ベルンシュタインの序文は一部分は無內容であり、一部分は全く虛僞である——例へばマルクスおよびエンゲルスによつて暴露されたラッサールとシュヴァイツァーとの日和見主義的誤謬の正確な、明瞭な、率直な特徵づけの代りに、『マルクスおよびエンゲルスは常にラッサールに對して正しくはなかつた』(第三卷、XVIII頁)とか、または彼等は戰術についてはリープクネヒトよりもシュヴァイツァーに『近かつた』(第四卷、X頁)とかいふ類の折衷主義的言辭と惡口とが見受けられる。これらの惡口のうちには、日和見主義の隱蔽と粉飾以外に、何等の內容がない。遺憾ながら、その多くの反對者とのマルクスの觀念的鬪爭に對する折衷主義的態度は、現時のドイツ社會民主黨の間に益〻强く普及されつゝある。

技術的方面から見れば、全四卷に一つだけつけられた索引は不滿足に作成されてゐる(例へば、

カウツキー、シュティルリングの名が脱落してゐる)。個々の手紙への註は餘りに貧弱で、ゾルゲがしたやうに、これらの當該の手紙と並べて掲載しないで、編纂者の序文の中に沒入されてゐる、等々。

この往復書簡は法外に高い値段で出版された——全四卷で約二十ルーブル。全往復書簡をこれほど贅澤でなく、もつと手に入り易い値段で出版し、またその外に——勞働者の間に廣く普及させるために——原則的な點において最も重要な箇所の拔萃を發行することができまた發行しなければならなかつたことは疑ひない。

これらすべての出版上の缺點は、勿論、往復書簡に親しむことを妨げるであらう。これは遺憾である、何故なら往復書簡の科學的および政治的價値は巨大であるからである。マルクスおよびエンゲルスはこゝで讀者の前に特に浮彫的にその全身像を現はしてゐる。マルクス主義の極めて豐富な理論的內容は最高度に明瞭に展開されてゐる、何故ならマルクスおよびエンゲルスは手紙の中でその學說の種々雜多の方面に屢〻立ち歸り、(以前の見解に對比して)最も新しい、最も重要な、最も困難な點を力說し且つ解明し——時には共同で討議し且つ互ひに說得し——てゐる

からである。

讀者の前には全世界の勞働者運動の歷史が――最も重要なモメントにおいて、又最も本質的な點において――驚くべく生き生きと過ぎ去る。勞働者階級の政策の歷史は更に價値がある。種々樣々の事について、舊世界および新世界の種々の國において、種々の歷史的モメントにおいて、マルクスおよびエンゲルスは勞働者階級の政治的任務に關する問題提起についての最も原則的なものを討議してゐる。だが往復書簡によつて抱括された時代は、恰もブルジョア民主々義から勞働者階級の分離の時代、獨立的勞働者運動の發生の時代、プロレタリア的戰術および政策の基礎の決定の時代である。種々の國の勞働者運動が、ブルジョアジーの停滯と腐敗との結果、勞働者の指導者が日常の些事に注意を奪はれること等々の結果、如何に日和見主義に惱まされてゐるかを、今日屢々見せつけられるだけに、――プロレタリアートの根本的な變革的目的と、この……目的の見地からのそして日和見主義および革命的言辭への些かの讓步もなしの、戰術上の與へられた任務の異常に屈伸的な決定との最も深刻な理解を示してゐるところの、往復書簡の極めて豐富な材料は、一層價値がある。

全書簡のいはゞ焦點、――發言され且つ討議されてゐる諸觀念の綱全體が歸着するところの中心點を一語によつて規定しようと試みるならば、この語は辨證法であらう。全經濟學をその根本から改造することに、――歴史に、自然科學に、哲學に、勞働者階級の政策および戰術に、唯物辨證法を適用することと――これこそマルクスおよびエンゲルスを何よりも多く關心せしめたことであり、これこそ彼等が齎らした最も本質なものおよび新しいものであり、これこそ彼等が革命的思想の歴史において行つた天才的な前進である。

我々は以下の叙述において、往復書簡の概觀の後、マルクスおよびエンゲルスの最も興味ある注意および考察の大要を與へようと思ふ、しかし決して書簡の全內容を汲み盡さうとは考へてゐない。

一　概　觀

往復書簡は一九四四年二十四歲のエンゲルスのマルクス宛の手紙を以て始まつてゐる。ドイツ

における當時の情勢が著しく浮彫的に現はれてゐる。第一の手紙は一八四四年九月末のもので、そこにエンゲルスの家族が住んでをり且つそこで彼が生れたバルメンから發送されてゐる。エンゲルスは當時まだ滿二十四歳に達してゐなかつた。彼は家庭の環境内で煩悶し、離れ去らうと努めてゐる。父は暴君で、宗敎的な工場主で、息子が政治的集會のために奔走することや彼の共產主義的信念のことで憤慨してゐる。僕が非常に愛してゐる母がゐなかつたら、――とエンゲルスは書いてゐる、――僕の出發までに殘つてゐる數日間さへも僕は我慢できないであらう。君は想像することができないだらう、――と彼はマルクスに訴へてゐる、――如何に下らない配慮　如何に迷信的な疑懼がこの家庭内で僕の出發に對して向けられてゐるかを(註五九)。

エンゲルスはバルメンにゐた間、――或る戀物語がなほ暫くの間彼をそゝへ引き留めたのであるが――彼は父に讓步して、二週間工場の事務所へ仕事に通つた(彼の父が工場主であつた)。『掛値商賣はあまりに厭はしい、――と彼はマルクスに書き送つてゐる、――バルメンはあまりに厭はしい、時間の浪費はあまりに厭はしい、そしてたゞブルジョアたるのみならず、工場主たること、卽ちプロレタリアートに積極的に對抗するブルジョアたることは、特にあまりに厭はし

い』と。僕は、――とエンゲルスは續けてゐる、――勞働者階級の狀態に關する僕の著書の仕事で自ら慰めてゐる、と。（この書物は、周知の如く、一八四五年に出版され、世界の社會主義文獻の中で最良の著作の一つである）。『物を書かないでゐれば、共産主義者でありながら外的事情のためにブルジョアであり掛値商賣の家畜であることも或ひはできよう。けれども大仕掛な共産主義の宣傳をやりながら同時に掛値商賣や工業を營むことは不可能だ。復活祭には僕はこの地を去る。その上に全く極端なキリスト敎的＝プロシャ的家庭のこの沈滯した生活――それはやはりきれない。かうやつてゐたら僕はドイツ的な俗物となり、共産主義の中へ俗物主義を持ちこむことになるかも知れない』。若きエンゲルスはかう書いた。一八四八年の革命の後生活は彼をして父の事務所へ歸り、そして多年の間『掛値商賣の家畜』となることを餘儀なくさせたが、彼はこの場合にも毅然として踏み止まり、キリスト敎的＝プロシャ的環境ではなくて、全く異つた同志的環境を作り出すことができ、そして全生涯にわたつて『共産主義の中へ俗物主義を持ちこむこと』に對する無慈悲な敵となることができた。

一八四四年のドイツの田舍における社會生活は、一九〇五年の革命に先立つ二十世紀の初めに

おけるロシアの社會生活に似てゐる。すべての人々が政治に熱中し、すべての人々が政府に對する反對派的憤激で沸騰し、牧師は無神論の故に青年を叱りつけ、ブルジョア的家庭の子供達は『召使や勞働者に對する貴族的待遇』の故に兩親に對して騷ぎ立てゝゐる。

一般的な反對派的精神はすべての者が自ら共産主義者と宣言することのうちに表現されてゐる。『バルメンでは警部が共産主義者だ』とエンゲルスはマルクスへ書き送つてゐる。僕はケルン、デュッセルドルフ、エルバーフェルドへ行つた――いたるところで一歩毎に共産主義者にぶつかる！『ゼールと稱する極めて猛烈な共産主義者、諷刺畫家兼新米の歷史家が二ケ月の後にパリへ行く、僕は君への紹介狀を持たせるであらう、この男は彼の熱情的な氣質、彼の畫道および音樂好きによつて君の氣に入るであらうし、また諷刺畫家として大いに役立つであらう』。

『このエルバーフェルドでは不思議なことが起つてゐる。我々は昨日（一八四五年二月二十二日附の手紙）この町の一流の旅館の大廣間で我々の第三回の共産主義者の會合を催した。第一回は四十人、第二回は百三十人、第三回は少くとも二百人だ。全エルバーフェルドおよびバルメンは、たゞプロレタリアートを除いては、貨幣貴族から小商人に至るまで、殘らず代表された』。

エンゲルスは、文字通りに、から書いてゐる。ドイツにおいては當時、プロレタリアート以外は、すべての人が共產主義者であつた。共產主義はすべての人、そして何よりも多くブルジョアジーにおける反對派的氣分の表現形態であつた。『この世の何事にも興味を感じなかつた、最も愚劣な、最も怠惰な、最も俗物的な民衆が、共產主義に殆ど夢中になり始めてゐる』。當時における共產主義の主要な說敎者は我國のナロードニキ、『社會革命黨員』、『國民社會主義者』等々の如き人々、卽ち本質において、多かれ少かれ政府に對して憤怒してゐる、善意のブルジョアであつた。

そしてかゝる環境において、無數の似而非社會主義的流派および分派の中で、エンゲルスは、熱烈な革命家ではあるが劣惡な共產主義者たる多くの善良な人々との分裂を恐れることなしに、プロレタリア的社會主義への道を切り開くことができた。

一八四六年。エンゲルスはパリにゐる。パリはこの時政治と種々の社會主義理論の討議とによつて沸騰してゐる。エンゲルスは貪るやうに社會主義を硏究し、カベー、ルイ・ブランその他の優れた社會主義者と親しく識り、種々の編輯部およびグループを駈けまはつてゐる。

彼の主要な注意は最も重大で最も普及されてゐた當時の社會主義學說——プルードン主義に向けられてゐる。そしてすでにプルードンの『貧困の哲學』の出版（一八四六年十月。マルクスの答——有名な『哲學の貧困』は一八四七年に出版された）前に、エンゲルスは無慈悲な毒舌と注目すべき深刻さとを以てプルードンの基本的觀念——これは特に當時ドイツの社會主義者グリューンが擔いでゐた——を批判してゐる。英語（マルクスはそれをずつと後に我がものにした）とイギリスの文獻との優れた知識は、エンゲルスをして直ちに（一八四六年九月十八日附の手紙）、評判倒れのプルードンの『勞働市場』のイギリスにおける破產の實例を指摘せしめるのである。プルードンは社會主義を侮辱してゐる、——とエンゲルスは憤慨してゐる、——プルンドンにあつては、勞働者が資本を買占めなければならないこととなる、と。

二十六歲のエンゲルスは『眞正社會主義』を無遠慮に破壞してゐる——この表現は、『共產黨宣言』よりもずつと以前に、一八四六年十月二十三日附の彼の手紙のうちに見受けられる、その場合彼はグリューンをその主要な代表者と呼んでゐる。『反プロレタリア的、小ブルジョア的、俗物的』學說、『空虛な言辭』、種々の『全人類的』傾向、『「粗野な」共產主義（Löffel-Kommunismus

――文字通りには「匙共產主義」又は大食共產主義）に對する迷信的恐怖』、人類を『幸福にする平和的計畫』――これが先マルクス的社會主義のすべての形態に對するエンゲルスの批評である。

『二晩に亘つて――とエンゲルスは書いてゐる――我々はプルードン主義について論爭した。グリューンを先頭にして、殆どすべての者が僕に反對した。僕が證明しなければならなかつた主要事は、……の必然性であつた』（一八四六年十月二十三日附）（註六〇）。到頭僕は憤慨した――そして自己の反對者達をば、彼等が共產主義に對して直接反對することを餘儀なくされるまで追ひつめた。僕は、我々は共產主義者であるか否か、といふ問題について投票を要求した。グリューン一派は非常に憤慨して、彼等は『人類の幸福』を討議するために集まつたのであつて、共產主義とは抑々何であるかを知る必要がある、と斷言し始めた。そこで僕は問題の本質からの遁辭を許さざらんがために、最も簡單な定義を彼等に與へた。僕は――とエンゲルスは書いてゐる――共產主義者の意向を次のやうに規定した、（一）プロレタリアの利益をブルジョアジーのそれに反對して固守すること、（二）……とによつてこれを實現すること、（三）……の外にはこの目的の實現手段を認めないこと（これは一八四八年の革命の一年半前に書かれたものである）。

討論は、集會がグリューン派の二票に對する十三票でエンゲルスの定義を採用したことによつて、終結した。この集會には約二十人の指物師=手工業者が出席した。かくてパリにおいて六十七年前にドイツの社會民主勞働黨の基礎が据ゑられたのである。

一年を經て、一八四七年十一月二十四日附の手紙において、エンゲルスは彼によつて作成された『共產黨宣言』の草案についてマルクスに通知して、就中、以前に豫定されてゐた問答示教的形式に反對してゐる。『僕は――とエンゲルスは書いてゐる――共產主義とは何ぞやから始めて、それから直ちにプロレタリアートへ移る――その發生史、以前の勞働者との差異、プロレタリアートとブルジョアジーとの對立の發展、恐慌、諸結果』。『最後に共產主義者の黨の政策』。

全世界に流布されたところの、そして今日に至るまですべての基礎において眞實であり、恰も昨日書かれたかのやうに、生き生きとし且つ緊切であるところの著作の第一の草案に關するエンゲルスのこの歷史的な手紙は、マルクスおよびエンゲルスの名が近代社會主義の創始者の名として並び稱せられるのが正しいことを、明瞭に示してゐる。*

（全集、第三版、第十七卷、二九一―三四頁）。

＊論文はこゝで切れてゐる。編輯者。

註

（註一）論文『カール・マルクス』は、スウィスにおいて、一九一四年七月（戰前）レーニンによつて執筆に着手され、十一月（十七日）に書き了へられた。論文はグラナート百科辭典のために書かれたものである。論文を出版所へ送付するにあたつて、レーニンはそれに添狀を附してゐるが、この手紙はレーニン研究所によつてＷ・Ｉ・レーニンの小册子『マルクス、エンゲルス、マルクス主義』、三―四頁（レーニン研究所版、一九二五年）において初めて發表された。（譯者はこの手紙を全集第二十九卷から、同じ論文に關する他の一通と共に、附錄として本書に譯載した）。

レーニンの論文は（Ｗ・イリーンの署名で）不完全な形で、グラナート辭典第二十八卷（第七版）のマルクスの項（二一九―二四三頁）に、別頁における附錄マルクス文獻目錄（二四三^{1}―二四六^{1}頁）と共に、掲載された。

原稿を辭典に掲載されたテキストと照合してみると、辭典においては、レーニンによつて指摘されてゐる『プロレタリアートの階級鬪爭の戰術』に關する章のみではなくて、『社會主義』に關する章も（この章は一九二六年に辭典の第四十卷に掲載された）削除されてゐることが分る、檢閱的および編輯的性質を有する他の多くの省略と變改とを勘定に入れないとしても。

この版（全集、第三版のこと―譯者）においては、一切の省略なしに、レーニンの原稿のテキストが複製されてゐる。たゞ明瞭な誤謬の訂正が許されてゐるにすぎない。（序ながら、全集、第一版においては、辭典のテキストのまゝである―譯者）。

一九一八年ペテログラードの『プリボイ』出版所は、マルクスに關する論文を單行小册子として、論文が辭典に掲載されたまゝの形で、五月十四日附のレーニンの序文を附して、出版した（譯者はこの序文を全集第二十二卷から本書に譯載しておいた）。

（註二）『ロシアの學校』――學校および家庭のための一般的敎育雜誌。編輯者＝出版者――ヤー・グーレヴィッチ。雜誌は敎育のすべての領域における現代敎育學の諸問題を廣く解說した。雜誌『ロシアの學校』には、一九一一年第七―八號に、エヌ・カー・クルプスカヤの論文『現代の敎育』が揭載された。

（註三）『自由敎育』――月刊敎育雜誌、ロシア並びにアメリカの新しい敎育學思潮を主張した。一九〇七年から一九一七年までイー・ゴルブノワ＝ポサドワの編輯の下に、エル・コンシナ出版所から發行された。エヌ・カー・クルプスカヤは學校および現代敎育の諸問題について多くの論文を雜誌へ寄稿した。

（註四）レーニンの原稿では『一九一二年』、小冊子の印刷されたテキストでは一九一三年となつてゐるが、いづれも誤りで、論文が一九一四年に書かれたことはレーニンの手紙によつて確證されてゐる。

（註五）レーニンは一八五六年四月十六日附エンゲルス宛のマルクスの手紙を引用してゐる（三月十六日とあるは誤記である）。この引用の原文は次の如し、„The whole thing in Germany wird abhängen von der Möglichkeit to back the Proletarian revolution by some second edition of the Peasant's war. Dann wird die Sache vorzüglich“.

（註六）『勞働者（ラボートニク）』――一八九六―一八九九年外國において『勞働解放』團の編輯の下に出版された『ロシア社會民主々義者同盟』の不定期的論集。

ウラディミール・イリーチは『勞働者』の出版組織に活潑に參加した。Z・グリシン＝コペリゾンが述べてゐるやうに（『G・W・プレハーノフとP・B・アクセリロッドとの往復書簡』、第一卷、一一三頁、一八九四―一八九五年の冬ペテルブルグにおいて、ロシアの種々の地方の社會民主々義者の協議會が催され、そこにはW・I・レーニン、G・M・クラジジャノフスキー、J・I・スポンティ、J・M・リホフスキー、Z・グリシン＝コペリゾンが出席した。協議會はグループ生活からアジテーションへ移行する必要といふ問題につ

いて討論した後、外國において勞働者のための通俗的文獻の出版事業を開始する決議を採用した。そしてこの目的を以てスポンティとW・I・レーニンとが一八九五年『勞働解放』團と協議のため外國へ旅行を企て、その結果『勞働解放』團は論集『勞働者』を出版することになつた（一八九五年におけるW・I・レーニンの外國旅行の中止については、P・B・アクセリロッドの談話參照――『文獻（ドクメンツィ）』、第八號、四八八頁）。

『勞働者』は三卷六號發行された。その外にリーフレットの『勞働者』が發行され、そのうち第一―八號（一八九六―一八九八年）は同一の編輯で發行されたが、最後の第九―十號は、『勞働解放』團が『ロシア社會民主々義者同盟』の出版物の編輯を拒絶した後、一時的編輯の下に發行された。

（註七）『勞働者（ラボートニク）』第一―二號に掲載された追悼文『フリードリヒ・エンゲルス』は、無條件にウラディミール・イリーチの筆になるものである。このことは、論文のスタイルによつても、それがロシアから編輯部へ屆けられたことによつても、わかる（『G・W・プレハーノフとP・B・アクセリロッドとの往復書簡』、第一卷、P・M・プレハーノフ版、モスクワ一九二五年、一―一八頁參照）。そしてロシアにおいては、周知の如く、ウラディミール・イリーチは、同じ表題の論文を一八九五年に『ラボーチェエ・デーロ』のために書いた。『ラボーチェエ・デーロ』の三人の編輯者の一人、G・M・クリジジャノフスキーは『勞働者』の論文がウラディミール・イリーンに屬することを力說してゐる。

（註八）„Bernstein und das Sozialdemokratische Program. Eine Antikritik. Stuttgart, 1899"（『ベルンシュタインと社會民主黨綱領、反批判、スッツトガルト一八九九年』）は、一八九九年カウツキーによつて、同年出版されたベルンシュタインの有名な著書„Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie"（『社會主義の諸前提と社會民主黨の任務』）への答として書かれたものである。保

存されてゐるレーニンの評論の原稿においては初めの數行が缺けてゐる。――(譯註)レーニンのこの評論の表題はドイツ語で書かれてゐる。

(註九) 雜誌 „Le Mouvement Socialiste“ 第八號一八九九年五月一日、四五三―四五八頁におけるアントニオ・ラブリオラの論文 „A Propos du livre de Bernstein“(『ベルンシュタインの著書について』)。

(註一〇) オイゲン・デューリングの著書 „Kritische Geschichte der Nationalökonomie und des Sozialismus“, Leipzig, 1879. S. XIV+574(『國民經濟學および社會主義の批判的歴史』、ライプチッヒ一八七九年)。

(註一一) ドイツの經濟學教授ユリウス・ヴォルフの著書 „Sozialiemus und kapitalistische Gesellschaftsordnung“, Stuttgart, 1892, S. XIX+620(『社會主義と資本主義的社會制度』、スツットガルト一八九二年)。

(註一二)『ヴェーストニク・エヴロープィ』、一八七七年第九號、六四―一〇五頁所載J・ジュコフスキーの論文、『カール・マルクスと資本に關する彼の著書』。

(註一三)『ルッスコエ・ボガーツトヴォ』、一九八三年第十號、一八九九年第一、二、七(十)號所載N・K・ミハイロフスキーの論文、『文學と生活』(N・ミハイロフスキー全集、第七卷參照)。

(註一四)『アテーチェストヴェンヌィエ・ザピースキ』、一八七七年第十號、三二一―三五六頁におけるN・K・ミハロフスキーの論文、『J・ジュコフスキーの法廷におけるカール・マルクス』。

(註一五) カール・マルクス、『經濟學の若干の命題の批判』、A・A・マヌィロフ監修、P・P・ルミャンツェフのドイツ語からの飜譯、W・ボンチ=ブルエヴイッチ出版、モスクワ一八九六年、XII+163。

(註一六) L・ブーフの著書 „Ueber die Elemente der politischen Oekonomie“, I-te. „Intensität der Arbeit. Wert und Preis der Waren“, Leiptig, 1896.

S. 240（『經濟學の諸要素について』、第一卷、『勞働の强度、商品の價値と價格』、ライプチッヒ一八八六年、二四〇頁）

（註一七）S・ブルガーコフの論文『農業の資本主義的進化の問題によせて』（『ナチャーロ』、一八九九年第一―二號、第二編、一―二一頁、第三號、第二編、二五―三六頁）。

（註一八）ベルンシュタインの著書に對するS・シュタインベルグの評論『史的唯物論に關する新著』（『ジーズニ』、一八九九年、第三號、三五八―三七一頁）。

（註一九）コルブの著書 „Handbuch der vergleichen der Statistik der Völkerzustand und Staatenkunde", Leipzig, 1875. S. XXIV+886（『國民の地位の比較統計および國家學便覽』、ライプチッヒ一八七五年）。――（譯註）ウィルヘルム・コルブはドイツ社會民主黨員で、修正主義者。

（註二〇）『ピックウィック・クラブ』――チャールズ・ディッケンスの最も初期の著作『ピックウィック・ペーパーズ』の主人公の屬したクラブ。

（註二一）『L・クーゲルマン宛のマルクスの書簡』、『ノイエ・ツァイト』編輯部（カウツキー）の序文、M・イリーンによるドイツ語からの飜譯、一九〇七年出版、N・レーニンの監修および序文。――同じ書簡集は『科學的社會主義文庫』版としても出版された、即ち『インターナショナル會員クーゲルマン宛のカール・マルクスの書簡』、K・カウツキーの序文、A・ホイフバルグによるドイツ語からの飜譯、一九〇七年。

（註二二）エンゲルスの著書 „Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft (Anti-Dühring)". Dritte durchgesehene und vermehrte Auflage. Stuttgart, 1894. S. XX+354（『オイゲン・デューリング氏の科學の變革』（反デューリング論）、第三增訂版、スツットガルト一八九四年）はドイツ語第三版からロシア語へマルトフ（J・O・ツェデルバウム）によつて次の表題の下に飜譯された、『哲學、經濟學、社會主義（デューリングによつて行はれた科學における變革）』、

ドイツ語第三版からの飜譯、ペテルブルグ、W・ヤコヴェンコ出版、一九〇四年、XXIV+478+11頁。書物には譯者の名前がない。飜譯は同じ形で一九〇五年と一九〇六年とに重刷された。一九〇七年若干訂正された第四版が出版された。今日では多くのソヴェート版がある、例へば、『モスクワ勞働者』版、一九二二年。

（註二三） ウラディミール・イリーチはプレハーノフの論文『我々の地位』（『社會民主々義者の日記』、第三號、一九〇五年十一月）を問題にしてゐる。この論文はプレハーノフ全集、第十三卷、國立出版所一九二六年、三二九頁に收錄されてゐる。

（註二四） レーニンは、一八七〇年九月九日ロンドンにおいてマルクスによつて書かれた、佛獨戰爭に關する第一インターナショナル總務評議員の第二宣言を問題にしてゐる（カール・マルクス、『フランスにおける內亂』參照）（邦譯、全集、第七卷の三、一七三頁）。

（註二五）『ゾルゲ宛書簡集』のロシア譯は二つの異つた出版所から出版された。一つは一九〇七年におけるP・G・ダウゲ版、『F・A・ゾルゲその他宛のJ・P・ベッカー、J・ディーツゲン、F・エンゲルス、K・マルクスその他の書簡』、ポリティクスによるドイツ語からの飜譯、附F・A・ゾルゲ、オイゲン・ディーツゲンの書簡および小傳、N・レーニンの序文。ペテルブルグ、XXIV+4[illegible]5頁。他のものは一九〇八年『オブシチェストヴェンナヤ・ポリザ』出版部版、『F・ゾルゲその他宛のK・マルクス、F・エンゲルスその他の書簡』、G・コトリャールおよびM・パニンによるドイツ語からの飜譯、P・アクセリロッド監修および序文。附錄、フランツ・メーリングの論文、（一）『ゾルゲの往復書簡』および（二）『マルクスおよびエンゲルスの傳記のための新資料』。ペテルブルグ、XXXXI+517頁。後の版はメンシェヴィキのものである。

ウラディミール・イリーチの序文のうち、『一八八九年にイギリスでは』云々以下の部分（本譯書、一八三

頁）は、『ナーシエ・エホー』第十三號、一九〇七年四月二十一（八）日號に、次のはしがきを附して掲載された。『近々P・ダウゲ出版所からマルクスおよびエンゲルスのアメリカに居住してゐた彼等の友人および戰友ゾルゲ宛の往復書簡集が出版される。この出版物によつて提供される興味に鑑みて、我々はこゝに、ロシアにおける期待されてゐる革命に對するマルクスおよびエンゲルスの態度に獻げられた、本書のロシア譯への序文の一部文を再掲することにしよう。フランス革命の意義およびドイツにおける可能的な革命に關するエンゲルスの二つの特徴的な言葉を以て始めよう』。

一九一三年に『書簡集』は同じP・ダルゲ版で再版を出版したが、W・イリーチの序文は省かれてゐる。

（註二六） W・イリーチによつて言及されたF・メーリングの論文は、一九〇七年版には載せられなかつた。それは一九〇八年のメンシェヴィキの版の附錄となつてゐる。

（註二七） 『ソヴレメンナヤ・ジーズニ』――一九〇六年九月から一九〇七年三月まで發行された月刊雜誌。全部で五冊、そのうち二册は倍大號であつた。カデットとのブロックを擁護した右翼メンシェヴィキの雜誌。一九〇七年一月まで、雜誌は編輯者＝發行者たるW・D・マチンスキー（W・メッチ）の署名で發行され、この一月以後は發行者A・I・ゲルラスおよび編輯者P・K・イヴァノフの署名で發行された。G・W・プレハーノフは殆ど每號執筆し、彼の外にL・マルトフ、H・ラッポポルト、L・ボリソヴィッチ、M・フェノメノフ、I・フールヴィッチ、B・アプテクマンその他が執筆した。

『アトクリーキ』――一九〇六年および一九〇七年に出版されたメンシェヴィキの論文集、最初の論文集は『アトクリーキ』といふ表題で出版され、その他のものは『アトクリーキ出版部』のものである。全部で三册發行された。論文集には最も著名なメンシェヴィキ、卽ちL・マルトフ、F・ダン、D・コルツェフ、P・マスロフ、J・チャツキーその他が執筆した。

（註二八）『社會民主聯盟』——G・M・ハインドマンのイニシアティヴによつて、一八八三年に『民主聯盟』、即ち『半ブルジョア的、半プロレタリア的性質を有する種々のイングランドおよびスコットランドの急進的團體の聯合』（マルクス、一八八一年）から組織されたものである。社會民主聯盟は週刊雜誌 "Justice"（『正義』）を發行した。一八八五年組織の日和見主義に不滿なグループは社會民主聯盟から分離して（W・モリス、B・バックス、ドクトル・エーヴリングおよびその夫人エレアノル・マルクス・エーヴリング）、『社會主義者同盟』を組織した。一八八九年後者はインターナショナル大會に參加し、マルクス主義者を支持したが、社會民主聯盟はポシビリストを支持した。一八九〇年『社會主義者同盟』は消滅したが、社會民主々義的思想に近づいてゐた組織員はすでに一八八八年にそれを見棄てゝゐたのである。

社會民主聯盟は選擧鬪爭において自己の候補者を立てゝ、獨立的に立ち現はれようと試みたが、一八八五年にはひどい敗北を喫した。

一九〇〇年には『勞働黨』に加入したが、『勞働黨』を社會民主々義的基礎の上に置かうとする自己の試みが容易に成功しないことを確信して、間もなく脫退した。一九一二年には他の社會主義グループと共に英國社會黨を組織したが、それは大戰中に左右兩翼に分裂した。右翼（ハインドマン、アーヴィングおよびバックスを首領とするところの）は英國社會黨から脫退して、國民社會黨を組織して『勞働黨』に參加した。左翼は一九二〇年にスコットランドの社會主義勞働黨と共に共產黨を組織した。

（註二九）ウラディミール・イリーチの引用句は一八八六年十一月二十九日附ゾルゲ宛のエンゲルスの手紙から取られてゐる。"Es ist ein Credo, keine Anleitung zum Handeln".（邦譯、全集、第二十四卷、二二三頁）。

（註三〇）勞働騎士團——一八六〇年アメリカの裁縫工ウリア・スティヴェンソンによつて設立された勞

働者團體。騎士團の規約によれば、少くとも團員の三分の二は勞働者たることが要求された。(一)辯護士、(二)醫師、(三)銀行家、(四)酒精飲料の製造者および販賣者は加入を許されなかつた。騎士團の先頭には頭梁が立ち、十二人の書記より成る書記局がこれを援助した、約九十年間騎士團は秘密であつて、マッソンの如く虚僞の噂にさらされてゐたが、やがて合法化し、機關誌 "Journal of Knight of Labour" (『勞働騎士團雜誌』)を發行し始めた。『勞働騎士團』は地域的に組織され、忽ち勢力を增大した。九十年代の中頃の隆盛期には、主として雜役夫、手工業者および農民より成る五十萬以上の會員を持つてゐた。しかし一九〇〇年代の中頃および終りに『勞働騎士團』はその勢力を失墜し始めた。會員數がひどく減少し、若干の資料によれば六萬五千人乃至十萬人となつた。一八九五年騎士團は分裂した。その中からいはゆる『獨立勞働騎士團』やまた『社會主義勞働同盟』を組織した有名なグループが分離した。『勞働騎士團』は鬪爭手段の中にボイコットとストライキとを提唱したけれども、事實上はそれらに訴へることなく、そのすべての注意を協同組合活動、勞働共濟、勞働立法の宣傳等々に獻げた。騎士團は多くの自己の商店を持つてゐたが、そこでは組合によつて生産された生産物が販賣された。

(註三一) "Zukunft" (『未來』)——ドイツ社會民主黨の日和見主義的グループの雜誌。ゴータ大會の決議によつて創刊された。ベルリンにおいて一八七七年十月一日以後月二回發行された。ドイツ社會民主々義者のラッサール派およびデューリングとの妥協は、明瞭に表現された修正主義的印象を雜誌に與へた。雜誌の發行者は改良主義者たり且つデューリングの信奉者たるカール・ヘヒベルグであつた。シュラムとベルンシュタインとが雜誌に協力した。マルクスおよびエンゲルスはかゝる出版物に參加することを拒絶した。雜誌は一八七八年まで存在したが、『社會主義鎭壓法』に基いて禁止された。禁止された『ツークンフト』の代りに、ヘヒベルグによつて二つの新しい科學的定期

刊行物が創刊された。即ちライプチッヒにおける ,,Staatwirtschaftliche Abhandlungen" (『政治經濟研究』)と、チューリッヒにおいてルードウィッヒ・リヒターの匿名の下に出版された ,,Jahrbuch für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik" (『社會科學および社會政策年報』)とである。

(註三二) 『ゾチアール・デモクラット』——ドイツ社會民主黨の機關紙。スウィス(チューリッヒ)において發行され始めた。創刊號は一八七九年九月二十八日 ,,Der Sozialdemokrat. Internationales Organ der Sozialdemokratie deutscher Zunge" (『ゾチアール・デモクラット、ドイツ社會民主黨國際機關紙』)といふ名稱の下に發行された。

一八八〇年『ゾチアール・デモクラット』は黨の公けの機關紙と認められた。

『ゾチアール・デモクラット』は社會主義鎭壓法の實施中は、ゴータ綱領で認められた革命的原則および戰術を固守し、黨の卒伍の徵集および教育において顯著な役割を演じた。

『ゾチアール・デモクラット』の最初の編輯者はフォルマールであつたが、一八八〇年の秋から十年間は、エドゥアード・ベルンシュタインであつて、彼はエンゲルスの指導の下に新聞を編輯した。

一八八〇年ドイツ政府の代理人＝プロヴォカートルの破廉恥な活動を『ゾチアール・デモクラット』が暴露したことに關聯して、ベルンシュタインその他の新聞におけるドイツ社會民主黨の代表者達がスウィスの國境から追放された。何等かの外部的壓迫を避けるために、『ゾチアール・デモクラット』は一八八八年十月からロンドンで發行され始めた。

一八九一年以後、,,Berliner Volksblatt" が『ゾチアール・デモクラット』の地位を占め、後者は『フォールウェルツ』(,,Vorwärts")と改題された。

(註三三) 禁止された雜誌『ツークンフト』の代りに、ルードウィッヒ・リヒターといふ匿名の下にカール・ヘヒベルグによつてチューリッヒにおいて發行さ

れた『社會科學および社會政策年報』における論文、„Rückblicke auf die Sozialistische Bewegung in Deutschland. Kritische Aphorismen“(『ドイツにおける社會主義運動の回顧、批判的小品』)が問題になつてゐる(„Jahrbuch für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik“ herausgaben von Ludwig Richter. Erster Jahrgang, Erste Hefte, 1879. Zürich. S. 75-96 參照)。この論文の著者はヘヒベルグ、シュラムおよび部分的にはベルンシュタインであつた。論文は革命的煽動の方法を鋭く批判し、社會民主黨のために支配階級の多數の仲間を徴募し、後者の正義の感情に呼びかけること等々を勸めたのである。この論文に對してマルクスおよびエンゲルスはベーベルおよびブラッケ宛の手紙において抗議し、若し黨がそれを一般に我慢するつもりなら、かゝる見解が少くとも指導的中央部において發言せられざらんことを要求した。

(註三四) 一八八四年末ビスマルクは、ドイツ植民政策の發展のために、東アジア、オーストラリアおよびアフリカとの定期航路の開設案を提出した。この航路の開設のための費用はビスマルクによつて四百四十萬マルクと計算されてゐた。國會における公けの討論以前にこの汽船會社補助案は、社會民主黨國會フラクションを少數派と多數派とに分裂させた。そして多數派はエンゲルスが一八八四年十二月三十一日附ゾルゲ宛のその手紙において辛辣に指摘してゐるやうに、『工業のために汽船會社補助案に贊成投票しよう』と欲した。アウエル、ディーツ、フロム、グリレンベルガーより成る代議士の多數派は、フラクションにおいて少數派を代表したリープクネヒト、ベーベルおよびフォルマールに反對して、汽船會社補助案に贊成投票することに決し、國際交通の發展は、平和のために貢獻することによつて、プロレタリアートの利益になる、と主張した。一八八五年三月國會における討論の時には、多數派はその『小ブルジョア的偏見』を明瞭に現はし、その結果東アジアおよびオーストラリア線の開設に贊成し、そしてアフリカ線およびサモア線に

對する承認には、新船をドイツの造船所において建造すべきであるといふ要求を條件として附加した。

國會が多くの戰術的考慮によつてこの最後の提議を却けるや、漸くフラクションの多數派は前記の諸航路の補助案に全體的に反對投票した。

フラクションの多數派の態度は『社會主義鎭壓法』の出現以來極めて激烈な討論を喚び起し、多くの社會民主黨グループは多數派の立場を鋭く批判した。社會民主黨の機關紙『ゾチアール・デモクラット』もまた多數派に對して同じ態度を取つた。意見の相違は非常に激しく、殆ど黨內に分裂を喚び起さんばかりであつた。

（註三五）『ポシビリスト』――フランス社會主義の一流派。一八七九年マルクス主義者（『コレクティヴィスト』）の思想的影響の下に開かれた、マルセーユにおける勞働團體の大會は、社會主義的勞働者黨の設立に關する決議を採用した。一八八〇年に採用された黨の綱領は、マルクスおよびエンゲルスによつて編輯された。一八八二年黨は二つの分派に分裂した、卽ちゲード派（ゲード、ラファルグ）――それはプロレタリアートによる國家權力の獲得（プロレタリアートの獨裁）をプロレタリアートの獨立的革命的政策の目的とし、ブルジョアジーとの協同を拒絕し、黨內における組織的集中主義を主張した――と、ポシビリストまたはブルース派（ブルース、マロン）、穩和派、改良派――それはマルクス主義とプルードン主義とを結合し、プロレタリアートの社會主義的および共產主義的目的を沫殺し、都市自治體へ黨の代表者を入れることに法外に大なる意義を認め、たゞ『可能な』（possible）ことだけを要求すべきことをプロレタリアートに勸めた（こゝから新しい黨の名稱が生じた）――とである。

W・イリーチが述べてゐる二つの大會は、一八八九年パリにおいて同時に開催された。そのうちの一つ、マルクス主義者によつて開かれたものは、七月十四日午前九時 „Salle Petrelle“ において開會された。大

會には次の國々が代表された——フランス二百二十一名、ドイツ八十一名、イギリス二十二名、ベルギー十四名、オーストリー十名、ハンガリー三名、オランダ四名、ロシア六名、スウェーデン二名、ノルウェー三名、デンマルク三名、スウィス六名、ポーランド五名、スペイン二名、ルーマニア五名、アメリカ五名、ボヘミア一名、ブルガリア一名、アルゼンチン一名、フィンランド一名。總計代議員三百九十五名。マルクス主義者の大會の最初の數日は社會主義の發展史に關する報告にあてられた。報告者は、ベーベル、ラヴロフとプレハーノフ、ゲード、モリスとケア・ハーディ、アドラーその他であつた。しかし討論の主要問題は、勞働保護に關する國際的立法の問題であつた。大會は七月二十日閉會された。他の一つの大會は、フランスの社會民主々義者の改良派、『ポシビリスト』によつて開催された。それは一八八九年七月十五日に開會され、外國人の代議員は僅かに八十二名で、殘りはフランス人であつた。討論の主要な題目は同じく勞働保護の問題であつた。その外に大會はインターナショナルの再組織に注意を拂つた。

（註三六）　フェビアン——『フェビアン協會』——社會主義の基礎とそれへ移行する方法との理論的研究のために一八八四年に設立された。『フェビアン』の名稱は、決定的な戰鬪を避ける、日和見主義戰術によつて有名なローマの司令官ファビウス・クンクタートル（『愚圖々々する人』）の名前に基く。フェビアンは階級鬪爭を否認し、マルクス經濟學の幾多の命題を承認せず、そして社會主義への移行は、資本主義社會を徐徐に社會主義へ變革するところの小さな改良によるべきものと考へた。彼等は自治體政治の實際問題に特殊な注意を拂つた（『自治體社會主義』）。協會は、勞働者大衆と殆ど何等の聯關をも持たない、少數の會員を持つてゐたが、その構成（敎授、著述家、自由主義的社會事業家等々）のお蔭で、また、協會に巨大な文獻的および宣傳的活動を展開することを許したところの、ブルジョア仲間とのその聯關によつて、イギリス

の社會思想に大きな影響を與へた。協會の財政的および思想的支持の下に、ロンドン經濟學校およびラスキン紀念オクスフォード勞働者大學が設立された。協會の先領には、バーナード・ショー、シドニーおよびビアトリス・ウェッブ、H・G・ウェルスが立つてゐた。一九〇〇年協會は『勞働黨』へ加入した。

（註三七）　フランス社會黨の農業綱領の新しい理由書を通過した、一八九四年九月のナント黨大會におけるラファルグの演説が、問題になつてゐる。起草者達は、新しい理由書において、事實上有産農民を味方に引きつけるやうに農業綱領を定式化しようと試みたところの、一八九二年のマルセイユ大會で採用された綱領以上に進んでゐる。エンゲルスは大會の後、直ちに、『ノイエ・ツァイト』一八九四年第十號における論文を以てこの理由書に激しく反對した。論文はロシア語に譯されてゐる。卽ち『フリードリヒ・エンゲルス、フランスおよびドイツにおける農民問題』、W・ペロワ譯、G・プレハーノフ監修および序文、オデッサ一九〇五年（邦譯、全集、第十三卷所收）。

同じ手紙においてエンゲルスはフランクフルト黨大會におけるフォルマールの演說を問題にしてゐる。

（註三八）　ドゥカゼヴィーユの炭坑夫のストライキは一八八六年一月に起り、忽ち炭坑地方全體を卷きこんだ。ストライキは議會における多くの演說を喚び起し、そして新聞 „Cri du Peuple“（『人民の叫び』）は罷業者のために義捐金募集を發表し、それがために編輯者達は處罰された。數週後サンス地方で補缺選擧が行はれ、そして勞働者は抗議として編輯者達を代議士および市會議員候補に立てた。そして前者は選擧において十萬八十二票を獲得した。急進黨は勞働者の候補者を支持しないで、自己の候補を立て、それは十四萬六千票を獲得した。

パリおよび地方において多くの集會を喚び起したドゥカゼヴィーユのストライキの結果、急進黨は今や公然と自らを暴露し、そして政府の支持と罷業者に對する壓迫との政策を以て勞働者に反對の態度を取ること

を餘儀なくされ、そしてその結果として勞働者は急進黨を支持することを拒否してフランス議會における獨立的勞働者黨を組織するに至つたのである。

（註三九） ロシアの穀物の輸入を低下せしめたところのドイツにおける高い穀物關稅の採用に基く露獨の衝突が問題になつてゐる。その本質は穀物市場におけるロシアとプロシャとの地主の鬪爭に歸着するこの衝突は、ロシアにとつて不利な一八九四年の通商條約によつて解決された。

（註四〇） 東方における危機といふのは、一八七七―一八七八年の露土戰爭のことで、この戰爭において、ロシアは、インドへの路を確保することを目論んで、トルコを攻擊した。これは、インドにおける自己の影響のために鬪爭しつゝあつたイギリスとの衝突に不可避的に導いた。バルカン半島におけるスラヴ人の運動によつて露土戰爭を準備したロシアは、軍隊をトルコへ動かした（宣戰布告は一八七七年四月十二日）。イギリスは殆ど公然トルコを援助した。多くのトルコの敗北の結果、ロシアはサン・ステファノ媾和條約（一八七八年二月十九日）を獲得し、そしてこの條約はヨーロッパ・トルコを殆ど消滅させた。

（註四一） 一八八五年四月二十三日附W・ザスリッチ宛のエンゲルスの手紙は、一九二五年に初めて發表された。『「勞働解放」團』（G・W・プレハーノフ、W・I・ザスリッチおよびL・G・デイチのアルヒーフより）、論集第三號、國立出版所一九二五年參照。手紙の拔萃は、レーニン、全集、第三版、第十一卷、五六三―五六四頁に引用されてゐる。

（註四二） レーニンは『ルッスキエ・ヴェードモスチ』の次の論文を引用してゐる、L・N、『カール・マルクス』、一九〇八年三月十四（一）日第五十一號。

（註四三） ：Journal des Débats：――一七八九年に創刊された、最も古いフランスの新聞の一つ。一八四八年以來明瞭な自由主義的色彩を示してゐる。九十年代の終りから夕刊新聞になつた。本質においては、『自由カトリック教』の機關紙。世界大戰中は極端に

排外主義的立場を取つた。

（註四四） 論文『マルクス主義と修正主義』は彼の二十五年忌（一八八三―一九〇八年）記念論集『カール・マルクス記念』（一八一八―一八八三年）、O・およびL・ケドロフ出版、ペテルブルグ一九〇八年に初めて掲載された。この論集の執筆者は次の如くであつた。J・ネヴゾロフ、『カール・マルクスの生涯と活動』、――N・ロジコフ、『カール・マルクスと階級闘爭』、――W・バザロフ、『マルクス主義の哲學的基礎に關する問題』、――J・ステクロフ、『マルクスと無政府主義』、――A・フィン＝エノタエフスキー、『カール・マルクスと勞働者』、――G・ローラン・ホルスト、『マルクスとブルジョア革命におけるプロレタリアート』、――W・イリーン――『マルクス主義と修正主義』、――R・ルクセンブルグ、『カール・マルクス記念』、――G・ジノヴィエフ、『マルクスとエンゲルス』、――J・カメネフ、『民主々義から社會主義へ』、――J・ステクロフ、『カール・マルクスの政治的活動』、――P・オルロフスキー、『ロシアにおけるマルクス主義の歴史のために』、――M・タガンスキー、『マルクスのロシア論』。書物は發行の後差押へられた。この論集はロシア社會民主勞働者黨内において哲學問題を環つて論爭が正に激化せんとしてゐた時に出版されたので、ボリシェヴィズムの歴史において大なる意義を持つてゐる。この論集にはまだ經驗批判論者（例へばバザロフ）も一緒に執筆してゐるが、レーニンはすでに彼等に對して斷乎として宣戰を布告してゐる。當時のレーニンの立場についてはゴーリキー宛の手紙が參照さるべきである。

（註四五） こゝにレーニンは、『資本論』第一巻第二版の跋から、ヘーゲルに對するブルジョア教授的態度に關するマルクスの批評を引用してゐる。『今日教養あるドイツにおいて法螺を吹いてゐる氣むづかしい、横柄な、そして凡庸な亞流は、勇敢なメンデルスゾーンがレッシングの時代にスピノーザを取扱つたと同じやうに、卽ち「死せる犬」として、ヘーゲルを取

扱ふことに滿足してゐた』。(また一八六八年三月六日附クーゲルマン宛のマルクスの手紙參照)。

(註四六) 修正主義の歷史の大要を記しておかう。

E・ベルンシュタインは一八九七年『ノイエ・ツァイト』に揭載された論文 „Probleme des Sozialismus“(『社會主義の諸問題』)においてマルクスの學說の批判を以て立ち現はれた。ベルンシュタインの批判はたゞマルクスの經濟學說や、その社會學說のみならず、哲學、辯證法的唯物論にも關係してゐた。ベルンシュタイン主義はその本質において小ブルジョア的傾向を表現するものであつて、階級鬪爭の代りに階級協調を說敎し、プロレタリアートの……の必然性を否定し、社會民主黨と自由主義黨との聯合を要求し、革命的辯證法を否定した。ベルンシュタインの論文集は單行本 „Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie“, Dietz-Verlag 1899 (『社會主義の諸前提と社會民主黨の任務』、ディーツ出版部、一八九九年)として出版された。最初にベルンシュタインの批判を以て現はれたのは、ドイツ社會民主黨內における修正主義の存在を聲明したパルヴスであつた。彼に次いで正統派マルクス主義の見地からベルンシュタインを詳細に批判したのはR・ルクセンブルグ、G・プレハーノフおよびK・カウツキーであつた。修正主義の問題は、一八九八年十月に開かれたスッツガルト大會において初めて廣汎に討論された。ベルンシュタインの反對者の間には二つの傾向が明かになつた。卽ちK・カウツキーとA・ベーベルとを先頭とする多數派は、ベルンシュタインとの觀念的鬪爭、その誤謬の暴露には贊成であつたが、彼に對して何等かの組織的方策を取ることには反對であつた。小數派(パルヴスとルクセンブルグ)とはヨリ嚴格な立場を取つた。

一八九九年十月ハンノーフェル黨大會は『黨の基本的見解および戰術に對する攻擊』の問題を吟味した。修正主義者達(ダヴィッド)は社會民主黨の政策および戰術の再檢討と黨を民主々義的改良黨へ轉化するこ

とゝを要求した。大會は黨の從來の戰術を維持する決議を採用した。修正主義をめぐる活潑な討論は一九〇一年九月リューベック大會で展開された。ベルンシュタインは、大會に現はれて、『批判の自由』を要求した。ベーベルの次の決議が採用された、『大會は我黨のヨリ以上の精神的發展のために、自己批判の必要を無條件に承認する。しかし同志ベルンシュタインが近年なしつゝある批判の極めて一面的な性質は、ブルジョア社會とその代表者との批判に渉らないで、彼を曖昧な地位に陷らせ、且つ多數の同志の不滿を喚び起した。同志ベルンシュタインがこれを自覺し且つ適當に自己の立場を變へることを期待して、大會は當面の仕事に移る』。ドレスデン大會（一九〇三年）は修正主義の問題を一層鋭く提起し、そしてこの大會は階級的矛盾を隱蔽しようとするあらゆる試みを討議した。決議は二八八票對一一票の多數を以て採用され、そしてその中にはすべての最も著名な修正主義者——ベルンシュタイン、ダヴィッド、エルムその他が加はつてゐた。

一九〇八年ドイツ社會民主黨の日和見主義流派は月刊雜誌 „Sozialische Monatshefte" において廣汎なカンパニヤを開始し、そしてこの雜誌にはベルンシュタインが活潑に寄稿した。修正主義の支持者達はこの雜誌において自由主義的ブルジョアジーに對する社會民主黨の好意的態度の必要の『理論的基礎づけ』を與へた。正統主義と修正主義との鬪爭は主として理論的な地盤から實際的な地盤へ移つた。豫算の討議に際してドイツ社會民主黨の多數派は、ブルジョア社會の豫算がプロレタリアートを資本家階級へ階級的に從屬させる手段であると看做して、反對投票した。バーデンおよびバーヴァリア社會民主黨フラクションは、『豫算のすべての細目に對して自ら責任を負ふものではないが、而も原則において財政法を承認する』と聲明した。ドイツのみならず、またロシアの(『レーチ』、第百八十六號、一九〇七年）ブルジョア新聞は、修正主義者のこの決議を共鳴を以て迎へた。ニュールンベルク黨大會（一九〇八年）において、南ドイツの日和見主

義者の指導者ダヴィッドは、から聲明した、黨は今まで『階級鬪爭の抽象的原則』によつて指導されたが、今や賛成者の上層は改良主義的、議會的鬪爭方法を取らねばならぬ、と。豫算の賛成投票の支持者は大會において黨の分裂を以て威嚇した。豫算に賛成投票しないことを提議した黨指導部の決議は二五八票對一一九票を以て採用された。修正主義者の『實際的』活動はノスケの場合に一層明かに反映された、即ちノスケは國會の代議士であつたが、國會に綱領演說を以て現はれて、から聲明した、ドイツ社會民主黨は各〻の防衞戰爭においては『自己』の政府の側につき、『祖國』を運命の恣意に任せないであらう、と。

正統派と修正主義者との間の鬪爭は他の國々においても不可避的であることが示された。フランス勞働黨においては正統派的＝マルクス主義的方向はゲードによつて率ゐられてゐた。すでに一八八二年にサン・エチエンヌ大會においてフランスの黨は革命的政策とプロレタリアートの獨裁とを要求するゲード派と、ポシビリスト一名ブルース派とに分裂した。後者を指導したのはポール・ブルースであつて、彼はマルクス主義とプルードン主義とを結びつけようと試み、プロレタリアートの社會主義的目的を隱蔽して、社會主義は與へられた瞬間において可能な（possible）、個々の部分的要求を次々と實現することによつて實現されうると考へた。無政府主義を通じて社會主義に到達したP・ブルースは、社會主義のブルジョア民主々義運動への墮落の明瞭な表現であつた。

一九〇〇年代にはフランスの修正主義者の先頭にジョーレスが立つてゐた。彼は一九〇五年に合同したフランス社會黨の議會フラクションの指導者で、マルクス主義と觀念論とを調和させようと試みた社會主義者であり、ミルランをも支持したところの階級協調の支持者であつた。

ベルギー勞働黨における正統派的＝マルクス主義的見地の代表者は、後には明白な日和見主義者となつたルイ・ブルッケルであつた。勞働組合運動に關する彼

の報告および決議案にレーニンはスツットガルト大會において協力した。その後一九一一年、ブルッケルは小册子『ベルギーにおける勞働者運動』を書き、その中においてベルギー勞働黨における改良主義を批判した。ベルギー勞働黨の修正派を率ゐたのはE・ヴァンダーヴェルデであつて、彼は自由主義黨との聯合政策を組織的に説教した。哲學の領域においてはヴァンダーヴェルデは公然辨證法的唯物論に反對した。

修正主義者に對して革命的マルクス主義理論を擁護した第二インターナショナルの理論家達――カウツキー、プレハーノフ、ゲード――は、世界戰爭の勃發以來革命的マルクス主義を裏切つた。極く少數のマルクス主義理論家のみが革命的マルクス主義に忠實であつた。

（註釋七） サンヂカリズムは社會黨の議會的改良主義および日和見主義的戰術に對する反動として出現し、主としてラテン諸國に普及された。すべてのサンヂカリストは、ブルジョア社會を鋭く批判しつゝ、勞働者階級の解放は勞働者自身の事業でなければならないと考へ、そしてこの命題をば政治と無關係の勞働と資本との經濟鬪爭として理解した。改良主義者の議會的戰術に彼等は政治の否認といはゆる『直接行動』とを對置した。サンヂカリストは黨の役割を否認して、黨をたゞ選擧人の投票を掻き集めるための機關と見た。かゝる考慮から出發して、サンヂカリストはプロレタリアートの獨裁に對して敵對的態度を取り、勞働者は國家權力の獲得を目差すべきではなくて、たゞ國家の破壞を目差すべきだと考へた。彼等は、經濟鬪爭の目的を追求し且つたゞかくしてのみプロレタリアートを社會主義に導くところの、勞働組合組織（サンヂカ）を勞働者階級の唯一の組織と考へた。街頭のデモンストレーション、ボイコット、サボタージュ、そして最後にゼネラル・ストライキ――これが革命的サンヂカリストの戰術であつた。生産器具と生産手段とを社會的利益のために收奪することを目的とする一般的社會的ストライキが、サンヂカリストの意見によれば、

社會主義への移行の決定的な且つ唯一の眞實の手段でなければならぬ、といふ。

サンヂカリズムは一時（一九〇六—一九〇九年）ロシアに普及され始めた。經濟主義者——テプロフ、クリチェフスキーがそれに誘惑された。ボリシェヴィキの中ではA・W・ルナチャルスキーがそれに傾いた。

一九一四年戰爭前にはサンヂカリストは反議會主義的、反軍國主義的宣傳を行つた。世界戰爭中におけるサンヂカリズムの運命は、勞働組合運動に對して大なる影響を持つてゐたフランスのサンヂカリズムにおいて最も明白に示された。フランスのサンヂカリストの多數派は排外主義に傾き（ジュオー）、一部分は右翼チンメルワルド派を成し（A・メルハイム、後には排外主義者となり、ジュオーの戰友となる）、最後に、第三のグループは、國際聯絡復舊委員會に活潑に參加し、チンメルワルド中央派へ加盟した（モンムッソー、モナト、ロスメル）。最後のグループは機關紙 "La Vie ouvrière"（『勞働者生活』）を發行した、そして一九一九年五月國際聯絡復舊委員會を改造したインターナショナル委員會の組織者であり參加者であつた。このグループは初期におけるコンミュニスト・インターナショナルへ加盟した。しかしこの傾向の指導者達は自己のサンヂカリスト的偏見を完全に克服することができず、そして若干の例外を除いて、コンミュニスト・インターナショナルから脱退した。

（註釋八）『ズヴェズダー』——ペテルブルグにおいて一九一〇年十二月二十九（十六）日から一九一二年十月十八（五）日まで發行されたボリシェヴィキの合法新聞。最初新聞は週刊であつたが、一九一二年二月三日（一月二十一日）からは週二回發行となり、一九一二年三月二十一（八）日からは週三回發行となつた。新聞は第三十三號（一九一二年五月五日（四月二十二日））で閉鎖された。

一九一二年三月十日（二月二十六日）から、『ズヴエズダー』と同時に、そして後にはその一時的閉鎖の合間に、ペテルブルグで新聞『ネヴスカヤ・ズヴェズ

ダー』が發行された。『ネヴスカヤ・ズヴェズダー』の第二十七號は一九一二年十月十八（五）日に發行された。この新聞は『ズヴエズダー』の直接の繼續で、『ズヴェズダー』の押收または閉鎖の場合にそれに代ることを目的としたのであつた。一九一二年大衆的勞働者運動の勃興と共に、これに應ずるもつと大衆的な日刊新聞の必要が痛感され、同年五月五日（四月二十二日）『プラウダ』が創刊され、『ネヴスカヤ・ズヴェズダー』は廢刊された。

（註四九） この論文は『外國通信』の欄に掲載された。この論文の表題は小見出しとして印刷されてゐる。論文の表題の次につけられてゐる番號（一）は、その筆者W・I・レーニンが同じテーマについて一聯の論文を書かうと考へてゐた、と推察する根據を與へるものである。けれども、その後論文はこの表題では現はれなかつた。『ズヴェズダー』のこれに續く諸號の同じ欄には他の筆者達の小通信が掲載された。

（註五〇） パンネケックの著書には引用文の次の部分のみがある、『自由主義的な進歩的政策の積極的な目的は勞働者を迷路に導くことである』。（„das positive Ziel der liberalen for schriftlichen Politik ist die Irreführung der Arbeiter“.） レーニンによつて引用文の中に引用されてゐるその後の言葉は、たゞそれに續く二つのパラグラフの大意を寫したものである。

（註五一） ヴェヒー派——モスクワ一九〇八年刊、N・A・ベルヂャエフ、S・N・ブルガコフ、M・O・ゲルシェンゾン、S・A・イズゴエフ、B・A・キスティャコフスキー、P・B・ストルーヴェ、S・L・フランクの論集、『ヴェヒー』（『道標』）より出づ。『ヴエヒー派』とは自由主義的インテリゲンチャの反動的傾向を指す言葉として用ひられてゐる。レーニンの論文『「ヴェヒー」について』（一九〇九年、全集、第十四卷、二一七—二二三頁）參照。

（註五二） 『ハインドマンの記錄』、 „The Record of an adventurous Life“ By Henry M. Hyndman. London. 1911. X+460. と題されたディオネオの論文

は、一九一一年十月二十七（十四）日、『ルッスキエ・ヴェードモスチ』、第二百三十六號に掲載された。

（註五三）W・I・レーニンによつて引用されてゐる一八八一年十二月十五日附ゾルゲ宛のマルクスの手紙には、ハインドマンについて次の如く書かれてゐる――

『これに先立つて、六月初旬、ハインドマン（Hyndman）といふ人によつて、「萬人のためのイギリス」（England for all）といふ小著が公刊された。それは「民主聯盟」――半ばブルジョア的で半ばプロレタリア的な種々のイングランドおよびスコットランドの急進諸團體の最近結成された協會――のプログラムの解說として書かれたといふ觸れこみである。勞働と資本に關する諸章は「資本論」からの逐次的拔萃にすぎないか、或ひはそのまはりくどい敷寫しにすぎない、けれども……〔著者は〕「資本論」にもその著者にも一言も言及せず、たゞ彼の序文の終りで、「第二章および第三章に含まれてゐる思想および事柄の多くのものは、一人の大思想家兼獨創的著述家の著書に負ふものである云々」と述べてゐる。僕にあてゝ彼は謝罪狀をよこした、即ち「イギリス人は外國人に教へられることを好まない」「僕の名は非常に憎惡されてゐた」等々。すべてこれらのことにも拘らず、この小著は――それが「資本論」からこそどろしてゐる限りにおいて――いい宣傳をしてくれる、この男は「氣弱い」人間であり且つ一事を徹底的に研究する忍耐心――何事を學ぶにも第一條件だ――をすら持つこと極めて少いのであるが。すべてこれらの愛すべき小ブルジョア的著述家達――社會主義者ではないとしても――は、彼等が天惠によつて手に入れたであらう新思想から直ちに貨幣または名聲または政治的資本を作り出さうとする熱望を持つてゐる』。（Briefe und Auszüge aus Briefen von Joh. Phil. Becker, Jos. Dietzgen, Friedrich Engels, Karl Marx u. A. an F. A. Sorge und Andere. Stuttgart. 1906, S. 180–181.）（邦譯、マルクス＝エンゲルス全集、第二十四卷、一七六―一七七頁）。

（註五四） ヘンリー・ジョージの評價は一八八一年六月三十日附ゾルゲ宛の手紙においてマルクスによつて與へられてゐる。『この男は――とマルクスは書いてゐる――理論的には全く時代後れだ！ 剩餘價値の性質については彼は何も理解してゐない、だからイギリスのお手本に倣つて、剩餘價値の獨立せる諸部分についての――利潤、地代、利子等についての、而もイギリスには劣る思辨の中をさまよつてゐる』（前掲、スツットガルト版、ゾルゲ宛書簡集、一七六頁）（邦譯、前掲版、一七一頁、なほ本譯書、一六二頁參照）。

（註五五） ディーツゲンの諸論文、『科學的社會主義』（一八七三年）、『社會民主々義の哲學』（一八七六年） および『一社會主義者の認識論界探檢』の『緒論』（一八八六年）が問題になつてゐる（レーニン、全集、第十三卷、二〇二頁、邦譯、『唯物論と經驗批判論』、岩波文庫版、中卷、一八〇頁比照）。

W・I・レーニンの本論文に續いて引用されてゐるJ・ディーツゲンからの引用は、『社會民主々義の哲學』（第一および第三の引用） および『一社會主義者の認識論界探檢』から取られてゐる。『僧侶主義の學位付きの從僕』といふ表現は『社會民主々義の宗教』からである（レーニン、全集、第十三卷、一一三、二〇〇、二〇一、二七七および二七八頁、邦譯、前掲書、中卷一六、一七五、一七六、下卷一三四、一三五頁比照）。

（註五六） 『ソヴレメンヌイ・ミール』一九〇七年第七號におけるG・W・プレハーノフの論文『ヨゼフ・ディーツゲン』（G・W・プレハーノフ全集、第十八卷、國立出版所、一九二五年、二七四―二九二頁に再錄されてゐる）が問題になつてゐる。

（註五七） 言及されてゐる箇所はA・ベーベルの『我が生活より』第一卷、『幼年時代および少年時代』の章に含まれてゐる。

（註五八） 一八九九年十月九―十日ハンノーフェルの社會民主黨大會におけるベルンシュタイン主義に對するA・ベーベルの演説、および一九〇三年九月十三

—二十日ドレスデンの社會民主黨大會における議會戰術、そしてまたブルジョア新聞との提携の問題に關する演說が問題になつてゐる。

（註五九） これは手紙の文字通りの引用ではなくて、一八四四年九月末の手紙（„Briefweechsel", B. I, S. 1, 邦譯、全集、第十七卷、七頁）と一八四五年三月十七日附の手紙（同上、S. 21, 邦譯、二八頁）とを適宜に綴り合はせたものである（譯者）。

（註六〇） これは手紙の文字通りの引用ではなくて、要點の拔萃である。これに續く括弧なしのエンゲルスの言葉は、勿論、一層さうである（譯者）。

昭和十一年九月二十日 印刷
昭和十一年九月二十五日 發行

譯者檢印

カール・マルクス

定價金九十錢

譯者 西雅雄
東京市神田區美土代町四

發行者 中村德二郎
東京市麹町區土手三番町二九

印刷所 谷口印刷所
代表者 谷口熊之助

發兌 白揚社
東京市神田區美土代町四
振替東京 二五四〇〇
電話神田(25)二二八五

全三十巻　レーニン重要著作集　*印新譯　ゴチック活字既刊

(1)	農民生活に於ける新經濟運動*	.80	.08
(2)	**「人民の友」とは何ぞや**	.70	.08
(3)	**ナロードニキの經濟的內容**	.50	.08
(4)	**社會民主々義の任務・抗議**	.70	.08
(5)	**浪漫派經濟學の批判**	1.00	.08
(6)	**新工場法***	.40	.06
(7)	**市場の理論**	.30	.04
(8)	**農業に於ける資本主義**	.50	.06
(9)	ロシアに於ける資本主義の發達(上)*	1.50	.08
(10)	同(下)*	1.50	.08
(11)	**農業問題と「マルクス批判家」***	.[illegible]0	.06
(12)	何を爲すべきか*	.80	.06
(13)	**貧農に訴ふ**	.30	.04
(14)	**一歩前進二歩退却**	.70	.08
(15)	十九世紀末に於けるロシアの農業問題*	.50	.04
(16)	唯物論と經驗批判論*	1.50	.12
(17)	社會主義と宗教*	.40	.06
(18)	ストライキの統計に就て*	.50	.06
(19)	**カール・マルクス***	.90	.06
(20)	民族問題に就て*	1.00	.08
(21)	**帝國主義戰爭**	1.[illegible]0	.10
(22)	**第二インタナショナル**	.[illegible]0	.04
(23)	**帝國主義論**	.50	.06
(24)	ソヴエート政權の當面の任務*	.50	.06
(25)	第三インタナショナル	.70	.06
(26)	**左翼小兒病**	.50	.06
(27)	現物稅に就て*	.70	.06
(28)	**勞働組合論***	.70	.06
(29)	**協同組合論**	.50	.06
(30)	レーニン年譜及著作目錄*	1.20	.08

¥ .90